

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

円山遺跡

熊谷市内遺跡(旧大里町)の発掘調査報告書

2011

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

まる やま
円 山 遺 跡

熊谷市内遺跡(旧大里町)の発掘調査報告書

2011

埼玉県熊谷市教育委員会

序

熊谷市は2度を超える合併を経て、県北初の20万都市となり、平成21年4月から「特例市」へ移行しました。現在は、新たな熊谷の未来を拓くため、魅力ある郷土を誇れるまちづくりを進めています。

市域には、関東随一の大河川である利根川と県土を貫流する荒川の2大河川に育まれた肥沃な大地と、多様な生物が生きる豊かな自然があります。こうした自然環境のもと、地上には先人たちの残した建物や工芸品など多くの文化財が伝えられ、地下には広範囲に埋蔵文化財が眠っています。

代表的な遺跡として、国指定史跡の宮塚古墳、埼玉県指定史跡となっている塩古墳群・とうかん山古墳・甲山古墳などの古墳が知られています。

すでに、これらの遺跡は後世に伝えるべく保護の施策が図られているところですが、多くの埋もれたままの遺跡では各種の開発に伴う工事前に、記録保存のため発掘調査を実施しています。貴重な発見も相次いでいますが、このような発掘調査の件数は、すでに360件を超えており、近年の増加が顕著です。

本書における円山遺跡につきましても、土・山砂利採取の工事に際して発掘調査を行ったもので、弥生時代から平安時代までの住居跡や土器などの遺物が発見されています。

このたび、埋蔵文化財調査報告書として、その成果をまとめましたので、郷土研究等の基礎資料として、学校教育から学術方面と広く活用されることを願います。

本書の刊行に際し、発掘調査から報告書刊行までに、御協力をいただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

熊谷市教育委員会教育長 野 原 晃

例 言

1. 本書は埼玉県熊谷市（旧大里町）箕輪字円山地内に所在した円山遺跡にかかる発掘調査結果をまとめた報告書である。

2. 遺跡名の円山遺跡は、熊谷市（旧大里町）64-012号遺跡である。

3. 発掘調査は円山遺跡の範囲内で行われ、試掘調査により範囲を確定した後、本調査を実施している。いずれも調査主体は大里村教育委員会（当時）である。

発掘調査の期間は昭和60年6月17日～9月17日の間に実施した。

整理事業は発掘調査後旧大里町教育委員会で行われていたが、平成18年度以降、熊谷市教育委員会がこれを引継ぎ22年度事業として報告書を刊行した。

4. 発掘調査の事務運営、現場監理及び遺物整理事業の実施については次のとおりである。

発掘調査は、大里村教育委員会（当時）に大里村遺跡調査会を組織し、小久保徹（埼玉県立さきたま資料館員－当時）を調査担当者として実施した。現場での発掘指導は若松良一（埼玉県立さきたま資料館員－当時）が主に当たった。

遺物整理・報告書作成業務は大里町教育委員会に継続され、合併後は熊谷市教育委員会が受け継いでいる。よって、本書の作成業務は熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係が行った。本文の執筆は新井端が担当した。

なお、発掘調査実施後報告書刊行までには相当期間を経ているため、経緯や発掘記録などに一部不明の部分があり、訂正・検証をなしえなかった部分があることをお断りしておきたい。

5. 本報告分の遺跡に関する出土品及び測量図・記録写真等の記録資料は熊谷市立江南文化財センターで保管している。

本報告分にかかる出土品・記録資料の管理番号は「2401」である。

6. 発掘調査から本書の刊行までには関係者・研究者及び多くの機関からご教示・ご協力を得た。列記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略）

埼玉県教育局指導部文化財保護課（当時） 埼玉県立さきたま史跡の博物館（当時）

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 柳田敏司 金井塚良一 根岸喜夫 菅谷浩之 坂本和俊

利根川章彦 若松良一 宮島秀夫 江原昌俊 鳥羽政之

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 挿図縮尺は、各挿図中に示してある。

遺構の略記号は次のとおりである。

S I 竪穴住居跡 S S 集石土壙 S K 土壙 S D 溝 S E 井戸 S Z 方（円）周溝墓

- 2 挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。

- 3 挿図中の遺物の縮尺は、次のとおりである。

土器片・土器・鉄製品… 1／2・1／3・1／4・1／6

石器・石製品… 1／1・1／3・1／4

土製品・滑石製模造品・古銭… 1／1 瓦・石製品… 1／4

- 4 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・須恵器・土器・石器断面 白抜き

灰釉陶器・断面 アミ目懸（10%）

回転糸切り 

回転ヘラ削り 

- 5 挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、（ ）が付されるものは推定値を表す。

- 6 遺物拓影図は、原則として向って左側に外面を示した。なお、内外面両方を示す場合には左側に内面、右側に外面を示した。

- 7 写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。

航空写真は、国土地理院版を使用した。

- 8 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行1994）を参考にした。

石材の鑑定については、海野芳聖氏にご教示を得た。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

円山遺跡の発掘調査	1
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 遺跡の現状と調査経過	1
1 遺跡の概要と過去の調査	1
2 調査の契機と理由	4
第2節 発掘調査の経過	4
1 発掘調査の体制	4
2 発掘調査の経過	5
第Ⅱ章 遺跡の環境	7
第1節 円山遺跡周辺の地理的環境	7
第2節 円山遺跡と周辺の遺跡	7
1 遺跡の考古学的環境	7
2 遺跡の歴史的環境	9
第Ⅲ章 遺跡の概要	12
第1節 A・B地点の概要	12
第2節 検出された遺構と遺物	12
1 方形・円形周溝墓	12
第1号方形周溝墓	12
第2号方（円）形周溝墓	17
2 竪穴式住居跡	18
第1号住居跡	18
第2号住居跡	18
第3号住居跡	18
第4号住居跡	20
第5号住居跡	20
第6号住居跡	20
第7号住居跡	24
第8号住居跡	24

第9号住居跡	24
第10号住居跡	30
第11号住居跡	30
第12号住居跡	30
第13号住居跡	33
第14号住居跡	33
第15号住居跡	40
第16号住居跡	40
第17号住居跡	44
第18号住居跡	44
第1号溝	50
第2号溝	50
第3号溝	50
第4号溝	50
第5号溝	50
第1号～4号土壇	50
3 一括の出土遺物について	54

第Ⅳ章 結 語	65
1 弥生時代の遺構と遺物	65
2 古代の遺構と遺物	65
3 円山遺跡出土の烙印について	66

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	円山遺跡の位置と遺跡範囲	2	第28図	円山遺跡第14号住居跡	36
第2図	円山遺跡発掘調査地点図	3	第29図	円山遺跡第14号住居跡遺物出土状態	37
第3図	円山遺跡グリッド配置図	5	第30図	円山遺跡第14号住居跡出土遺物 1	38
第4図	円山遺跡A区遺構配置図	10	第31図	円山遺跡第14号住居跡出土遺物 2	39
第5図	円山遺跡B区遺構配置図	11	第32図	円山遺跡第15号住居跡	41
第6図	円山遺跡方形周溝墓	13・14	第33図	円山遺跡第15号住居跡出土遺物	41
第7図	円山遺跡円形周溝墓出土遺物 1	15	第34図	円山遺跡第16号・17号・18号住居跡	42
第8図	円山遺跡方形周溝墓出土遺物 2	16	第35図	円山遺跡第16号・17号・18号住居跡遺物出土状態	43
第9図	円山遺跡方（円）形周溝墓	17	第36図	円山遺跡第16号住居跡出土遺物 1	45
第10図	円山遺跡第1号住居跡・第1号溝跡	19	第37図	円山遺跡第16号住居跡出土遺物 2	46
第11図	円山遺跡第1号住居跡出土遺物	19	第38図	円山遺跡第17号住居跡出土遺物 1	47
第12図	円山遺跡第2号・3号住居跡	21	第39図	円山遺跡第17号住居跡出土遺物 2	48
第13図	円山遺跡第3号住居跡出土遺物	21	第40図	円山遺跡第18号住居跡出土遺物	49
第14図	円山遺跡第4号住居跡遺物出土状態	22	第41図	円山遺跡第3号・4号溝	51
第15図	円山遺跡第4号住居跡出土遺物	23	第42図	円山遺跡第4号溝出土遺物	52
第16図	円山遺跡第5号住居跡	25	第43図	円山遺跡第5号溝	53
第17図	円山遺跡第7号住居跡	25	第44図	円山遺跡第1号・2号・3号・4号土壌	53
第18図	円山遺跡第5号・6号・7号住居跡出土遺物	26	第45図	円山遺跡一括・表採出土遺物	55
第19図	円山遺跡第6号・8号・9号住居跡、 第8号住居跡遺物出土状態	27	第46図	円山遺跡縄文土器	56
第20図	円山遺跡第8号住居跡出土遺物	28	第47図	円山遺跡出土遺物一括 1	57
第21図	円山遺跡第10号住居跡	29	第48図	円山遺跡出土遺物一括 2	58
第22図	円山遺跡第11号住居跡	29	第49図	円山遺跡出土烙印実測図	67
第23図	円山遺跡第12号住居跡	29	第50図	「有」文字、烙印実測図・模式図	68
第24図	円山遺跡第10号・11号・12号住居跡出土遺物	31	第51図	烙印のある馬の姿	70
第25図	円山遺跡第13号住居跡	32	第52図	「有」文字烙印のある馬	70
第26図	円山遺跡第13号住居跡出土遺物 1	34	参考図	船木遺跡発掘調査区域	6
第27図	円山遺跡第13号住居跡出土遺物 2、 第14号住居跡出土遺物（弥生）	35			

表 目 次

第1表	方形周溝墓出土遺物観察表	59	第10表	第15号住居跡出土遺物観察表	61
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	59	第11表	第16号住居跡出土遺物観察表	61
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表	59	第12表	第17号住居跡出土遺物観察表	62
第4表	第4号住居跡出土遺物観察表	59	第13表	第18号住居跡出土遺物観察表	62
第5表	第5号・6号・7号住居跡出土遺物観察表	60	第14表	第4号溝出土遺物観察表	62
第6表	第8号住居跡出土遺物観察表	60	第15表	一括・表採出土遺物観察表	62
第7表	第10号・11号・12号住居跡出土遺物観察表	60	第16表	縄文土器観察表	63
第8表 a	第13号・14号住居跡出土遺物観察表	60	第17表	石器等観察表	63
第8表 b	第14号住居跡出土遺物観察表	61	第18表	古代出土烙印の一覧	69
第9表	第14号住居跡出土遺物観察表	61			

写 真 図 版

図版 1	円山遺跡航空写真1974年	図版14	方形周溝墓出土遺物
図版 2	円山遺跡周辺の航空写真変遷（1980～1998年）	図版15	住居跡出土遺物
図版 3	発掘調査区航空写真	図版16	住居跡出土遺物
図版 4	発掘調査区A区遠景・同B区遠景	図版17	住居跡出土遺物
図版 5	発掘調査区A区遠景・同A区遺構確認状況	図版18	住居跡出土遺物
図版 6	方形周溝墓完掘状況	図版19	住居跡出土遺物
図版 7	方形周溝墓主体部・方（円）形周溝墓完掘状況	図版20	住居跡出土遺物
図版 8	第1号・第2号・第3号住居跡完掘状況	図版21	住居跡出土遺物
図版 9	第4号・第5号・第7号住居跡完掘状況	図版22	住居跡出土遺物・烙印
図版10	第6号・8号・9号・第10号・第11号住居跡完掘状況	図版23	住居跡出土遺物・烙印
図版11	第13号・第14号・第15号住居跡完掘状況		
図版12	第16号・第17号・第18号住居跡完掘状況		
図版13	第16・17・18号住居跡完掘状況・遺物出土状態・第18号住居跡烙印出土状態・第4号住居カマド跡・第8号住居カマド跡・第1号溝・第5号溝		

円山遺跡の発掘調査

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 遺跡の現状と調査経過

1 遺跡の概要と過去の調査（第1・2図）

昭和60年当時、円山遺跡は埼玉県大里郡大里村大字箕輪字円山の丘陵上に所在していた。遺跡の範囲は当時の遺跡地図や航空写真を観察した地形の変遷（図版1）を見ると、標高10m内外の台地を侵食した細長い谷に取り囲まれた低平な丘状の畑地に広がっていた。畑地の多くは桑園で斜面は山林地となっていた。谷に挟まれた台地の主幹部や支幹部を区切ると島上に孤立し、台地下と往来がほとんど困難になる。北・東方には荒川の流れと大里沖積地を望む眺望が遥かに開け、埼玉古墳群の陵まで望めた。また、それぞれの丘上は円山遺跡のほか、船木遺跡、大林遺跡、桜谷遺跡などの集落跡とともに円山古墳群も確認されていた。

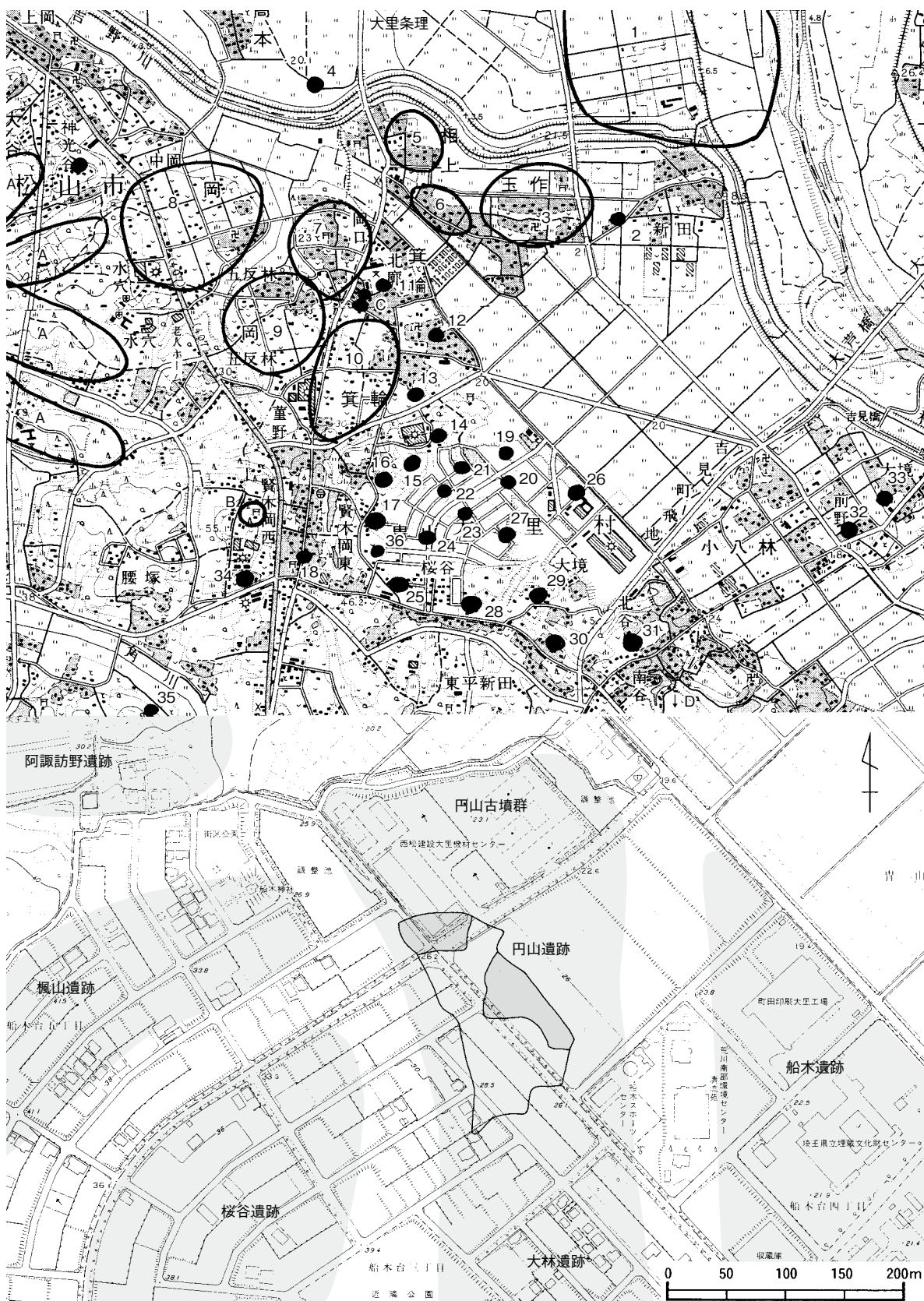
この地域での最初の発掘調査は土・山砂利採取に起因するもので、昭和48年夏に船木遺跡で行われ弥生時代から古墳時代の竪穴式住居跡が十数軒確認され（佐藤1973）注目を集めた。船木遺跡は台地縁辺の平坦部に造られた集落で船木神社の杜と尾根を残して削平された。

以降も土・山砂利採取が続き、昭和50年ころには台地を削り取る大規模な土木工事が付近の台地縁を蚕食していた（図版2）。ほとんどの工事に際して発掘調査は行われてはならず、大半の遺跡は消滅していた。必然的に円山地域での開発と遺跡の保存が問題化し、昭和50年の円山地内で大規模な土・山砂利採取工事の際には、円山古墳群が姿を消したものの、この古墳群中の3基は発掘調査が行われた。いずれも主体部の残る古墳で凝灰岩の切石を使った横穴式石室が確認され、埴輪、須恵器、鉄製品などが出土している（金井塚1975）。昭和58年には大林遺跡での採土工事が計画され、事前の発掘調査により奈良・平安時代の竪穴住居跡などが確認された。昭和60年には今回報告の円山遺跡の発掘調査が行われた。このころまでに円山の丘をはじめとするかつての台地縁辺の景観は大きく変化を遂げていた（図版2）。

平成時代に入り、箕輪・青山地域を含む一帯に大里南部土地区画整理事業が決定された時点では、東側には工場敷地が造成され、円山の丘もほとんど削平されていた。土地区画整理事業では、当該地に残された遺跡について発掘調査が実施された後、旧地形とともにほとんどが消滅した。平成20年現在、かつての遺跡景観を忍ばせるランドマークはほとんど見当たらない。

上記に述べたように、かつての円山遺跡の地形は現在まったく残ってはいないので、第1・2図などの資料から円山遺跡を取巻く環境・景観を見ていくこととする。

円山遺跡は昭和60年当時、大里村遺跡―県遺跡番号64―012で、集落跡と把握されていた。北へ延びる約500×200mの台地部分の中ほどに位置する畑地で、北側縁辺には斜面林と円山古墳群の地膨れが強い北風から畑を守っていた。西側の谷は台地上の集落の水場に相当し、この谷からは台地上にいたる通路状の緩やかな斜面地が観察される部分は上り下りの道跡であったと思われる。現在は桜谷遺跡との間に溜池（あつが沼）が築かれているが、その築造時期が不明だが湧水等の水の手得やすい場所であったと推定される。南側の台地主幹部には大林遺跡が位置し、東側から侵入する谷により台地尾根が狭ばまっていた。この間約100m前後を測るが、この尾根の狭まった部分はちょうど袋の口のような部分に相当し、ここを閉じると約600m×200mの広大な平坦地が低地と隔絶される。円山と呼ばれた台地平坦面がこれに当たるが、このような地形は後に想定される牛馬飼育のため造られた「牧」の設置場所としても利用し易かったと考えている。この



第1図 円山遺跡の位置と遺跡範囲



第2図 円山遺跡発掘調査地点図 (1/2000)

空間の問題については結語にひとつの考えを提示した。

円山の谷を挟んで東隣の台地尾根は船木遺跡が対面していた。この船木遺跡の台地先端部分は船の舳先のように三角形状を呈し（参考図）、その船首のような高所に船木神社が祀られていた。円山遺跡の範囲は、円山古墳群の調査後設定されたと見え、台地西側の緩斜面部に沿うように凡そ南北200m、東西100mの範囲で、第2図の地籍図によると24筆の畑地に区分されていた（※この筆数は採取計画に記された範囲のみである）。

※第1図 遺跡名 A 三千塚古墳群支群 B 甲山古墳 C とうかんやま古墳 D 田甲原古墳群

- ①下町田遺跡 ②高畑遺跡 ③成願寺遺跡 ④高城町遺跡 ⑤上吉原遺跡 ⑥下中遺跡 ⑦玉太岡遺跡 ⑧鹿島遺跡 ⑨五反林遺跡 ⑩賢木岡遺跡 ⑪北郭遺跡 ⑫中郭遺跡 ⑬番場遺跡 ⑭阿諏訪野遺跡 ⑮楓山北遺跡 ⑯楓山西遺跡 ⑰東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区 ⑱賢木岡東遺跡 ⑲円山古墳群 ⑳円山遺跡 ㉑桜谷東遺跡Ⅰ区 ㉒桜谷東遺跡Ⅱ区 ㉓桜谷東遺跡Ⅲ区 ㉔桜谷東遺跡4区 ㉕桜谷遺跡 ㉖船木遺跡 ㉗尾御林遺跡 ㉘大林南遺跡 ㉙大境遺跡 ㉚大境南遺跡 ㉛北谷遺跡 ㉜前野遺跡 ㉝小八林大境遺跡 ㉞冨山遺跡 ㉟大谷瓦窯跡 ㊱東山遺跡Ⅲ区

2 調査の契機と理由

円山遺跡の発掘調査は、周辺部の山砂利や土採取が盛んに行われるようになり、円山古墳群の調査以来10年ぶりに円山の丘での採取計画が持ち上がったのである。計画の実施に当たっては、関係機関との許認可にかかる協議の中で埋蔵文化財の保護問題が課題となり、当時の大里村教育委員会から、当時の埼玉県教育委員会文化財保護課に協議が持たれた。昭和59年3月26日に事業主より文化財の所在及び取り扱いについて照会がなされた。その計画によると採取面積は14,668㎡で保安地を残しても実採取面積は12,561㎡としていた。本件への回答は教文98号－昭和59年4月20日付けでなされ、「大里村No.12遺跡については、事前の試掘調査を実施すること、現状保存ができない場合には事前に記録保存のため発掘調査を実施すること。」などが通知された。これを受け県教委、村教委、事業者が協議し、同年4月23、24日に県教委立会い指導の上試掘調査が実施された。その結果調査区の一部で弥生時代から平安時代の土器が出土することや住居跡などの遺構が所在するとの確認が得られた。現地の協議では事業者から6月以降3,000㎡の工事予定が示されており、調査範囲の限定と調査の実施に向けて至急の対応が求められ、記録保存のための発掘調査は不可避の情勢となった。

発掘調査の組織については、当時、大里村教育委員会には埋蔵文化財の担当者が配置されていなかったことから、調査会を組織して行うこととなった。困難な状況ではあったが、翌昭和60年5月1日に大里村円山遺跡調査会が発足し、諸準備の後、同年6月から調査が着手された。

第2節 発掘調査の経過

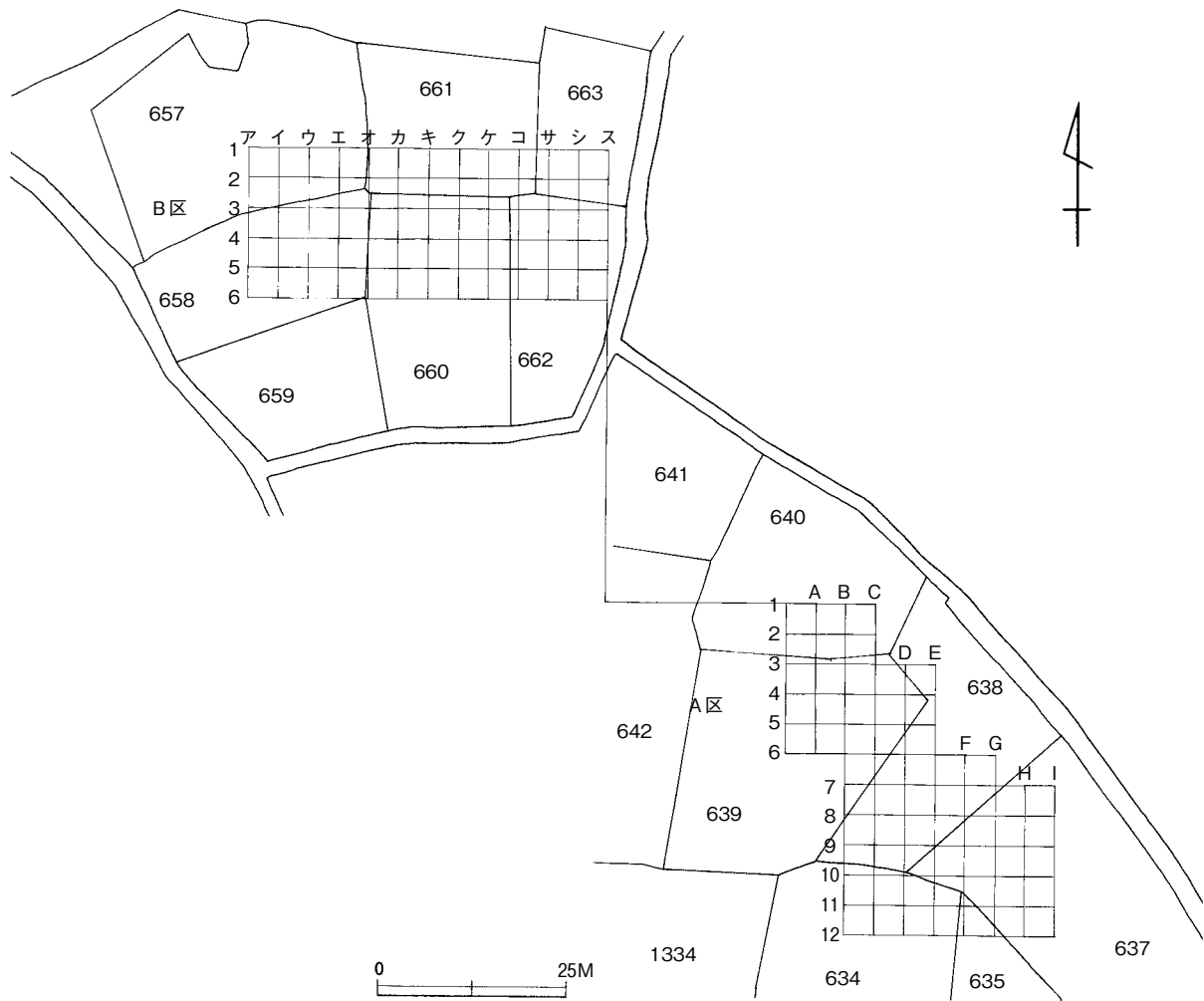
1 発掘調査の体制

発掘調査の実施に当たって組織された「大里村円山遺跡調査会」は下記のとおりである。

顧問	堀 茂平	大里村長	顧問	金井塚 良一	埼玉県立さきたま資料館
会長	小池 敬介	大里村教育委員会教育長	委員長	根岸 喜夫	大里村文化財保護審議委員
委員	大久保 栄治	大里村文化財保護審議委員	委員	柿沼 角太郎	大里村文化財保護審議委員
委員	田口 和夫	大里村文化財保護審議委員	委員	梅沢 多一郎	大里村文化財保護審議委員
監事	大河原 好一	大里村文化財保護審議委員	委員	小島 直隆	大里村文化財保護審議委員
調査員	若松 良一	埼玉県立さきたま資料館			
事務局	斉藤 麻治	大里村教育委員会			
臨時職員（発掘調査 姓のみ） 柳井 小林 松戸 清水 林 二川 坂本 菅谷 新井 白土					

なお、発掘届は昭和60年6月5日付けで事業主体者金子勤氏より提出され、発掘調査届は昭和60年6月5日付けで大里村円山遺跡調査会長より提出された。なお、受理通知は発掘届に対しては昭和60年8月2日付け教文第12—47号で、発掘調査届に対しては教文第11—51号でなされている。また、発掘調査担当者には前記調査員のほかに、小久保徹・杉崎茂樹・田中正夫（いずれも埼玉県立さきたま資料館学芸員 当時）の氏名が届けられていた。

整理・報告書作成作業は、基礎的な水洗・注記・復元作業などを同調査会で行い、その後は大里町教育委員会が継続実施していたが、平成18年度の熊谷市との市町合併により熊谷市教育委員会がこれを引き継ぎ、平成22年事業として作成した。熊谷市教育委員会での整理作業の組織は次のとおりである。



第3図 円山遺跡グリッド配置図 (1/1000)

教育長	野原 晃	教育次長	藤原 清
社会教育課長	斉木 千春	文化財保護担当副参事	小林 英夫
社会教育課副課長	新井 端	同副課長	出縄 康行
同主幹	吉野 健	同主査	寺社下 博
同主査	鯨井 敬浩	同主任	松田 哲
同主任	蔵持 俊輔	同主事	山下 祐樹
同臨時職員			
(整理作業)	荒木千代美 綾川美幸 石井美津子 石川幸子 大島安子 川口志津子 神田康子		
	木村のぶ子 木村有美 小林まゆみ 齊藤千賀子 島野美乃里 清水貴子 清水美紀 須藤千恵美		
	関口智恵子 長尾照征 中島清香 平山雄浩 福島ひとみ 松本美由紀 宮本一江		

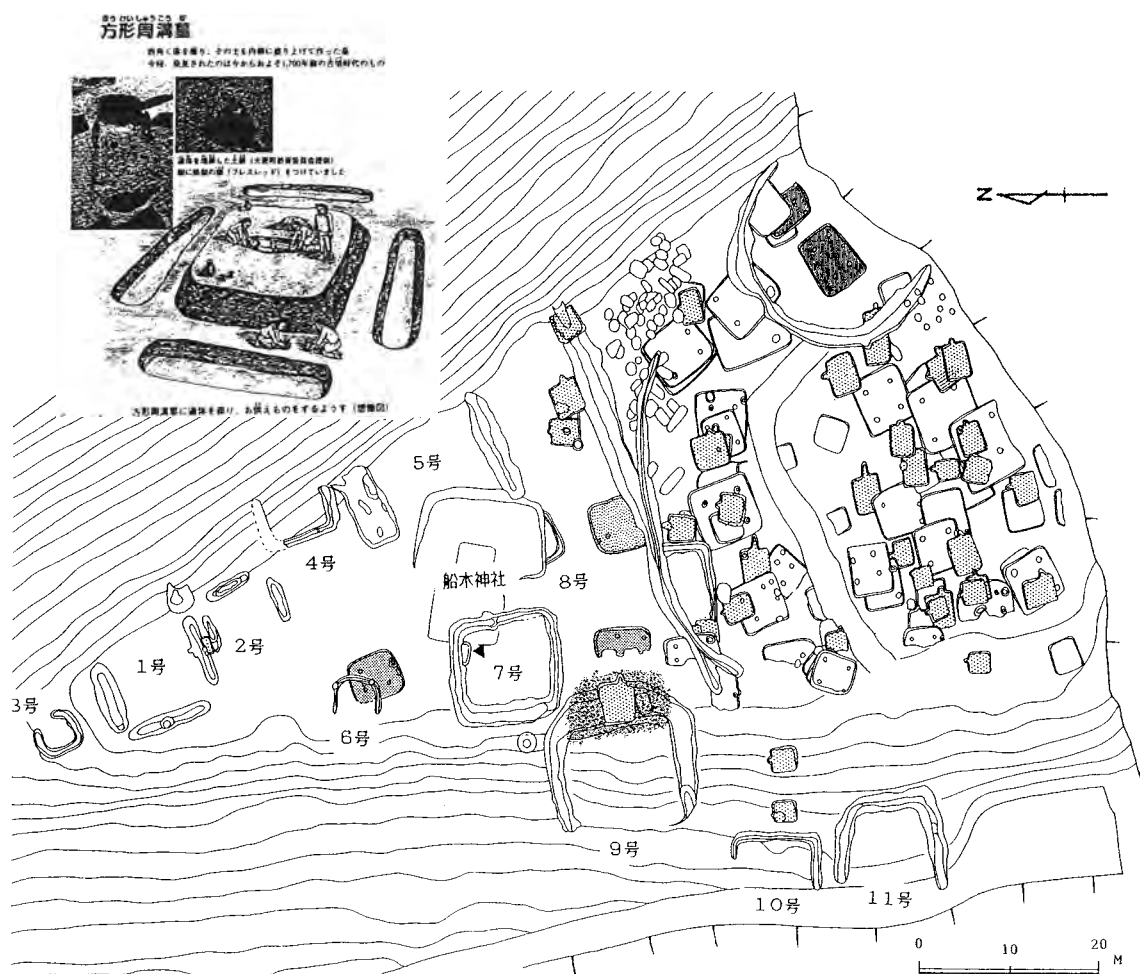
2 発掘調査の経過

昭和59年の試掘調査では第2図に示すような位置に試掘溝を8本設定している。北から順に第1～8号試掘溝としている。試掘溝は幅2m、長さ約70～80mで8本を任意に設定し、遺構・遺物の確認を行った。そ

円山遺跡

の結果第3.4.5.6試掘溝の東端付近に住居跡、溝、土壇を検出した。この付近は地番の657, 658, 659, 660, 661, 662, 663の一群と634, 635, 637, 638, 639, 640の一群に把握されたようであり、実際の発掘調査では前者をB区、後者をA区と区分していた。実際、調査着手の直前には現地は図版3・4に示すような残丘状の立地となっており、調査区の南側は15mほどの急崖となっていた。ここに発掘可能な調査範囲を確保するにはかなりの困難と危険が伴っていた。そのためか発掘調査部分は前年試掘対象地の約4分の1に当たる約3,000㎡が発掘調査届けの面積となっている。

発掘調査の経過は、先の対象地の表土を除去し、遺構を確認したところ、A区では十数軒の竪穴式住居跡、溝跡を確認した。B区でも溝跡を確認した。A区での遺構の状態から遺構同士の切り合いが多く、時代も弥生時代から平安時代にまたがる遺構が各種確認される状況であった。第3図に示す調査基準座標を杭打設定し、遺構を掘りはじめた。調査は6月17日より盛夏の中を通して行われ9月17日に終了した。弥生時代の方形周溝墓、同時期の竪穴式住居跡、平安時代の住居跡、溝跡などが完掘された。出土遺物の中では弥生時代の土器、平安時代の土器、鉄製品などが出土している。埋蔵文化財の発見届は9月13日付けで提出され、弥生式土器片3箱・平安時代の土器須恵器片17箱・平安時代の鉄製焼印1個の数量となっていた。特に平安時代の焼印の発見は注目されるもので、「古代の牧場ありと推定－大里村・円山遺跡」と新聞報道された。9月25日には調査会理事会が開かれ発掘の成果とその後の取り組みが報告された。



参考図 船木遺跡発掘調査区域

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 円山遺跡周辺の地理的環境

円山遺跡を載せる台地は、箕輪面・船木面・冑山面（東平面）からなり、これら台地面を総称して東平台地と仮称している（大里村史 1990）。荒川扇状地に形成された櫛引台地・江南台地とは直接連続しないが、ほぼ同時期に形成されたものとされる。東平台地は西方に広がる比企丘陵と南方は比企丘陵の残丘と考えられている吉見丘陵に挟まれ、東方の大里沖積地で区分される。台地頂部は比較的平坦で標高50～30mを測る。沖積地との比高は10～15mである。台地部の基本的な構成は上位からローム層－茶褐色粘土層－灰褐色粘土層－礫層－基盤の土塩層とされる新第三期層からなるもので、先の3面の台地面がそれぞれ南関東の第四期層に比した場合のその形成面は、それぞれ箕輪面－立川期・船木面－武蔵野期初期・冑山面（東平面）－下末吉期と考えられている。また台地を構成する基盤層は灰色砂質泥岩と青灰色砂岩からなる土塩層と呼ばれる新第三期層に当たる。台地下から荒川までの東部沖積地は荒川低地の上部にあたり大里低地とも称される。沖積地はかつての利根川・荒川および和田吉野川・通殿川により自然堤防と後背湿地が形成されたもので、場所によっては10m以上の礫層・粘土層・シルト層が厚く堆積している。

現在は低平な水田地帯となっている低地部には古代の大里条里帯が設定されており、可耕地としての整備が比較的早くなされた一帯であるが、後世の荒川等の乱流と新田開発などによりその実態はほとんど不明である。だが、ときには2m以上の下面から古代の遺構が確認される場合があり、大半の古代面は埋没しているとも想定される。

円山遺跡はこの船木面の東端部に位置していた。この台地域は沖積地への変換点にあるため樹枝状の開析谷が入り組んでおり、主谷は三階沼の谷、円山の谷、桜谷の谷、真澄沼の谷でいずれも北東方向に開口している。さらにこの谷から支谷が分岐し或いは直行して派生する。なお、谷奥や開口部には溜池が築かれている。この谷により、台地部は尾根上に残され、その平坦地に遺跡が営まれていた。現在の集落は台地の付け根部付近に移動したかのようで、台地先端部は農地か山林地となって遺跡を包蔵していたことになる。

第2節 円山遺跡と周辺の遺跡

1 遺跡の考古学的環境

円山遺跡の場所は、大里地区の南部で南側は吉見町の低地台地と、東松山市域の台地丘陵地に連続する。周囲の遺跡は、台地から丘陵地に濃密に分布するが、最近の調査では低地からも古代集落の発見があり遺跡の分布を考える場合には注意が必要となっている。地形の特徴でも触れたとおり遺跡周辺では台地を区分する尾根上に遺跡が所在している。それぞれの遺跡は地点ごとに名称が付され、主谷での区分を参考に遺跡のまとまりを東から西へと見ると、A〔①船木遺跡 ②大境遺跡 ③大境南遺跡 ④大境古墳群〕、B〔⑤円山古墳群 ⑥円山遺跡 ⑦大林遺跡 ⑧桜谷東遺跡 ⑨桜谷遺跡 ⑩大林南遺跡〕、C〔⑪阿諏訪野東遺跡 ⑫東山遺跡 ⑬楓山西遺跡 ⑭楓山北遺跡〕のように3群14遺跡が確認される。これらの遺跡は大半が砂利採取や区画整理事業により消滅している。なお、発掘調査が実施されたほとんどの遺跡は「大里南部遺跡群 I 1997」などの報告書に記される。詳細は前書に譲るとして弥生時代以降をみると、①船木遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓2基・礫床墓・住居跡3軒・古墳時代の住居跡39軒・堀立柱建物2棟・奈良平安時代の寺堂関連遺構が検出されている。②大境遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓5基・住居跡10軒・壺棺墓2基・古墳時代の住居跡7軒・奈良平安時代の住居跡8軒・堀立柱建物跡5棟などが検出されている。③大境南遺

円山遺跡

跡では古墳時代の住居跡1軒・奈良平安時代の住居跡1軒・多数の円形土壙などが検出されている。④大境古墳群では前方後円墳2基・円墳11基が検出された。1号墳とした前方後円墳は全長約40mを測り、後円部に横穴式石室を持っていた。⑧桜谷東遺跡では弥生時代後期の住居跡3軒・古墳時代の住居跡15軒・方形周溝墓と円墳各1基・奈良平安時代の住居跡12軒などが検出された。特に古墳時代では石製模造品を加工した工房的住居跡が発見された。⑨桜谷遺跡では縄文時代の遺構が主体であった。⑩大林南遺跡では古墳時代の住居跡20軒が検出された。⑪阿諏訪野東遺跡では古墳時代の礫槨墓1基・古墳跡6基・住居跡5軒などが検出された。⑫東山遺跡では全長45mの帆立貝式の前方形後円墳1基・奈良平安時代の火葬墓4基などが検出されている。⑬楓山西遺跡では古墳時代の住居跡7軒・土壙などが検出されている。⑭楓山北遺では古墳時代の住居跡7軒・奈良平安時代の住居跡3軒などが検出されている。

「大里村史」一通史編 1990」には平成2年までに当地方での発掘調査遺跡を紹介しているが、集落では昭和48年調査の船木遺跡の概要が紹介される。この発掘は工場用地の造成にかかる調査で、造成地の一部ではあったが弥生時代後期から古墳時代・奈良平安時代の住居跡16箇所を検出した。とくに古墳時代後期初頭の住居跡からは滑石製模造品や未製品が多数出土したことから、玉作工房跡の発見となった。出土土器は5世紀末の須恵器・土師器が伴い当時の土器組成を知る格好の資料とされる。以上が周辺部1km内の遺跡である。

なお、近年の調査で明らかになった注意すべき遺跡として下田町遺跡が挙げられる。同遺跡は現在の和田川と荒川の合流点付近の自然堤防上に位置する遺跡である。弥生時代から中世にかかる内容が明らかになり、鉄剣の出土した弥生時代の土壙墓1基、方形周溝墓9基・竪穴住居跡163軒・堀立柱建物跡30棟などが検出されている。遺跡の主体は古墳時代から平安時代であり、古墳時代では県内ではほとんど類例のない子持ち勾玉が出土している。平安時代では「占部豊川」名の刻まれた石製紡錘車出土している。他に大規模な集落の調査例はないが、東平台地の縁辺部には玉太岡遺跡・中廓遺跡・北廓遺跡が、自然堤防上には下田町遺跡のような遺跡が所在していたものと考えられる。

下田町遺跡の方形周溝墓は弥生時代中期後半に遡り、荒川低地帯への開発進出が確かめられた。一方、周辺地域では比企丘陵地に展開する櫛描文系の岩鼻式土器と県北部に分布する縄文系の吉ヶ谷式土器を持つ遺跡が多数現れ、台地縁部に前出の桜谷遺跡・大境遺跡・船木遺跡・円山遺跡・箕輪遺跡・北郭遺跡が分布していることから、台地部から自然堤防上への集落設営が活発に行われていたと考えられる。引き続き古墳時代前期の方形周溝墓が楓山西遺跡・大境遺跡・大境南遺跡・大林南遺跡・玉太岡遺跡・箕輪遺跡・船木遺跡などに群在するなど集落域の拡大がみられる。

古墳では、埼玉県内第二位の規模を有する円墳「甲山古墳」が青山面の最高所に所在し、その背後に連なる東松山市水穴から大谷の比企丘陵上には三千塚古墳群が分布し、最高所には当地方最初的前方後円墳である「雷電山古墳」所在する。また、吉見町に連なる田甲古墳群からは黒岩横穴墓も間近である。また、箕輪には古墳時代の方形周溝墓群と市内最大の前方形後円墳である「とうかんやま古墳」が所在する。消滅したとされている古墳では、箕輪字楓山に楓山古墳が前方後円墳とされており銅鏡・埴輪などの出土が伝えられている。青山字東山に所在した東山古墳も前方後円墳とされている。これらの古墳は地域の首長墓と思われるが内容が不明であり系譜をたどることは困難だが、時代性と規模は突出しており地域史に占める評価は大なるものと思われる。これら古墳が所在する周囲には中小の円墳群が造られていたが、台地上に所在した大部分は消滅し、沖積地では埋没している古墳群があるものと推定される。

2 遺跡の歴史的環境

大里地域に関する資料や記録の最も古いものは、現在のところは七世紀末のものと考えられる藤原京跡出土に磚に記された「大里評」との墨書であろう（註1）。「評」は古代律令制の創始期におかれた郷里制による郡の単位で、後に「郡」に変更される。「評」の文字が使われているところから律令制導入の初期という段階でいち早く当地方まで施行されていることが知られる。同じく文字資料で大里郡に隣接する男衾郡と埼玉郡の木簡があり、年紀・郷里名や貢納物名などが記される。大里郡の西方に位置したとされる男衾郡では平城京跡出土木簡に「余戸里（註2）・川面里（註3）」が、東方に位置していたとされる埼玉郡では「宅□駅（註4）」名がみられる。

木簡より時代が降るが平安時代前期、九・十世紀ごろと推定される「九条家延喜式背紙文書」にみえる「大里郡条里坪付」は、大里地域に広がる水田地帯に施行された条里を示すものとされる。大まかな比定地として荒川新扇状地の東方、熊谷・行田間の忍川の南、行田市佐間から旧吹上町東部に向かって流れる忍川より西、和田吉野川の北、に考えられている。現在この想定地間は荒川本流の流路となっているが、荒川は江戸時代に付け替えられたもので、当時は現在の熊谷市街を北流していたとされる。

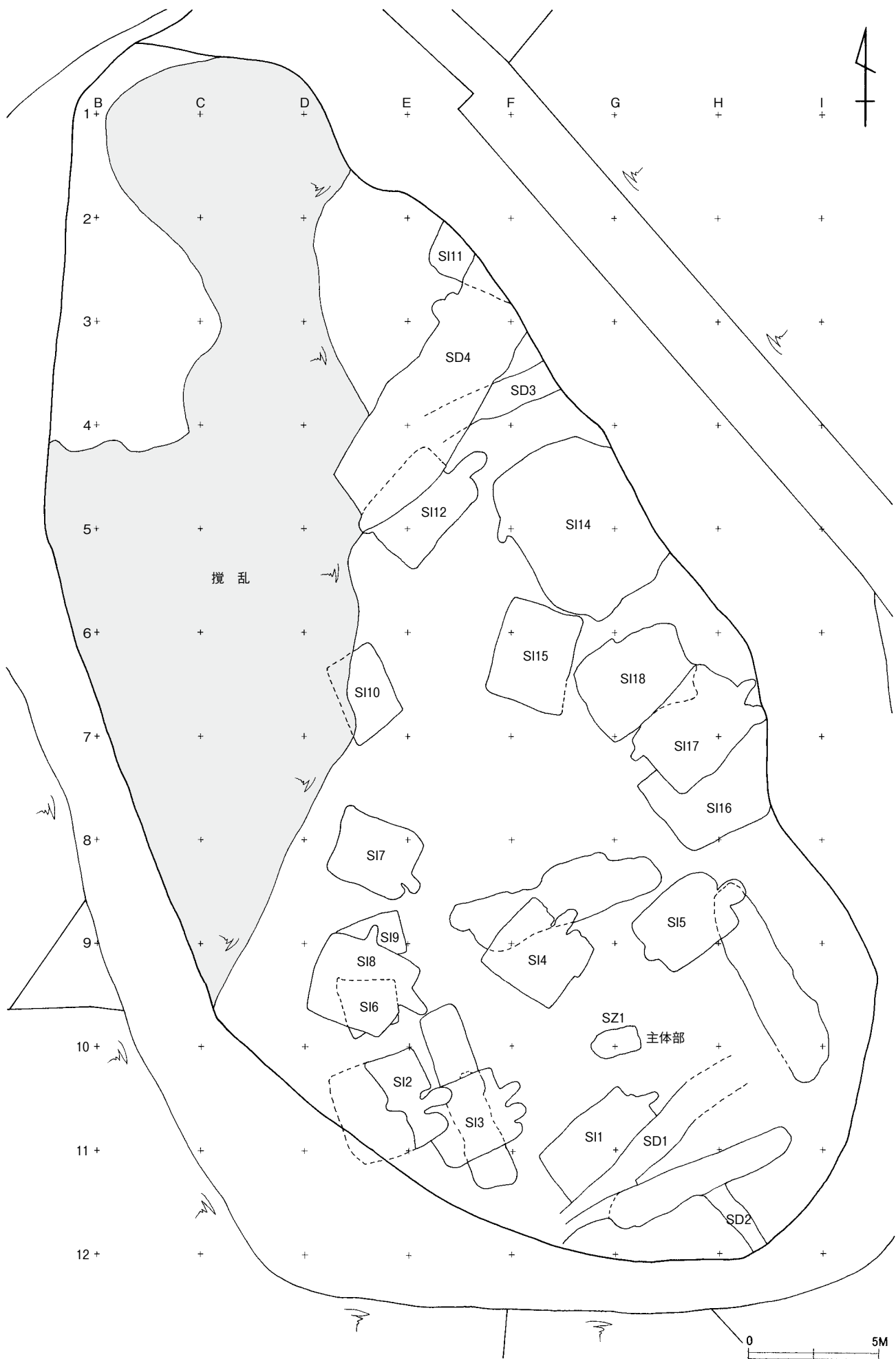
条里の復元案は先学により様々な考察があるが、本文では森田悌の案（森田1998）をみてみよう。下表の条里復元図（註5）は、一町方面に区分された里名を区分したもので、巻の前後を欠き4条から9条までが残る。都合46里、坪数1047坪が記される。里は一条当たり最大10里であり、十里の幅は約6 Kmに当たる。里名の川辺里が河川沿いの里名とすると、旧吹上町の下忍・袋地区に残る河川跡付近と想定され、坪付文書に記される条里東端の川辺里の位置と一致することから、この河川跡は大里郡－足立郡の郡境であったと想定している。

西方は条里西端に位置する9条1里の川辺里が、和田吉野川の流路付近に位置する。また、和田吉野川の流路が条里9条にほぼ一致することから本条里付近が大里郡の南境に当たり、その南側は横見郡武生郷と想定している。なお、旧荒川の流路を踏襲する通殿川付近が男衾郡との境に当たるとされている。

5条 6条 7条 8条	4条	1	2	粟生里	3	田作所里	4	速津里	5	箭田里	6	牧川里	7	石井里	
	1 富久良里	2 郡家里	3 中嶋里	4 高田里	5 □□里	6 鷺田里	7 幡田里	8 楊田里							
	1 □□麻里	2 楊井里	3 新生里	4 新□里	5 青山里	6 三鷺里	7 臘里	8 楊師里	9 楊井里						
	1 牧津里	2 勾田里	3 桑田里	4 麴里	5 榎田里	6 栗籠里	7 下榎里	8 有田里	9 新野里	10 桑田里					
	1 勾田里	2 勾田里	3 糟田里	4 津崩里	5 柴田里	6 物部里	7 植田里	8 幡田里	9 直里	10 川辺里					
	1 勾	2 川辺里	3 麴田里												

この条里復元により現地と比定すると、下田町遺跡は7条4—麴里から、8条4里—津崩里付近に相当する。なお、円山遺跡を含む箕輪・冨山地域は横見郡内に相当することになる。おそらく、円山遺跡の眼前にも大里条里と同様に横見郡下の条里が施行されていた可能性は高いものと思われる。

- 註1 藤原京出土磚墨書 「□玉評 大里評」
 註2 平城京出土木簡（平城京1-404）「武蔵国男衾郡余戸里大贅貳一斗 天平十八年十一月」
 註3 平城京出土木簡（平城京1-405）「武蔵国男衾郡川面郷大贅一斗 鮒背割 天平十八年十一月」
 註4 平城京出土木簡（平城京1-68）「武蔵国策草郡宅□駅菱子一斗五升 霊龜三年十月」
 註5 森田悌 江南町史資料編2 古代・中世



第4図 円山遺跡A区遺構配置図 (1/200)



第5図 円山遺跡B区遺構配置図 (1/200)

第Ⅲ章 遺跡の概要

第1節 A・B地点の概要

調査地点の概要(第2・3・4・5図) 発掘調査では薄い表土を除くと遺物を含むローム質土となり茶褐色・黒褐色土の覆土が遺構を覆っていた。また、桑畑の現状では以前の抜根に伴う攪乱が広範囲に入っており、発掘調査の経過で述べたように試掘時に観察された範囲に相当するものであった。A地点は遺跡範囲の東側部分で、B地点は遺跡の北端部分としている。両地点には第3図のようにグリットを設定した。

A地点では西側半部は攪乱のため遺構が確認されていないが、遺構の密集状況から破壊されたものであろう。それでも、竪穴住居跡18軒、方形周溝墓1基、溝4条が重複を見せて確認されている(第4図)。B地点では、竪穴住居跡1軒、円形周溝墓1基、溝1条、土壇4基が確認されているが南側は大きく攪乱を受けていたようだ。

第2節 検出された遺構と遺物

1 方形・円形周溝墓

第1号方形周溝墓 S Z 1 (第6図)

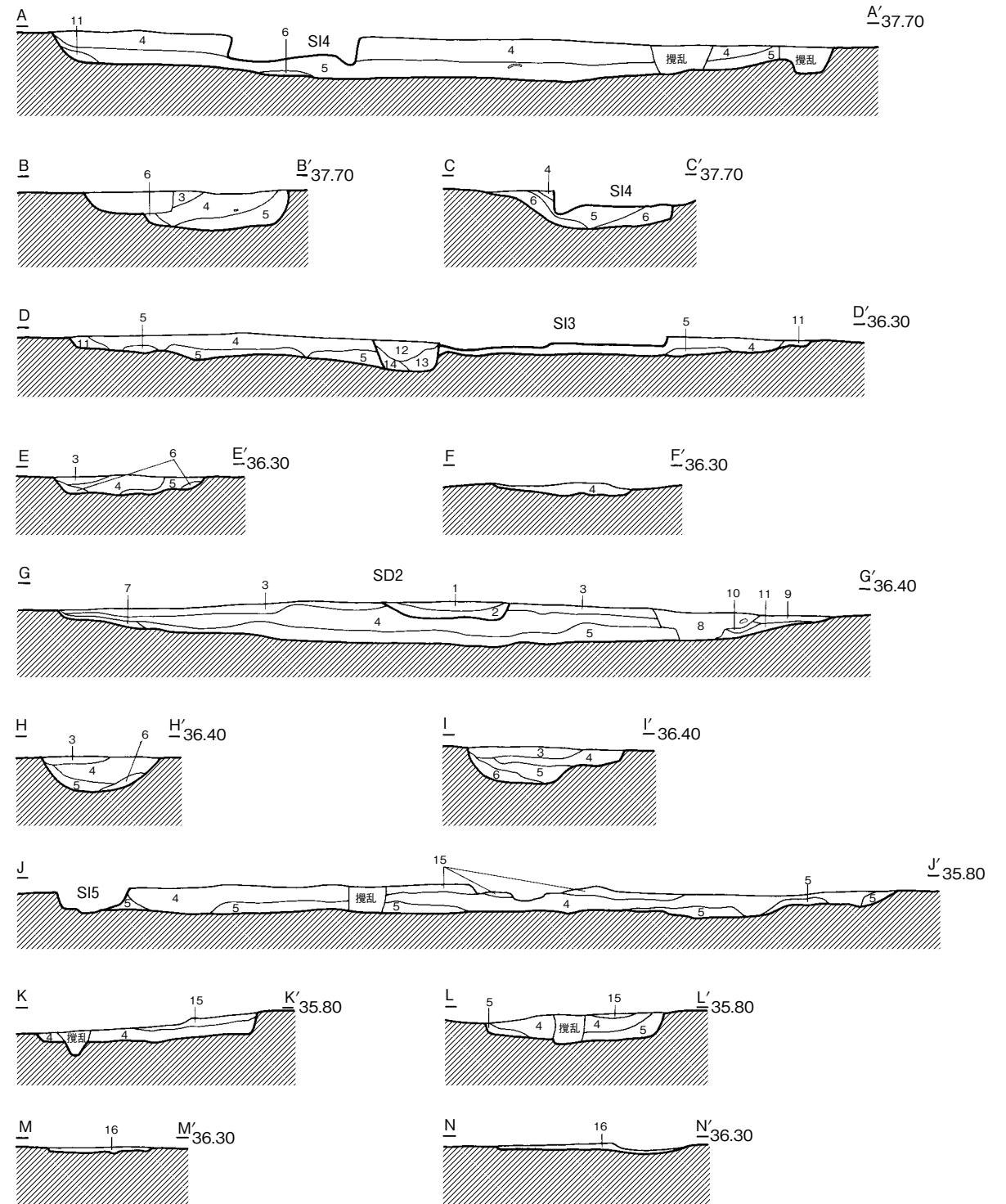
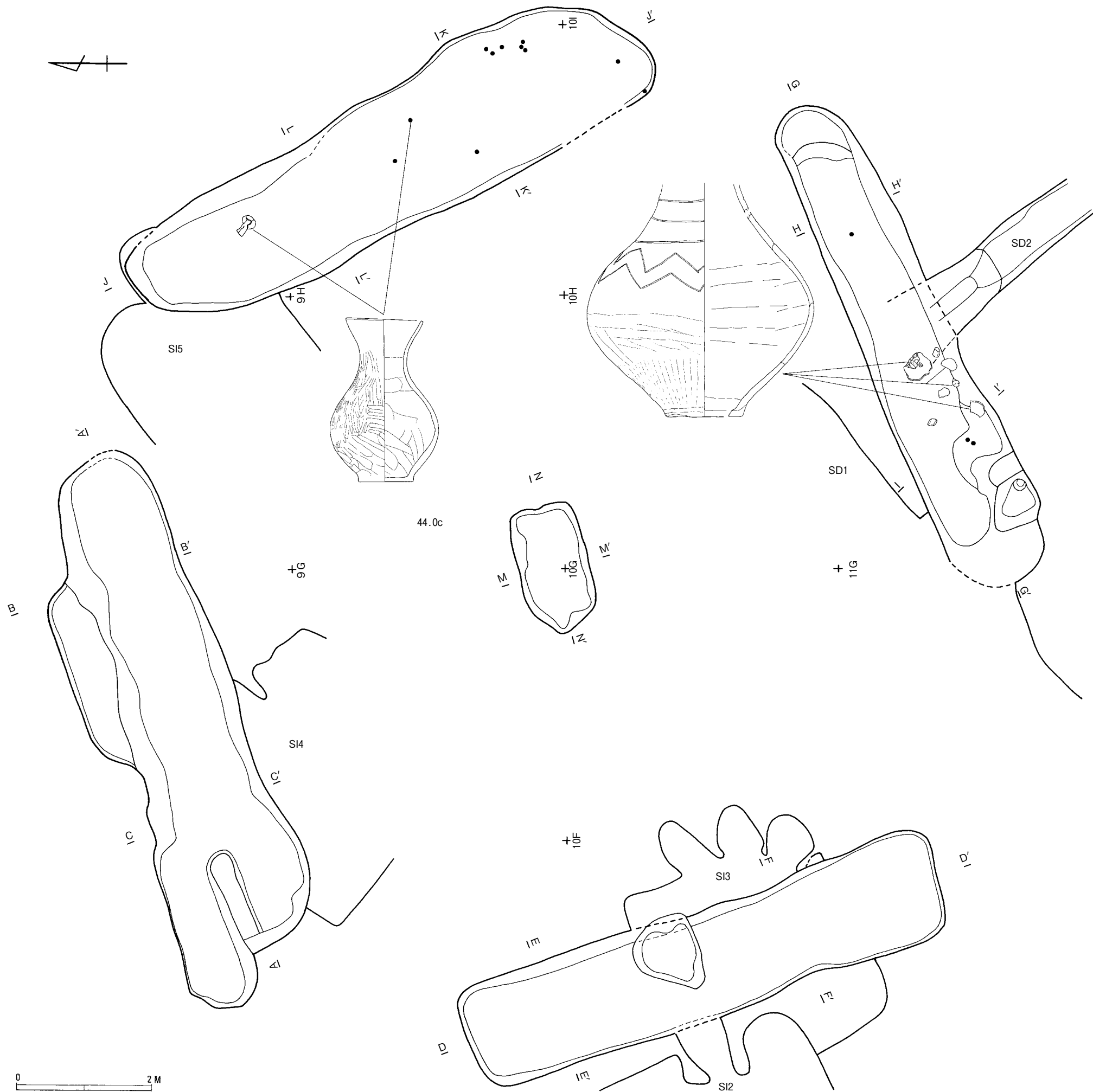
墳 丘 墳丘は確認されていない。中央部に主体部が残ることから墳丘自体あまり高く盛土はされてはいなかったようだ。また、古代の住居跡が遺構確認面を切り込んでいることから、早くから開墾などで墳丘が失われたものと推定される。周溝の内側から墳丘各辺を想定すると、北辺は10.2m、東辺は10.3m、南辺は11.4m、西辺は10.4mを測る台形状を呈している。この台形墳丘を通る南北軸線を主軸とすると、N—21°—Wを示す。

埋葬主体部 埋葬主体部は周溝墓の中央に検出された。平面形態はほぼ方形であるが、西辺が不整形である。長軸1.5×幅0.9mを呈し、長軸に当たる東西方位を主軸とするとN—86°—Eを示し墳丘主軸とは102°の偏差がある。出土遺物はない。

周 溝 東西南北辺の周溝を検出しているが、それぞれが浅い窪みとなり、独立した周溝となって確認された。後世の攪乱などで周溝の一部は削平されていると推定されるが、当初より四隅の切れた周溝であったと思われる。北辺周溝は長さ7.7m×幅1.5m、東辺周溝は8.3m×2.1m、南辺周溝は7.7m×1.3m、西辺周溝は7.3m×1.6mを検出している。いずれも周溝底部付近を残すと思われ明瞭な周溝壁は確認されていない。周溝覆土は底部付近の第一次埋没土が遺存している。

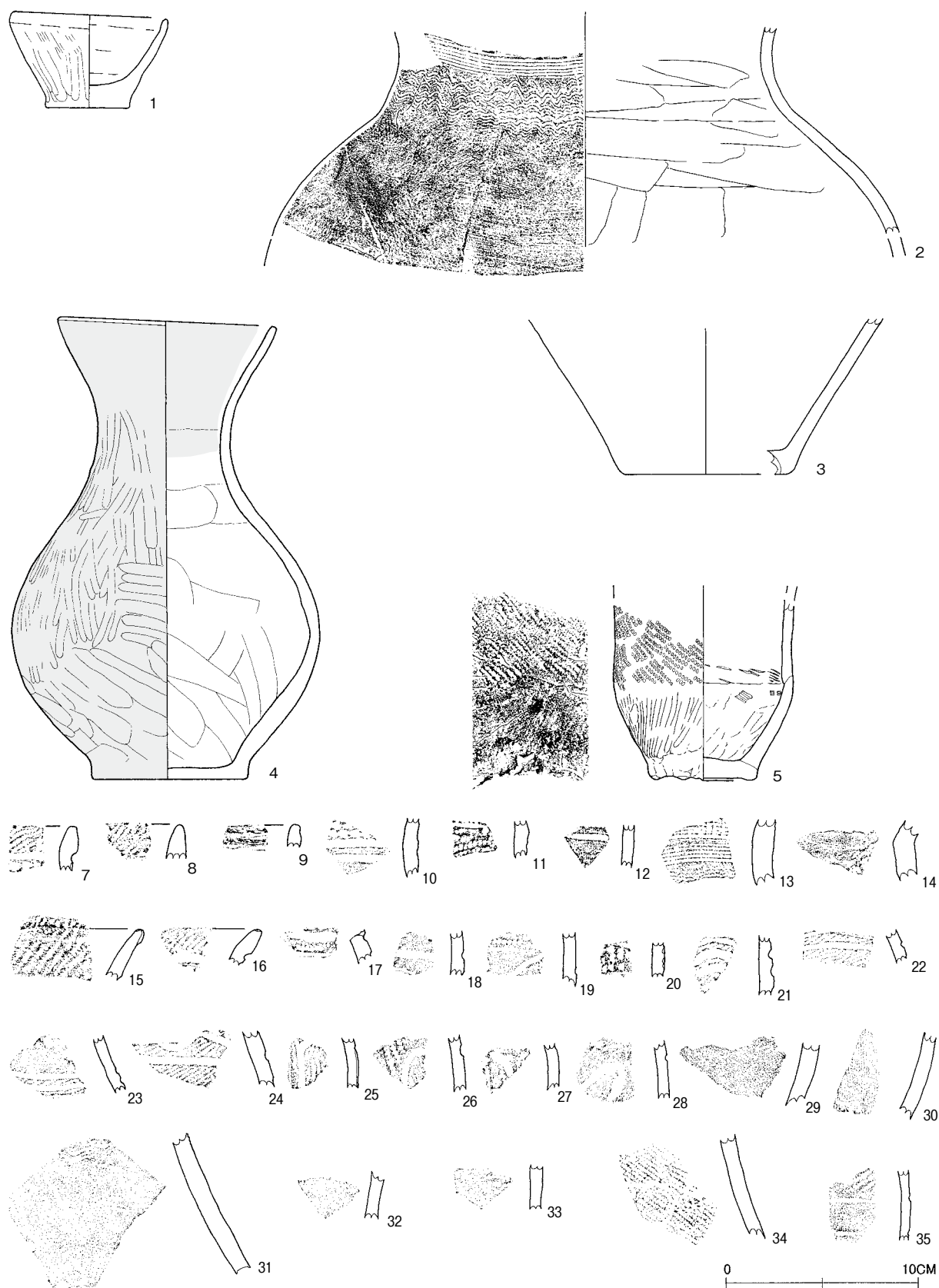
遺 物(第7、8図・第1表) 出土遺物は東辺溝からはほぼ完存する小型の壺形土器1点(第7図4)、南辺周溝から大型の壺型土器1点(第8図6)が出土している。いずれも周溝底面に接しており、本周溝墓に伴う遺物である。他には縄文土器、弥生時代土器、土師器須恵器破片が覆土に混えていた。

第8図6は南関東地方に通有の久ヶ原式土器の壺で口頸部から口縁部を欠失しているが頸部下半から底部まではほぼ完存している。頸部は撫で肩で胴部中央が大きく張りを持ち底部に至る。底部は焼成後に打ちかけにより穿孔され、孔径は約6.2cmを測る。頸部に二条一對の沈線間に羽状縄文を施した文様帯を二段配する。押捺される縄文は繊細で明瞭であり、細めの原体は長さ1.2cm程の一段L RとR L原体で、横位方向に施文される。その下位の胴部上半には二条の沈線で区画した鋸歯文帯に斜縄文を充填している。施文される縄文は施文方向を変えて山形突出部を10単位作り出している。縄文は密に施文されところどころ重なっている。これらの文様帯は縄文施文の後に沈線による区画をしている。また、器面は磨き整形され文様帯を除い



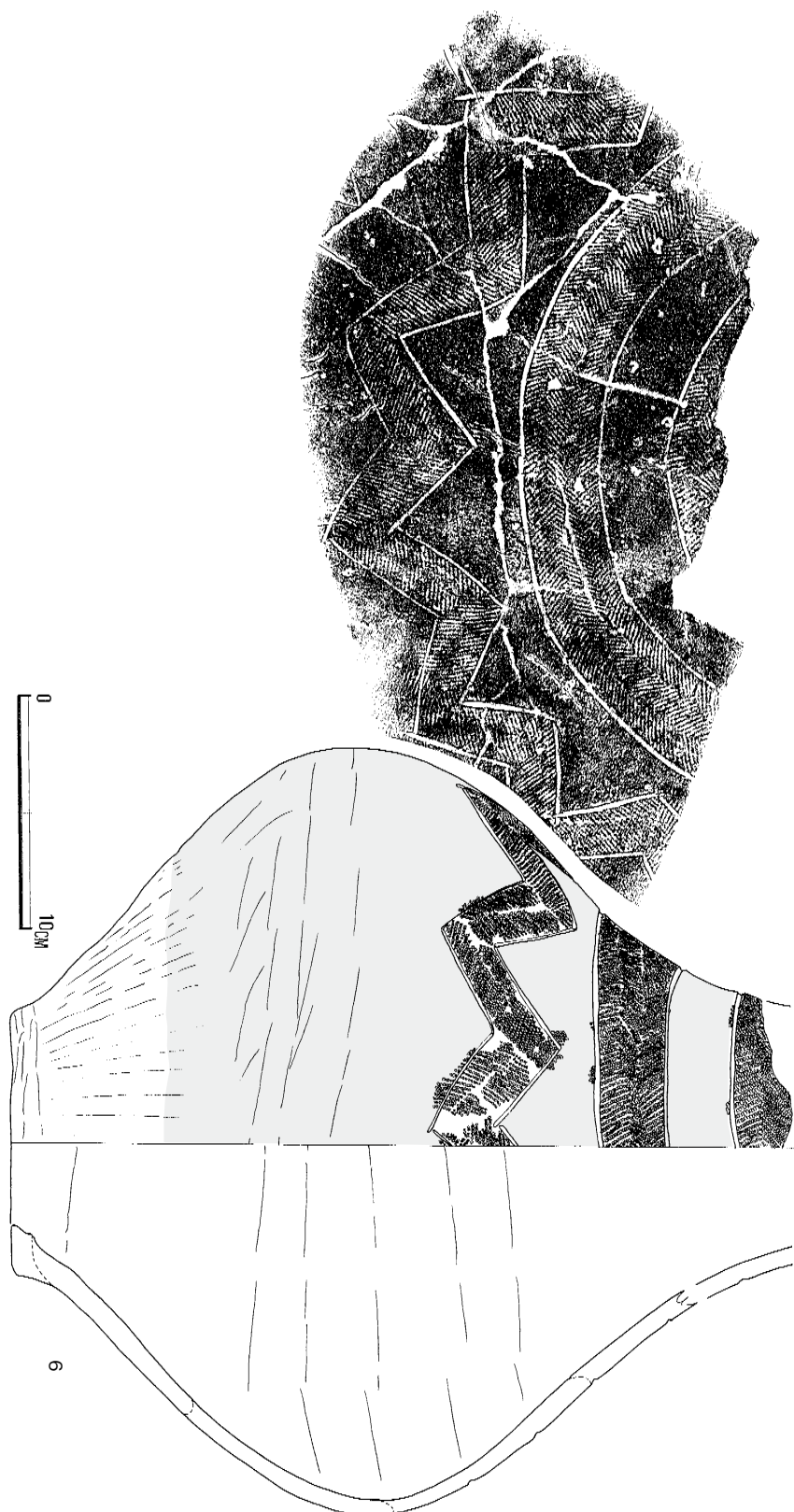
- S Z 1
土層説明 (A-A' ~ N-N')
- 1 暗褐色土 粘性弱 締り弱 0.1mm大の白色粒子 (浅間の火山灰か?) を多量に含み 0.5mm大の焼土粒と炭化物をまばらに含む
 - 2 黒色土 粘性やや有り 締り弱 0.2~0.3mm大の焼土粒を多く含み 5cm大の黄灰色粘土ブロックを少量含む
 - 3 黒色土 粘性やや有り 締り弱 0.1~0.5mm大の焼土粒を少量含み 0.5mm~8mm大のローム粒をまばらに含む
 - 4 極黒色土 粘性やや有り (3より強い) 締り3より弱 0.2mm大の焼土粒を少量含み 0.5mm大のローム粒子を多量に含む 3mm~5mm大の炭化物をまばらに含む
 - 5 暗黄褐色土 粘性強し 締り強 2~3mm大のローム粒を多く含み 4~5cm大のロームブロックをまばらに含む
 - 6 黄暗褐色土 粘性やや有り 締りやや有り 1mm大のローム粒子を多く含む
 - 7 黒色土 粘性やや有り 締り有り 1mm~2mm程のローム粒を含み ごく黒色2cm程の粒子をごく少量含む
 - 8 ごく黒色土 粘性やや有り 締り有り 中央にロームブロックを含み ごく少量の白色土粒を含む 3・4・5層9・10・11層をそれぞれ切る
 - 9 暗褐色土 粘性・しまりとも有り 1mm~5mm程のローム粒を多く含み ごく少量の白色土粒 (火山灰) を含む
 - 10 暗褐色土 粘性ややなく 締り有り 1mm~2mm程のローム粒をごく少量含む
 - 11 褐色土 粘性ややなく 締りやや有り 多量のローム粒を含む
 - 12 明茶褐色土 ロームブロック (φ5mm±) を多量 焼土粒子とカーボン粒子を少量含む 粘性・しまり共中
 - 13 茶褐色土 ローム粒子少量含む 粘性弱 しまりやや強
 - 14 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土ブロック (φ5mm±)・カーボン粒子を各少量含む 粘性中 しまり弱
 - 15 暗灰茶褐色土 ローム微粒子と白色パミス粒 (φ1mm以下) を各少量含む 粘性中 しまり強
 - 16 暗褐色土 ロームブロック (φ20~40mm) を多量に 焼土粒子を微量含む 粘性やや強 しまり強

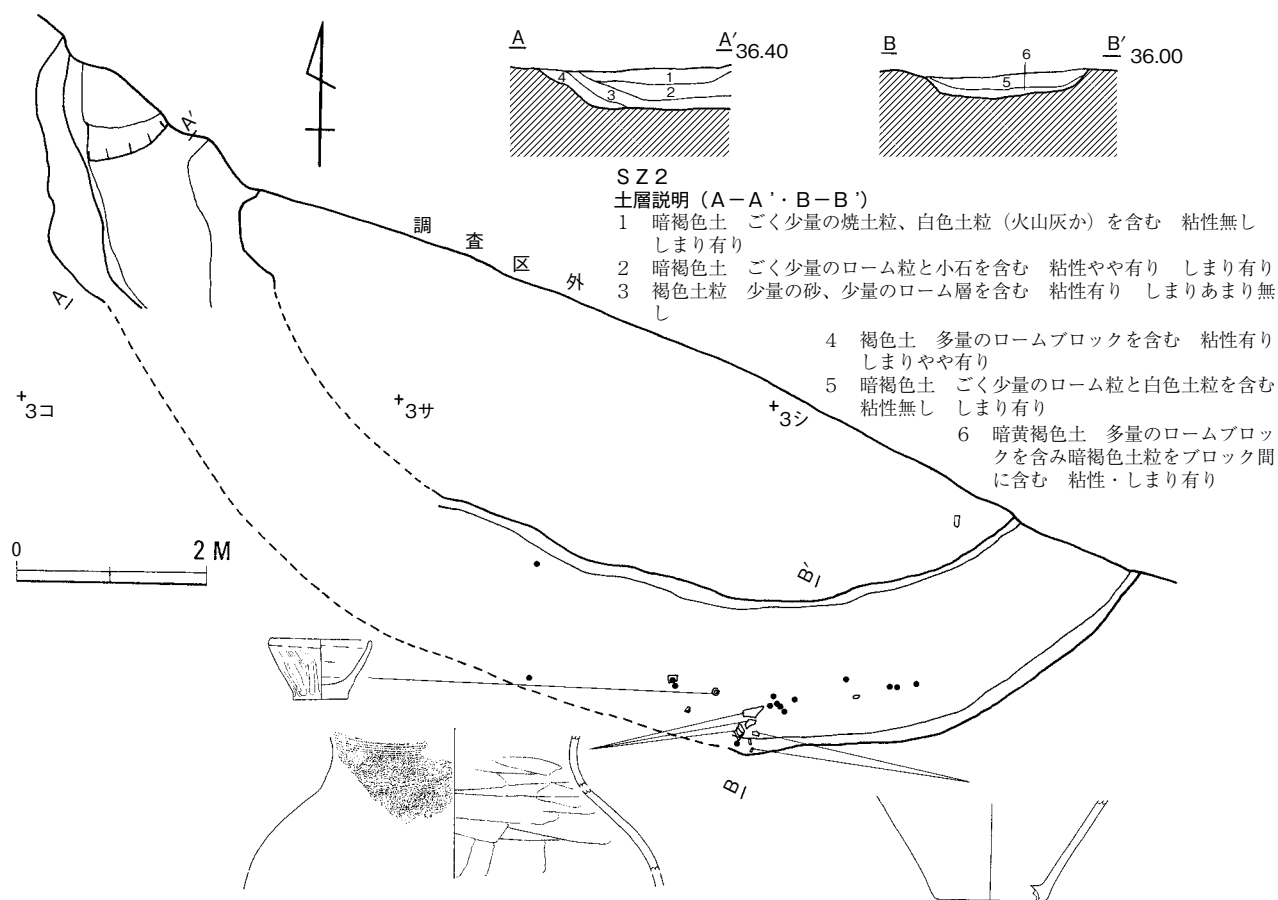
第6図 円山遺跡方形周溝墓 (1/60)



第7図 円山遺跡円形周溝墓出土遺物 1

第8図 円山遺跡方形周溝墓出土遺物2





第9図 円山遺跡方（円）形周溝墓（1/80）

て底部下半まで赤彩されている。第7図4は小形の朱い壺で胴部下半に最大径を持ち、頸部から口縁部が緩やかに外反する。口縁端部は上端部が面取りされる。文様は施されないが器面はヘラミガキされ、口頸部内面から底部まで全面が赤彩されている。第7図5は小形の甕で胴の張らない体部に一段RLによる縄文を施文する。底部は胴部の縄文施文後に外面をヘラミガキされる。底面は特に調整されず舐痕跡が5箇所観察される。土器細片は壺、甕等の小破片で周溝覆土や墳丘部での混入品である。第7図7以降がこれに該当する。これらの土器は弥生時代後期後半の時期におさまるもので須和田式などの南関東系の土器と在地の土器が共伴する例として稀少である。

第2号方（円）形周溝墓 SZ2 （第9図）

墳丘 B地区に所在した。周溝墓の南縁から南東隅部を確認しているが、大部分は調査区外となりその後未調査のまま消滅している。墳丘は確認されておらず調査区外との接点でも確認の記録がない。南西隅か

円山遺跡

ら南辺が未確認であることから調査時には円形周溝とされていたが、南西隅部の形から方形周溝墓として報告する。墳丘は一辺約10mの方形を呈するものと推定される。方形周溝墓の南北を通る北方位を主軸とするとN-24°-Eを示す。周溝墓の大半は調査区外であるため、他の周溝墓との関係は不明だが、地形的に築造の余地はあまたあり、台地縁辺部は古墳も築かれていることから、単独の周溝墓とは考えにくい。

周 溝 周溝は南辺の一部を欠くが南辺の隅部が残る。周溝の規模は、周溝幅約1.6mである。西辺の一部が深く落ち込んでおり、あるいは南西隅部が土橋状に周溝底が掘り残されていたものと思われる。

遺 物 周溝中から土師器破片が少量出土している。第7図1は小形の鉢形土器で、平底の底部から逆ハの字状に開き、口縁端部を摘み上げている。外面はヘラナデされ丁寧に仕上げられている。第7図2は大型の壺形土器で、頸部に櫛描きによる簾状文と波状文が施される。3は壺底部である。これらの土器は櫛描文の施文される岩鼻式土器の中に納まる土器群である。

2 竪穴住居跡

第1号住居跡 S I 1 (第10図・第11図・第2表)

遺 構 F10、F11グリッド付近に所在した。遺構はほとんど削平され遺存する掘り込みはわずかで南辺部やカマド周辺は痕跡程度の状況とされる。重複関係は第1号方形周溝墓の墳丘内に構築し、1号溝に削り取られる。平面形は東側にカマドを持つ長方形で、残存部で4.11m×2.17mを測る。カマドを通る主軸はN-50°-Eを示す。直床で柱穴は確認されていないが、カマド前面に遺物の散布が見られた。

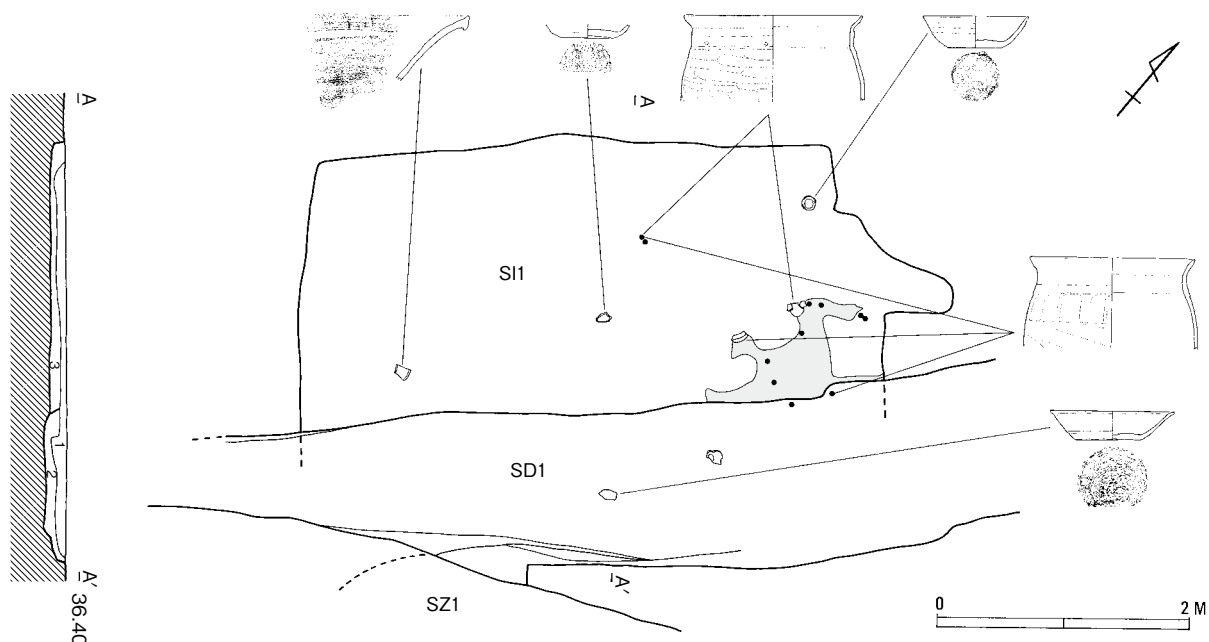
遺 物 第11図1、2、3は須恵器杯である。2は須恵器杯で、口縁部の小さな打ち掻きを中心に油煙と赤変部分を取り巻いている。灯明皿に使用されたものと思われる。5は須恵器甕の口縁部である。4、6は土師器甕で4はコの字状の口縁をしている口縁端部は外反した後上方につまみ出す。6の口縁は緩やかに外反する。これらの須恵器杯・土師器甕は八世紀末から九世紀初頭の時期におさまるものである。

第2号住居跡 S I 2 (第12図・第13図)

遺 構 D10、E10グリッド付近に所在した。第3号住居と重なっており、本住居が新しい。遺構の西半分は削平されていた。ほとんど床面のみの遺存ではあり住居としての遺存状態は不良である。平面形は東側にカマドを持つ方形と推定され、残存部で3.6m×1.9mを測る。カマドを通る主軸はN-78°-Eを示す。直床で柱穴は北東隅部に位置していた。カマドは袖を掘り残しており、燃烧部が壁ラインから外側にかかる。住居の時期を示す良好な遺物はほとんど見られなかったが、第3号住居の出土遺物から九世紀以前と推定される。

第3号住居跡 S I 3 (第12図・第13図・第3表)

遺 構 E10、F10グリッド付近に所在した。第2号住居と重なっており、本住居が古い。第2号住居とは西隅部が重なっていた。平面形は東側にカマドを持つ方形で、2.9m×3.1mを測る。N-63°-Eを示す2号カマドを通る軸線を本住居の主軸と認めた。直床で柱穴は床中央やや北寄りに位置する。カマドは東辺部に3基構築されるが、下部までの削平のため新旧関係は明らかでない。最終期のカマドが2号であるが、この2号を挟んでほぼ35°前後に振り分けられている。1号カマドの主軸はN-42°-E、3号カマドの主軸はN-111°-Eを示す。本住居は小型であり居住性よりもカマドの使用を目的とした建物と思える。2号カマドの主体的なあり方は、あるいは1・3号カマドは副次的な利用を目的としたものか、使い分けられるべ



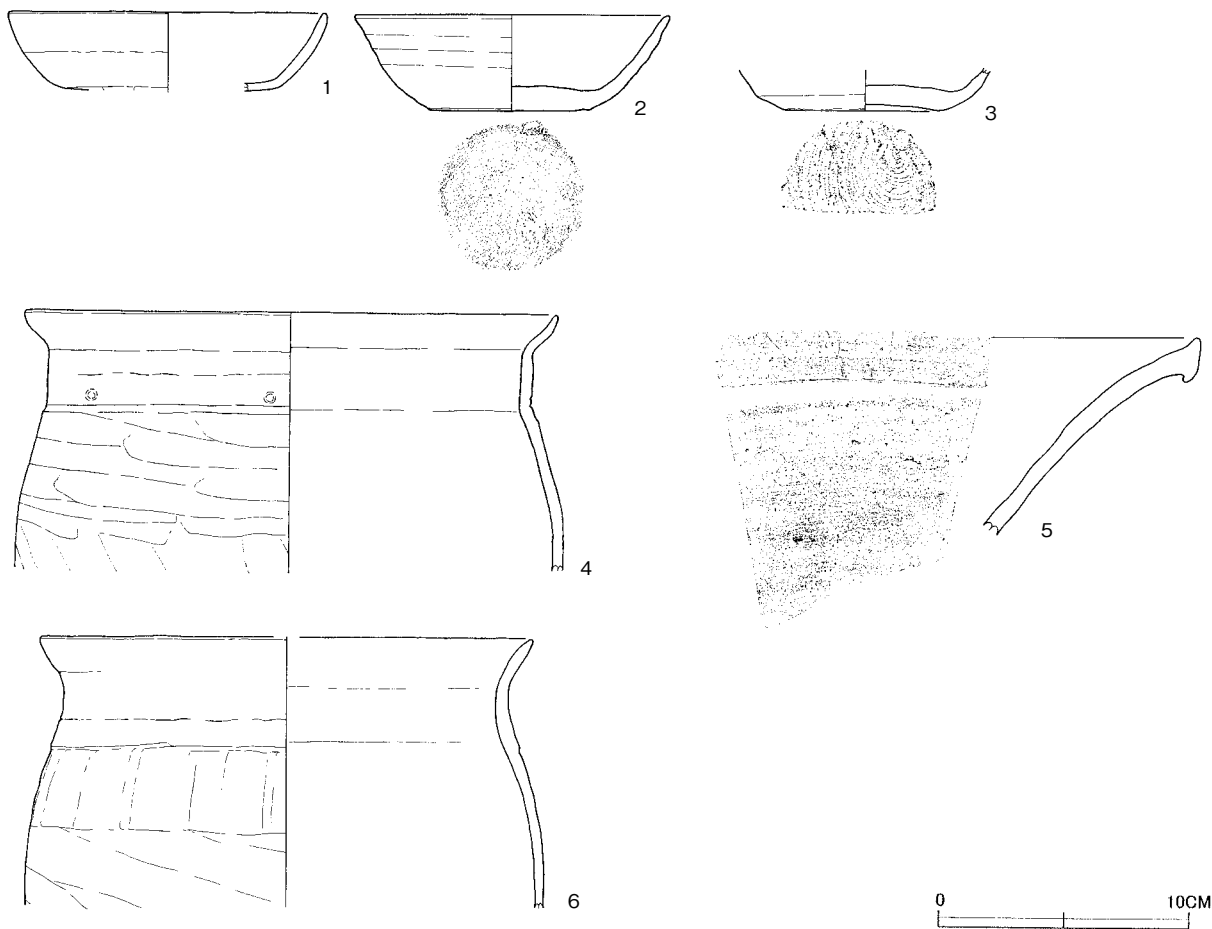
SI1・SD1

土層説明 (A-A')

- 1 暗褐色土 粘性極弱 締り強 1mm大の白色粒子 (浅間の火山灰か?) を多量に含む
2mm~1cm大の焼土粒を少量含む 若干の炭化物も含む
- 2 黒褐色土 粘性やや有り 締り1よりやや弱 1mm大の白色粒子 (1と同) を少量含

- 3 黒褐色土 粘性やや有り (2より弱) 締り有り 3~6mm大の焼土粒を多く含む2
~3mm大の炭化物を少量含む 1cm大の酸化鉄粒子をごく少量含有

第10図 円山遺跡第1号住居跡・第1号溝跡 (1/60)



第11図 円山遺跡第1号住居跡出土遺物

き性格を有していたものと思われる。

遺物 第13図1、2は須恵器坏で、底部は回転糸切無調整である。3は土師器甕でコの字状の口縁をしている口縁端部は外反した後上方につまみ出す。4～7は弥生時代の土器細片である。須恵器坏は、九世紀前半から中頃時期におさまるものである。

第4号住居跡 S I 4 (第14図・第15図・第4表)

遺構 F 9、G 9 グリッド付近に所在した。平面形は東側にカマドを持つ方形で、3.2m×3.1mを測る。東辺の中央付近を通るカマド軸線を本住居の主軸としN-38°-Eを示す。住居壁に沿い壁溝が廻る。直床で柱穴は各隅部に配置されるが、一定ではない。また南東隅部ではカマド脇まで床が一段下げられていた。カマドは両袖を掘り残し、レンガ状に整形された凝灰岩で端部を補強していた。燃烧部は住居の外へ造り出されている。遺物は床面からカマド内に散在していた。須恵器・土師器が主体である。

遺物 第15図1、2、3は須恵器坏で、底部は回転糸切無調整である。4は須恵器蓋で宝珠形のつまみを持つ。4は須恵器皿で底部は回転糸切無調整である。6～12は土師器甕で、9以外はコの字状の口縁をしている。9、10は台脚が遺存する。いずれも精良な胎土で器壁も薄く製作されている。13、14はレンガ状に成形された凝灰岩で、各面はノミ状工具により整形される。ノミの幅は1.9～2.1cm程である。須恵器坏などの遺物は、九世紀前半から中頃時期におさまるものである。

第5号住居跡 S I 5 (第16図・第18図・第5表)

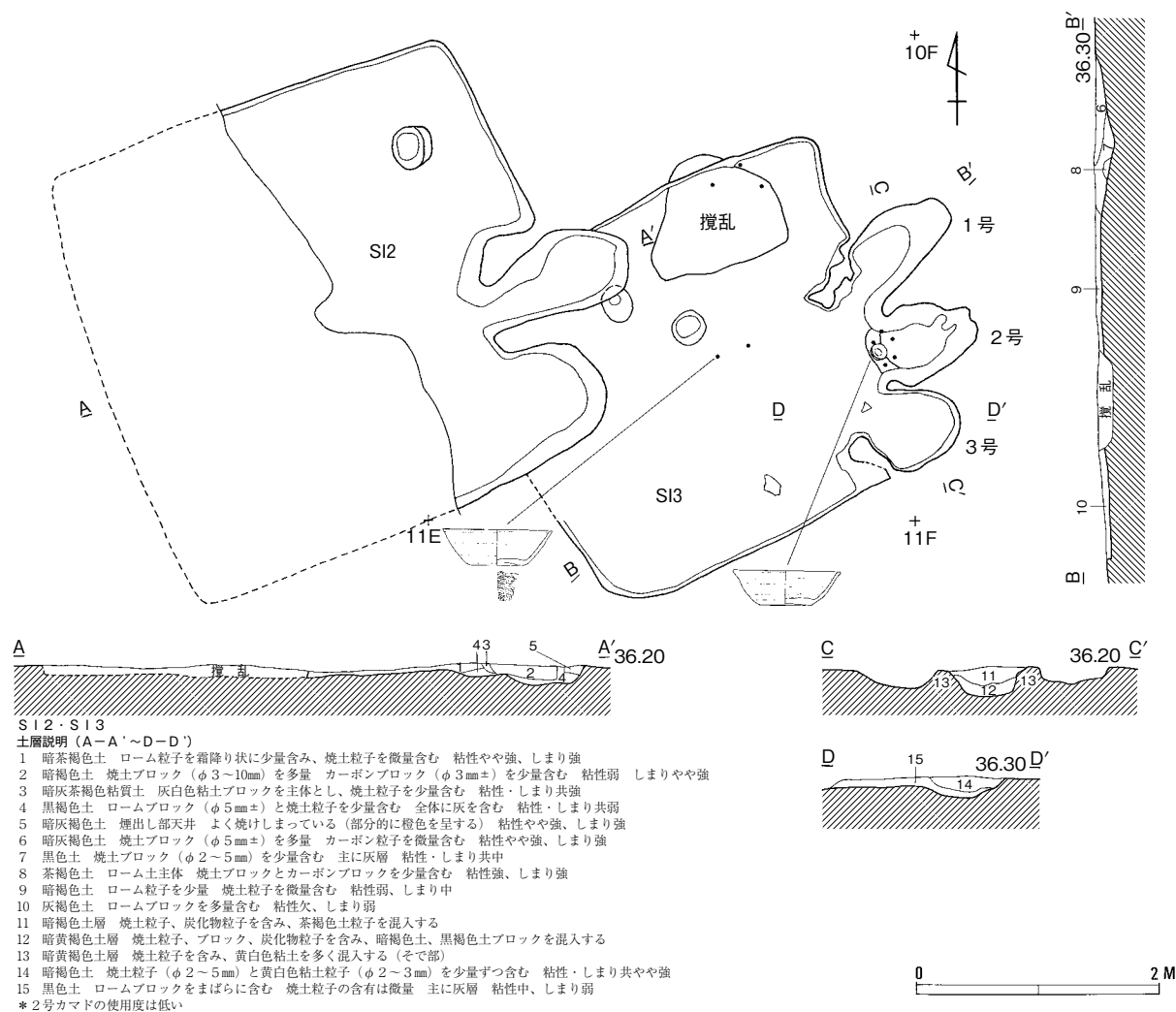
遺構 F 8、G 8 グリッド付近に所在した。平面形は東側にカマドを持つ長方形で、3.4m×2.8mを測る。東辺の中央付近を通るカマド軸線を本住居の主軸としN-42°-Eを示す。住居壁に沿い壁溝が廻る。直床で西辺壁中央部に柱穴状の掘り込みが配置される。また南東隅部ではカマド脇まで床が一段下げられていた。カマドは両袖を持たず住居外へ燃烧部を掘り出す形態をしている。遺物は床面から少量出土した。

遺物 第18図1、2、3は土師器坏で、有稜で内面に放射状の暗文を配している。2はほとんど稜が無く、上外方に口縁部をつまみ出す。3は底部である。4は小型の土師器甕である。これらの遺物は七世紀末から八世紀初頭の時期におさまる。

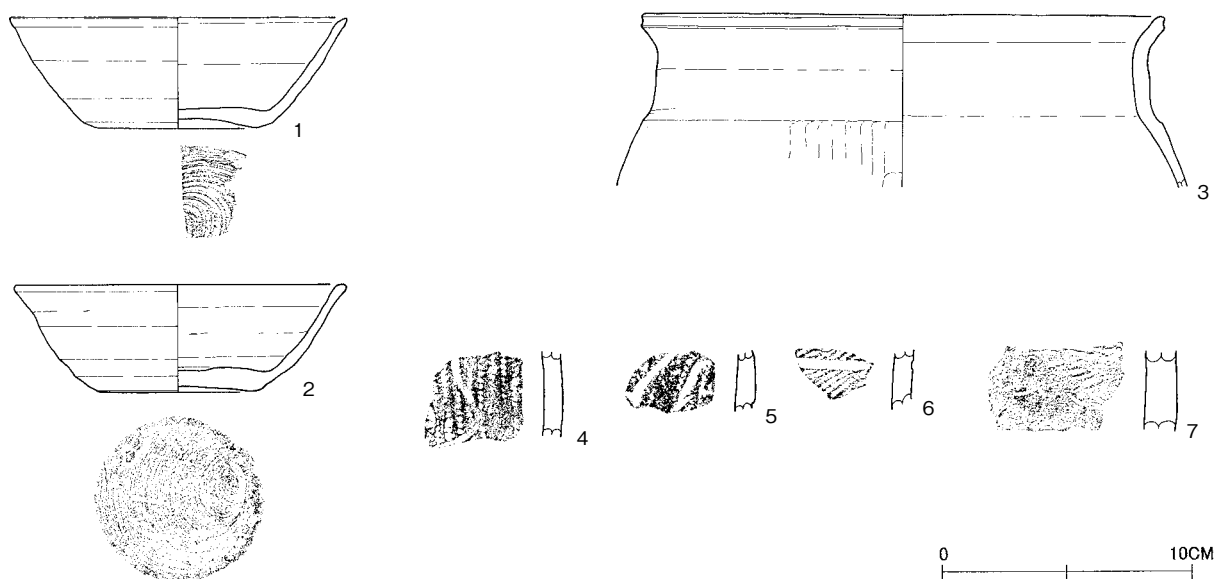
第6号住居跡 S I 6 (第19図・第18図・第5表)

遺構 D 9、E 9 グリッド付近に所在した。第8、9号住居と重なっており、本住居が新しい。第8号住居上に重なっていた。平面形は北側にカマドを持つ歪んだ台形状に把握されており、最大規模で2.3m×2.4mを測る。カマドはほぼ磁北を通る。床もカマドも遺存状態が不良であり、実測図に反映されていない。

遺物 第18図5は須恵器坏の破片で底部は回転糸切無調整である。6は須恵器碗の高台部で、酸化焰焼成となっている末野産のものである。7は酸化焰焼成の須恵器碗で体部が直線的に外反する。8は砥石として使用痕の認められるチャート自然礫で、平面部の表裏面が滑沢を呈するほど研磨されており、加えて多方向の線状痕が残っている。また、内湾する側面も同様に研磨されている。その状況から本来の形から二分断されているものと思われる。9は鎌根あるいは釘状の断面方形を呈する鉄片である。これらの遺物は出土須恵器から、十世紀前半から中頃時期におさまるものである。

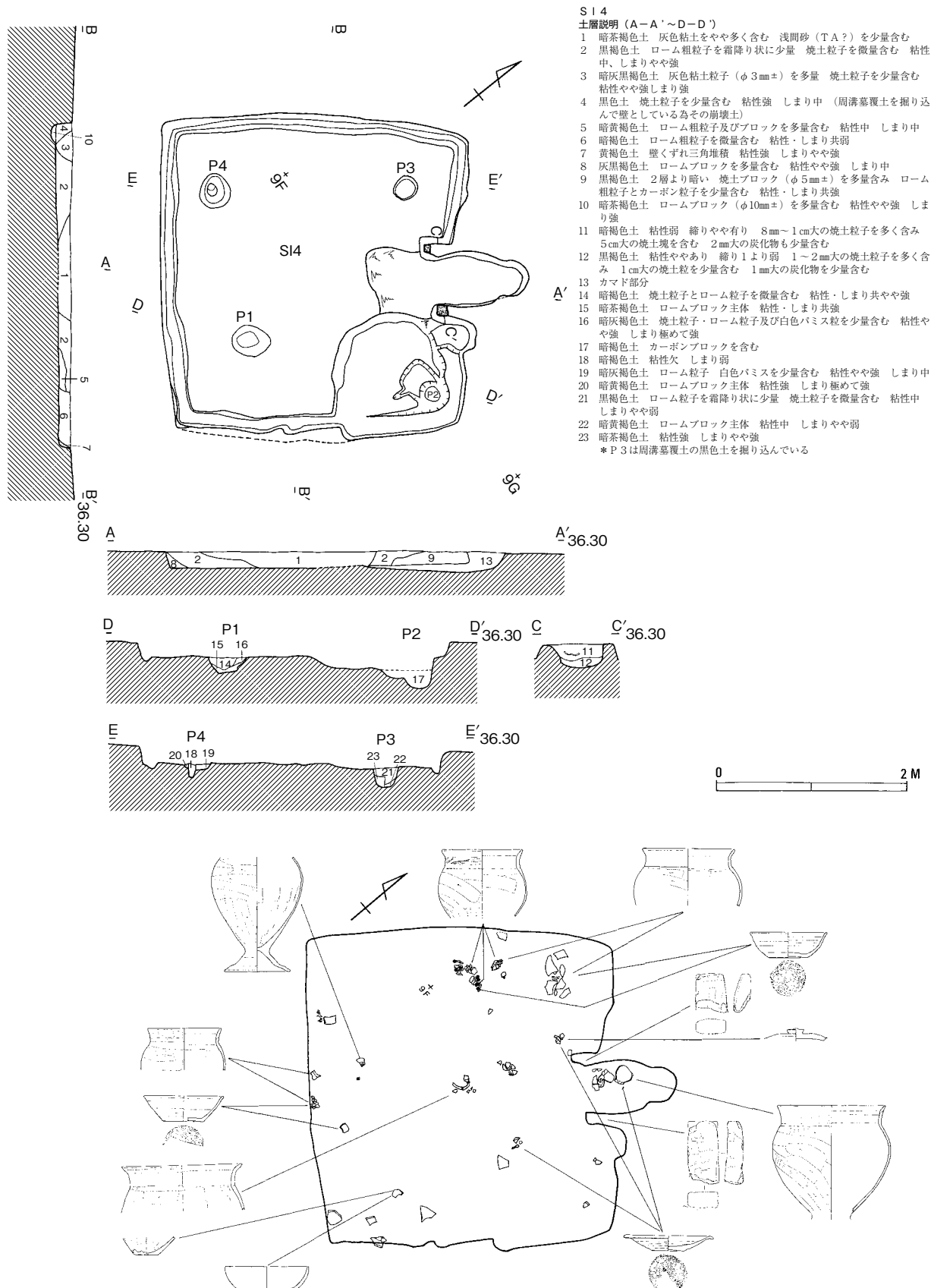


第12図 円山遺跡第2号・3号住居跡 (1/60)

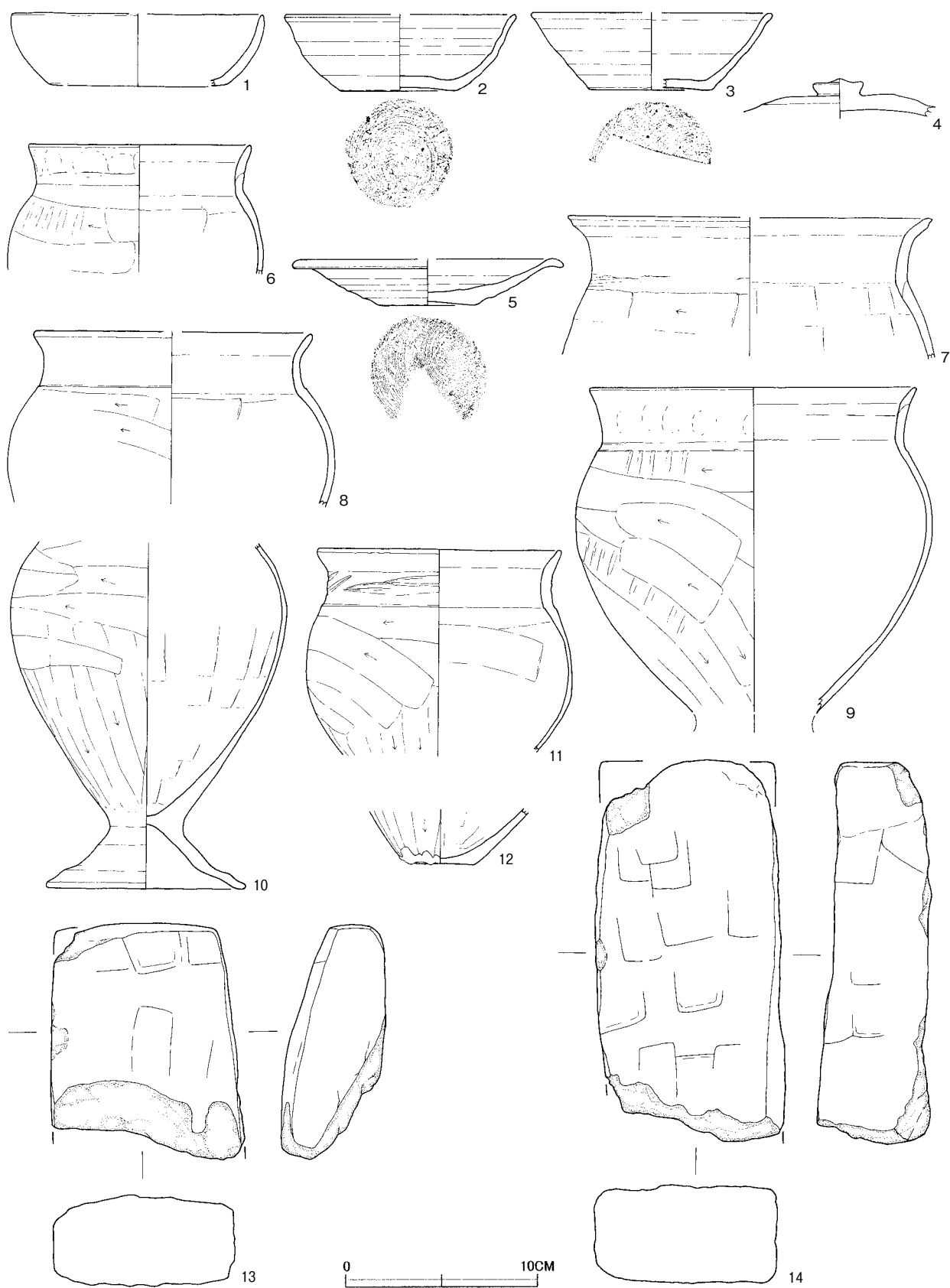


第13図 円山遺跡第3号住居跡出土遺物

円山遺跡



第14図 円山遺跡第4号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第15図 円山遺跡第4号住居跡出土遺物

第7号住居跡 S I 7 (第17図・第18図・第5表)

遺 構 D 8、E 8 グリッド付近に所在した。単独の住居で、平面形は東辺にカマドを持つ長方形を呈している。3.1m×2.8mの規模を測る。住居の主軸はN-115°-Eを示すが、カマド主軸は南に偏しN-113°-Eを示す。床は直床であり柱穴は確認されない。北西隅部がやや窪み、カマド右側から壁際に貯蔵穴状の掘り込みがある。カマドは両袖を掘り残し、住居外へ燃焼部を掘り出す形態をしているが、遺存状態が不良であり、実測図に反映されていない。遺物は貯蔵穴内より少量出土した。

遺 物 第18図10は土師器甕の口縁部である。11は埴形滓で、1/2に分断される。これらの遺物は、十世紀前半から中頃時期におさまるものである。

第8号住居跡 S I 8 (第19図・第20図・第6表)

遺 構 D 9、E 9 グリッド付近に所在した。第6、9号住居と重なっており、本住居が9号住居を切って造られている。平面形は東辺と北辺にカマドを持つ方形である。3.7m×3.2mの規模を測る。住居の主軸はN-21°-Eを示し、北カマドの軸線と一致する。東カマドはN-127°-Eを示す。北カマド前面に壁周溝が廻ることから東カマドが新しい。床は直床で柱穴は確認されなかった。南東隅部が一段高まる。出土遺物はカマド周辺と床上に散在していた。

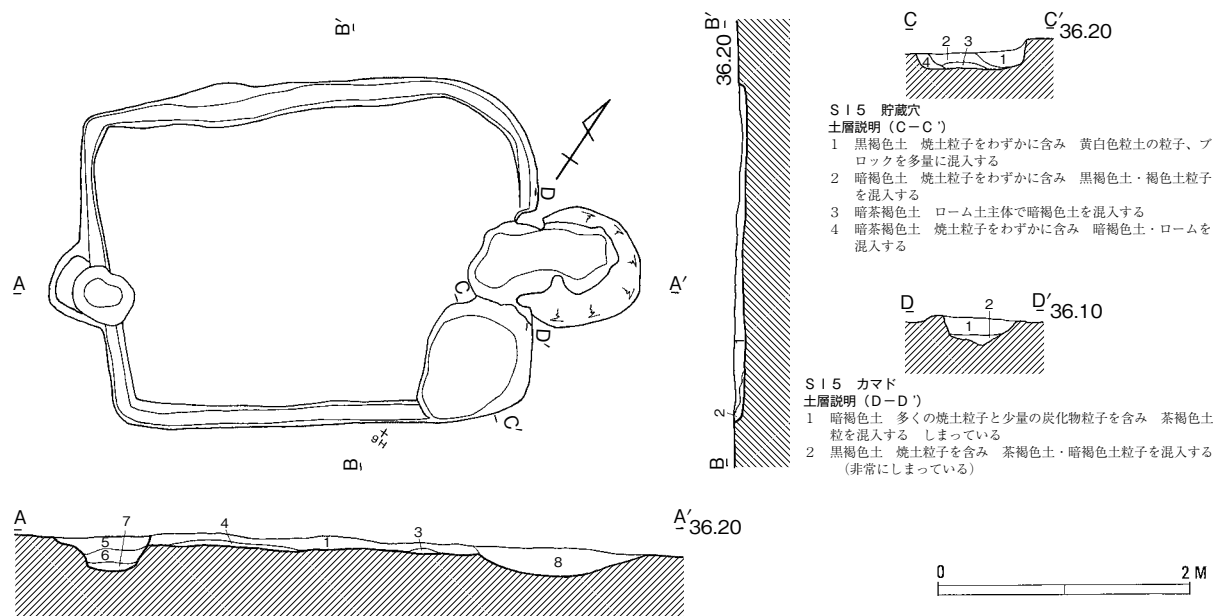
北カマドは北壁中央に燃焼部のみが住居外に位置する形で検出された。東カマドは東壁のやや北寄りに位置し、焚口部の前面が住居内に位置するが燃焼部は住居外に位置する。火床面の検出にとどまるようだ。

遺 物 第20図1～4は須恵器坏で、1は口径12.6cmに復元される。1～4の底部は回転糸切無調整である。5は須恵器高台付碗、6は須恵器皿で口径16.1cmに、7は須恵器蓋で口径12.8cmある。8～12は土師器甕で、9はコの字形口縁をしている。13は須恵器甕の胴部破片である。

これらの遺物は出土須恵器から、九世紀中～末頃におさまるものである。須恵器は南比企産と末野産の両者がみられる。

第9号住居跡 S I 9 (第19図)

遺 構 D 8、E 8 グリッド付近に所在した。平面形は南西隅の大半を8号住に切られるが、長方形を呈する。残存部で、2.6m×1.2mを測る。土層図B-B'では8号住居上に乗り、6号住居に切られるようにも観察される。残存部分の床は直床となっている。古代の土師器細片が確認されるが図化できる出土遺物は無い。

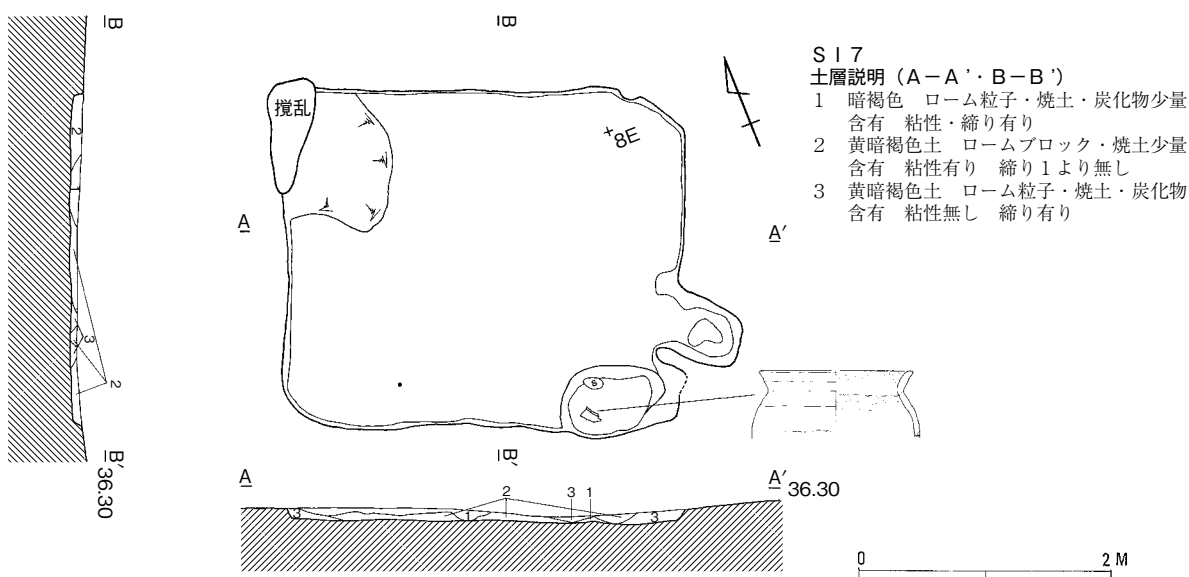


S15

土層説明 (A-A'・B-B')

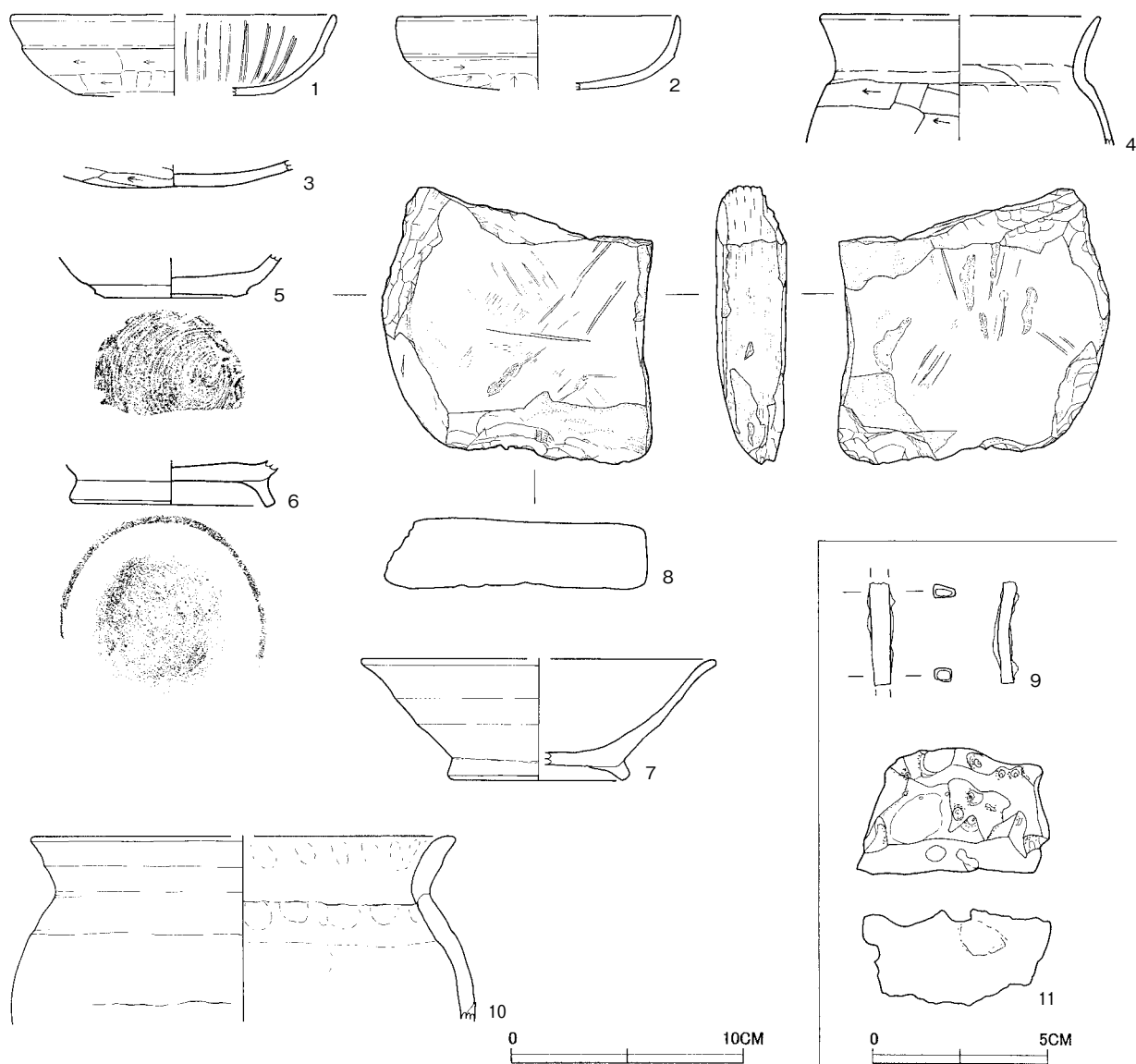
- 1 黒褐色土 粘性弱 締り強 2mm大の焼土粒をまばらに含み 5～8mm大のローム粒子を少量含む 1～2mm大の炭化物もわずかに含む
- 2 暗黒褐色土 粘性ややあり 締り1より弱 2～8mm大の炭化物を少量含む 1mm大の焼土粒を若干含む
- 3 黒色土 粘性弱 締りやや強 1mm大の焼土粒を少量含む
- 4 黒色土 粘性ややあり 締り1より弱 3～5mm大の焼土粒をまばらに含む 0.1～0.2mm大の白色粒子を少量含む
- 5 黒褐色土 粘性ややあり 締り弱 2～3cm大のロームブロックを少量含む 0.1～0.2mm大の白色粒子を少量含む
- 6 極黒色土 粘性5より強 しまり5より弱 1～2mm大の焼土粒を少量含む
- 7 黒色土 粘性ややあり 締り弱 3～5cm大のロームブロックを多く含む
- 8 カマド部分

第16図 円山遺跡第5号住居跡 (1/60)

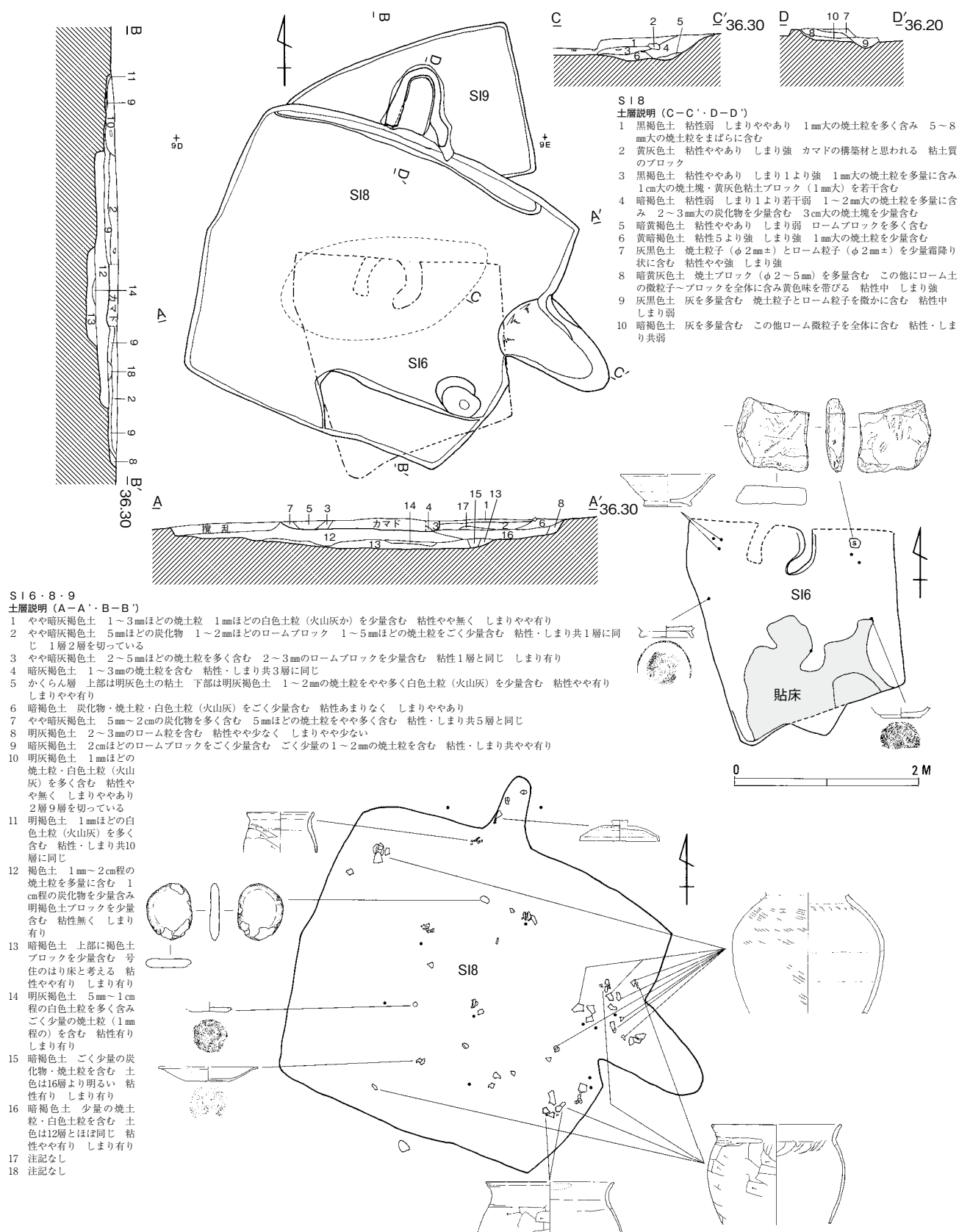


第17図 円山遺跡第7号住居跡 (1/60)

円山遺跡

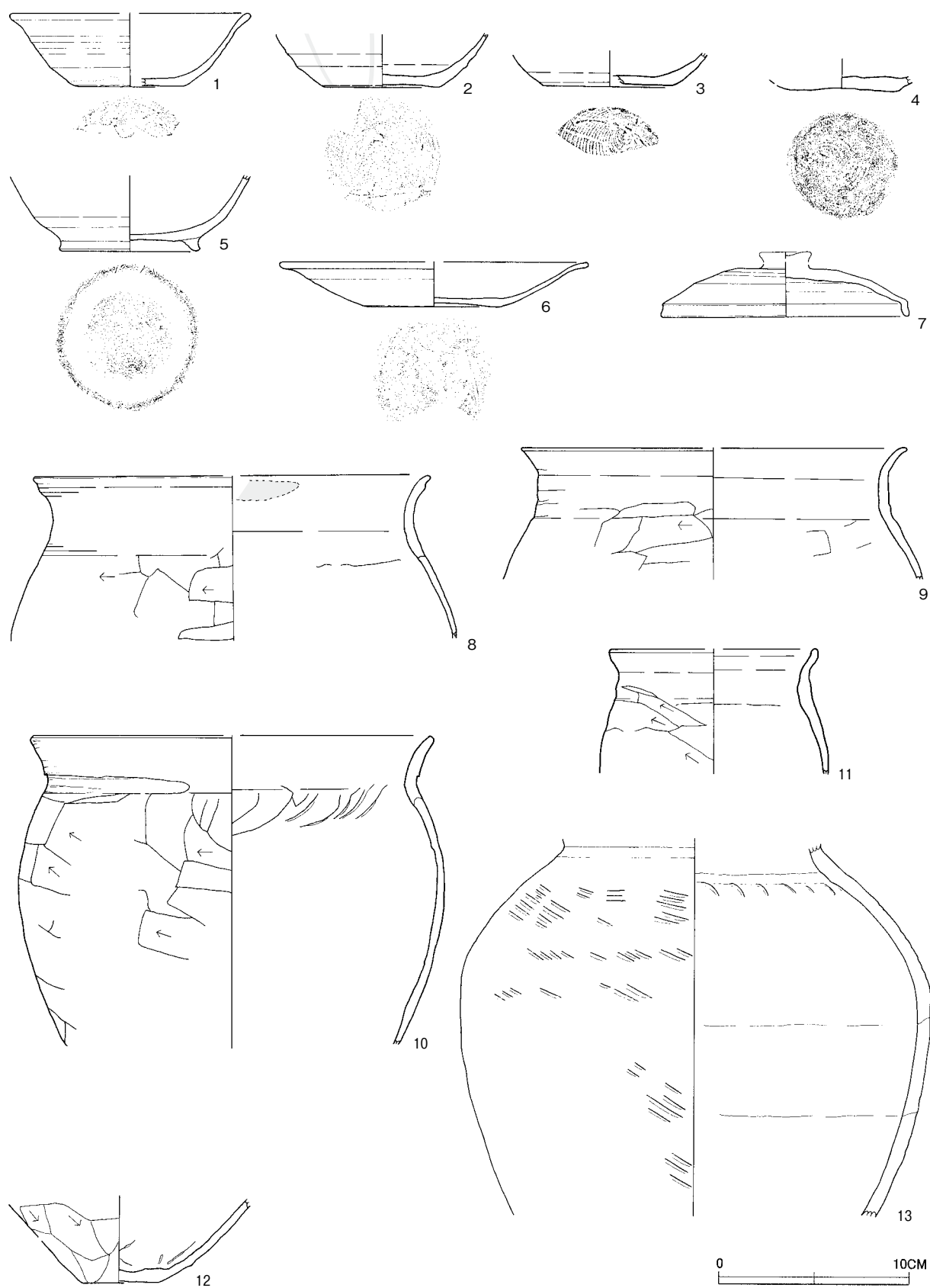


第18図 円山遺跡第5号・6号・7号住居跡出土遺物 5号住(1~4)、6号住(5~9)、7号住(10・11)

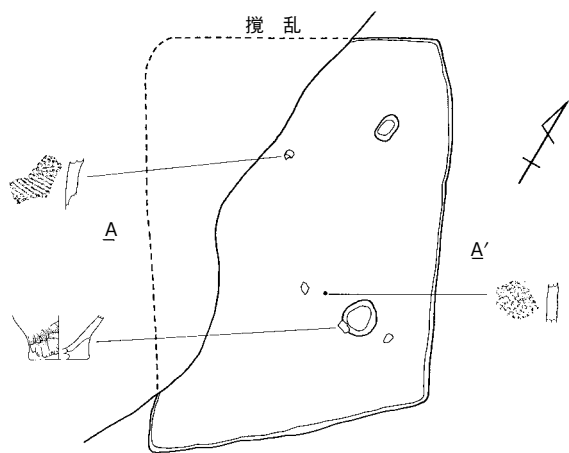


第19図 円山遺跡第6号・8号・9号住居跡、第8号住居跡遺物出土状態 (1/60)

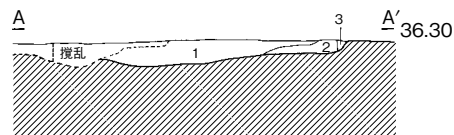
円山遺跡



第20図 円山遺跡第8号住居跡出土遺物



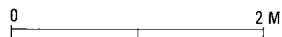
円山遺跡



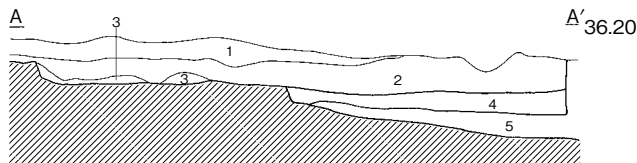
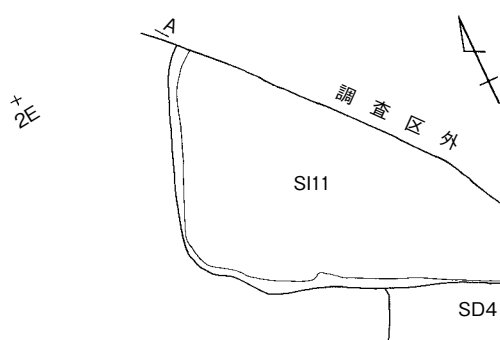
S I 10

土層説明 (A-A')

- 1 黒色土 ローム粒子と焼土粒子を少量含む
サラサラしているのが特徴 粘性弱 しまり
やや強
- 2 茶褐色土 ロームを多量に含む サラサラし
ているのが特徴 粘性弱 しまりやや強
- 3 注記なし



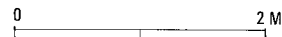
第21図 円山遺跡第10号住居跡 (1/60)



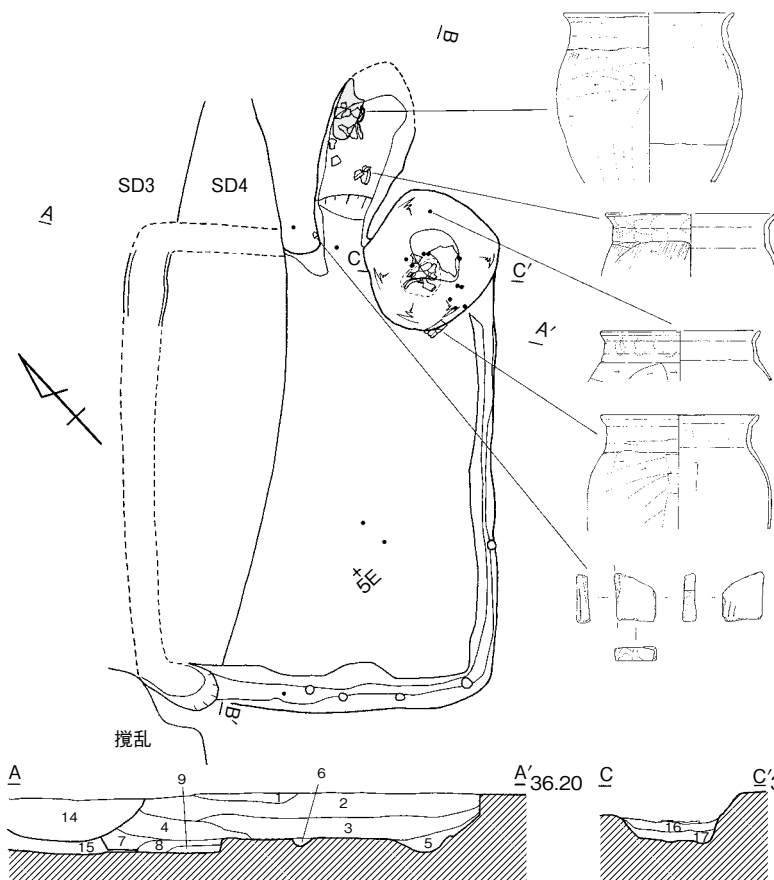
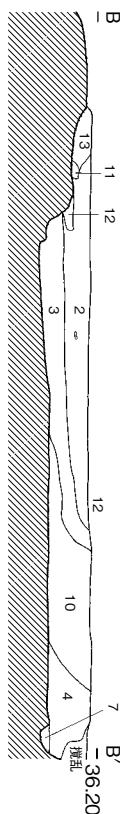
S I 11

土層説明 (A-A')

- 1 暗茶褐色土 焼土粒子を少量含む 粘性弱 しまり中
- 2 黒褐色土 焼土ブロック (φ5mm±) とカーボンブロック (φ3mm±) を多量含む 粘
性やや強 しまり強
- 3 暗黄褐色土 ローム土主体 ブロックも含む 粘性・しまり共強
- 4 黒色土 焼土粒子を微量含む 粘性・しまり共やや強 11号住居跡床 (堀方埋戻し土)
- 5 4号溝覆土



第22図 円山遺跡第11号住居跡 (1/60)



S I 12

土層説明 (A-A'・B-B'・C-C')

- 1 暗褐色土 粘性弱 締りややあり 1~10mm大の
焼土粒を少量含む
- 2 暗褐色土 粘性ややあり 締りややあり 2~5
mm大の焼土粒を多量に含む 1~2mm大の炭化物
を少量含む 黄白色粘土粒も少量含む
- 3 暗褐色土 粘性あり 締りややあり 0.5~1cm
大の焼土粒を多く含む 5mm大の炭化物をまばら
に含む 5mm~1cm大の黄白色粘土粒を多く含む
- 4 黒褐色土 粘性ややあり 締りあり 7mm大の焼
土粒を少量含む 黄白色粘土粒を少量含む (5mm
大) 0.5cm大の炭化物をまばらに含む
- 5 黒褐色土 粘性やや強 締りやや強 2mm大の焼
土粒と黄灰色粒子を少量含む
- 6 黒色土 粘性強 締り強 4cm大の黄白色粘土塊
を含む 2mm大の焼土粒を少量含む
- 7 暗褐色土 粘性ややあり 締りややあり 1~8
mm大の焼土粒をまばらに含む 5mm大の炭化物を
少量含む
- 8 黄暗褐色土 粘性強 締り強 1cm大のローム粒
を多く含む 1~2mm大の焼土粒・5mm大の黄白
色粒子を少量含む 貼床
- 9 黒褐色土 粘性強 締りややあり 1cm大のローム
粒と1~2mm大の焼土粒を少量含む 貼床
- 10 暗褐色土 粘性やや弱 しまりややあり 5mm大
の焼土をまばらに含む ローム粒子 (8mm大) を
少量含む
- 11 黄暗褐色土 粘性ややあり しまり弱 ローム粒
を多量に含む 焼土を少量含む
- 12 暗褐色土 粘性弱 しまり強 黄白色粘土を多量
に含む 3mm大の焼土粒を多量に含む
- 13 暗褐色土 粘性ややあり しまりややあり 2mm
大~1cm大の焼土粒を少量含む
- 14 3号溝覆土
- 15 4号溝覆土
- 16 暗褐色土 少量の焼土粒・ロームブロックを有す
粘性・しまり共有
- 17 暗黄褐色土 多量のロームブロック・少量の焼土
粒・暗褐色土層を有す 粘性有り しまり無し



第23図 円山遺跡第12号住居跡 (1/60)

円山遺跡

第10号住居跡 S I 10 (第21図・第24図・第7表)

遺 構 D 6、E 6 グリッド付近に所在した。平面形は西北隅の大半を攪乱部分より削平されるが、長方形を呈する。残存部で、2.2m×3.1mを測る。住居東半部の隅部分に柱穴がそれぞれ確認される。床は直床である。出土遺物は少ないが、この遺物より弥生時代後期の住居と思われる。

遺 物 第24図1は土師器甕の底部片である。やや荒い刷毛による調整痕が残る。底部が高く厚いことから壺形土器の底部であろう。弥生時代後期におさまるものと思われる。

第11号住居跡 S I 11 (第22図・第24図・第7表)

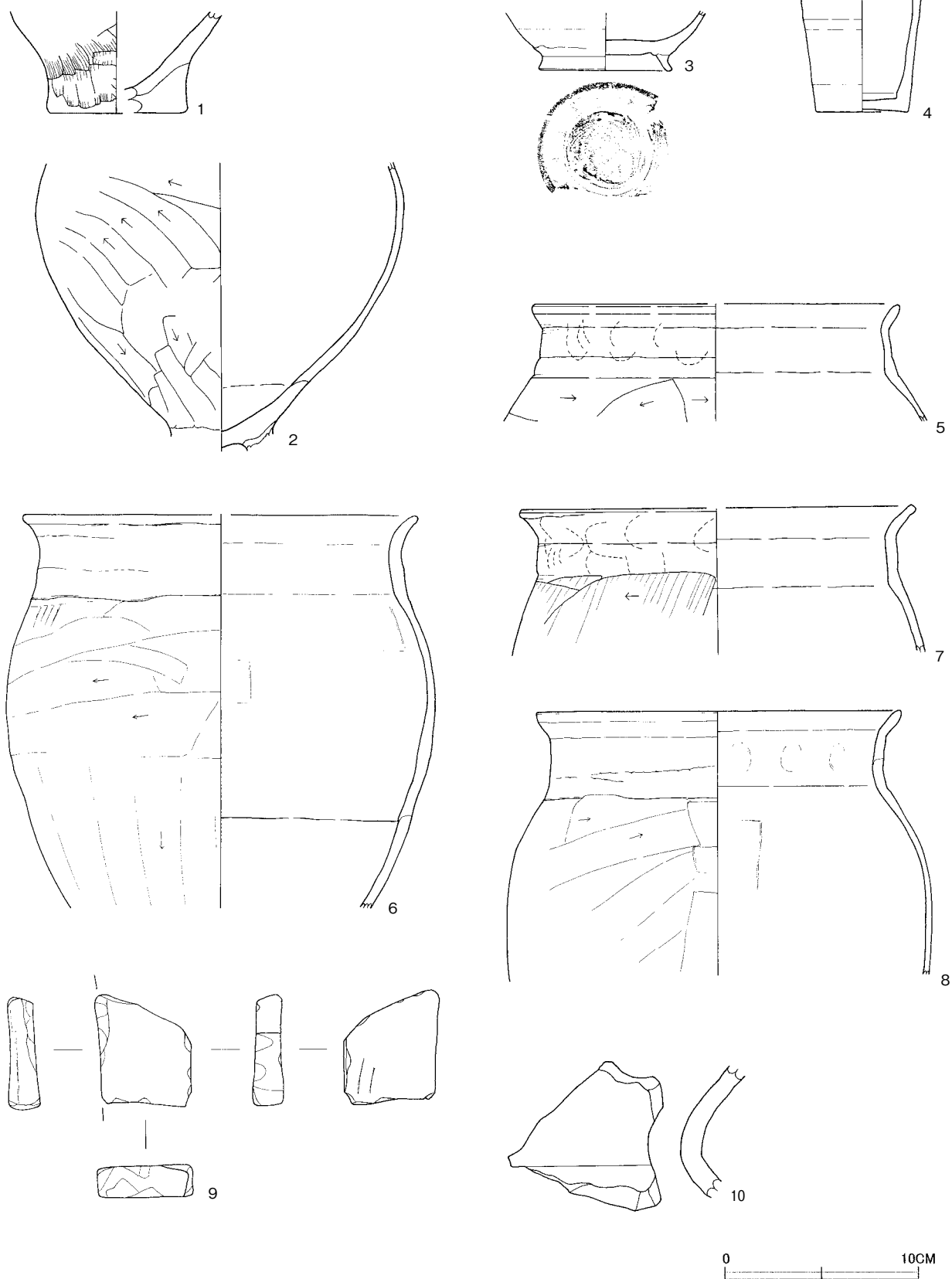
遺 構 E 2、F 2 グリッド付近に所在した。遺構の一部しか確認していないが方形をなす住居の西南部の隅部である。調査区内では3.5m×1.7mを測る。一部直床であるが大半は4号溝覆土上に載っている。住居主軸の決め手は無いが、住居壁の方位が他の古代住居とはほぼ同一方向となっていることから、平面形は西北隅の大半を攪乱部分より削平されるが、長方形を呈する。

遺 物 第24図2は土師器台付甕の体部下半の破片である。その特徴から九世紀前半代土師器台付甕である。

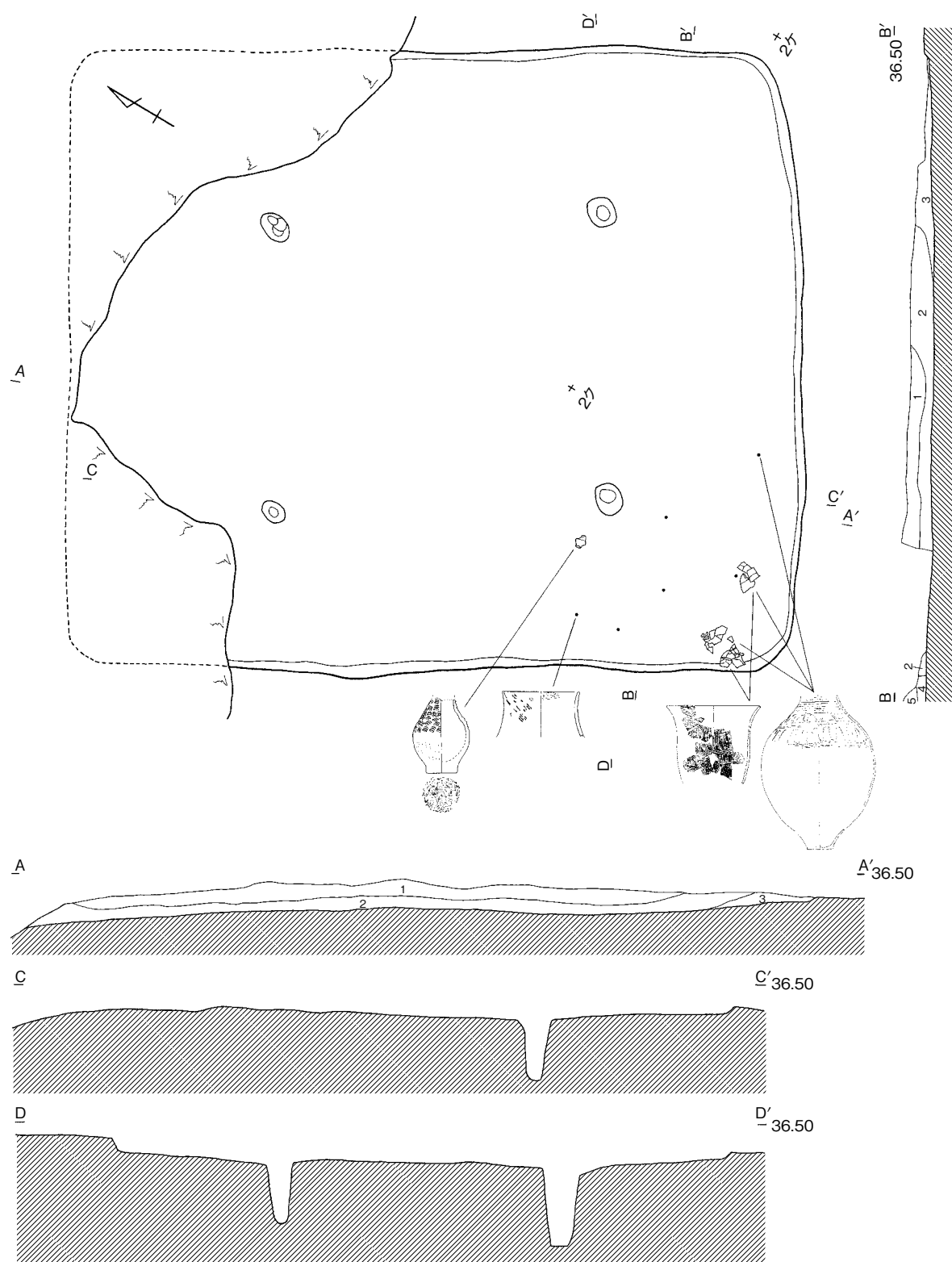
第12号住居跡 S I 12 (第23図・第24図・第7表)

遺 構 D 4、E 4 グリッド付近に所在した。平面図では3号溝、4号溝と重なりが明らかではないが、A—A'の土層図では、4号溝→12号住居→3号溝の順となっている。本住居跡の西側は遺存していないが、北辺にカマドを持つ長方形を呈すると把握されている。その規模は3.0m×3.9mを測る。カマドの軸線が住居軸線より東に触れるが、住居主軸はN-45°-Eを示す。一部直床であるが西半は4号溝覆土上に載っている。壁際には壁溝が廻り、カマド右脇から壁の間に貯蔵穴が掘られている。遺物はこのカマドと貯蔵穴内から出土している。カマドは左袖を掘り残すが右側は不明である。燃焼部を屋外に設置している。出土遺物はカマド内および貯蔵穴内から確認される。

遺 物 第24図3は須恵器碗の高台部破片である。4はコップ形須恵器で口径6.0cm底径4.8cm器高5.8cmに復元される。容量は97mlほどである。焼成良好、青灰色に焼きしまる。体部内外面ともよくナデられ、底部はやや上げ底状を呈する。体部はやや外反し、打ち削ぎ状の口縁端部をしている。南比企産である。5～8は土師器甕で8は口径23.8cmを測る。5、7、8はコの字状の口縁をしているが頸部の張りが少ない。9は凝灰岩製の砥石である。折損しているが平広端面および側面部を砥面としている。10は須恵器甕頸部片である。これらの遺物は九世紀前半～中ごろにおさまるものと思われる。



第24図 円山遺跡第10号・11号・12号住居跡出土遺物 10号住（1）、11号住（2）、12号住（3～10）



S113

土層説明 (A-A'・B-B')

- 1 黒色土 少量の炭化物・粘土ブロック・ローム粒を含む 粘性あり サラサラして しまりを欠く
- 2 暗灰褐色土 ロームブロック・炭化物を少量含む 粘性あり しまりややあり
- 3 褐色土 少量のローム粒・焼土粒を含み 下部にロームブロックを有す 粘性1層よりもなし しまりあまりなし
- 4 黄褐色土 ローム土主体 炭化物を少量含む 粘性・しまり共やや強
- 5 灰黒褐色土 白色バミス (φ1mm以下) を大量に霜降り状に含む 粘性中 しまりやや強

第25図 円山遺跡第13号住居跡 (1/60)

第13号住居跡 S I 13 (第25図・第26、27図・第8表 a)

遺 構 B区のキ1、ク1グリッド付近に所在した。北側は削平され不明、西側は5号溝と重なる。土層図等の記録では確認できないが、古墳周溝とも見える5号溝に切られているものと推定される。遺存状況から住居平面形態はほぼ隅丸の方形を呈している。長辺方向を住居主軸とすると住居主軸はN-32°-Wを示す。規模は約7.2m×6.15mを測る大型の住居と認められる。床は平坦で直床のようで、炉跡は検出されていないようである。床面には住居形態に合わせるように柱穴が対角線上に配置される。柱穴間の距離は約3.3m×2.9mを測る。柱穴は最深で0.8m穿れている。出土遺物は南隅部から壺・甕等の土器破片が出土している。出土遺物は少なく、他時期の混入も少ないことから、弥生時代中期の住居と思われる。

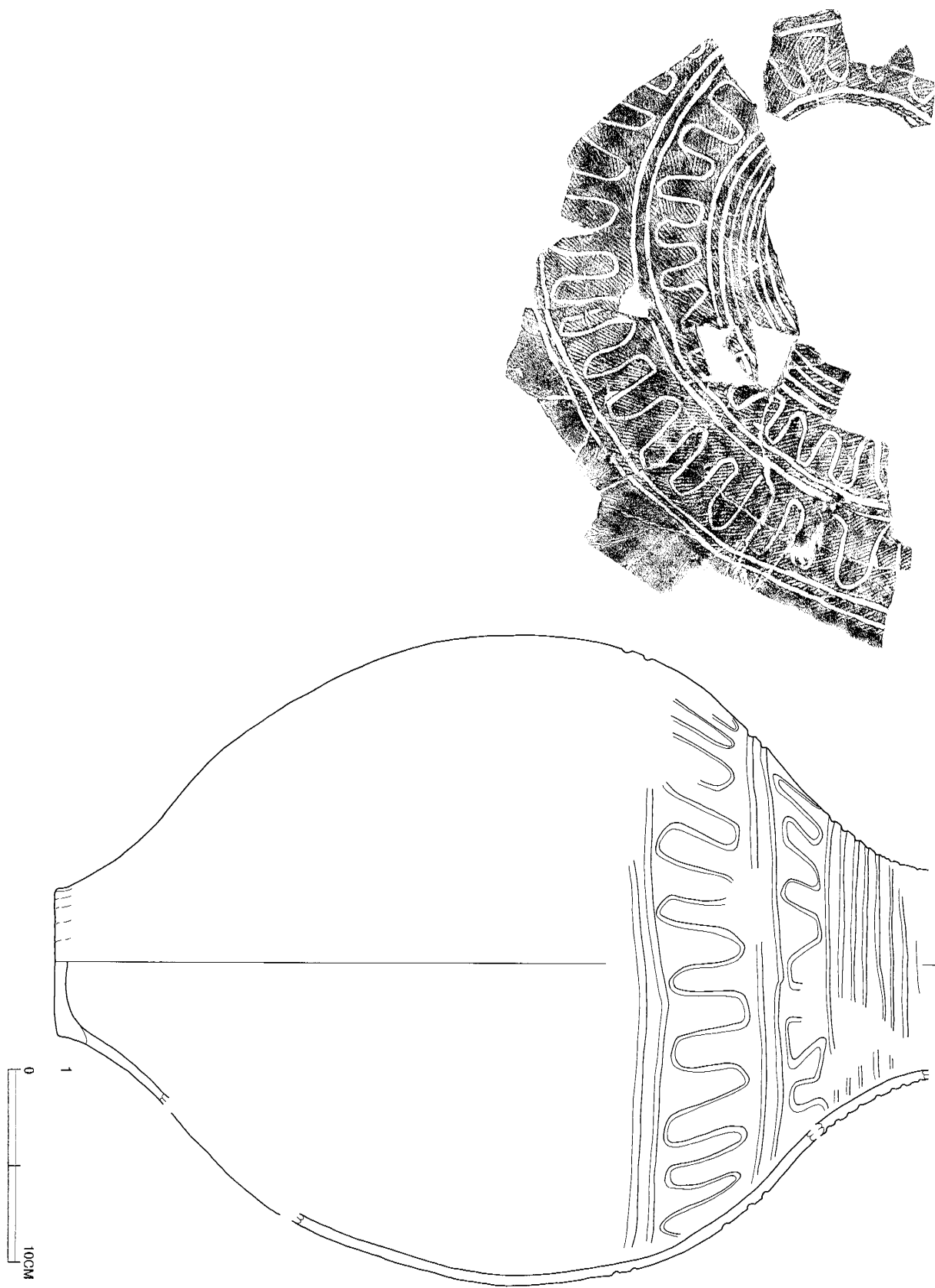
遺 物 第26図1は頸部体部の遺存した壺形土器で、底部は接合しないが同一個体と思われる。頸部の張り体部の張りがやや弱く細めの印象を受ける壺である。頸部に文様帯を構成しており、遺存する頸部から胴上半部にLR縄文を4段から5段ほど地文として施文した後に沈線により一對の直線と波状線を交互に二段重ね、3段目以上は沈線のみとなっている。この文様は頸部を取り巻くように施文されるが、施文の始点が明瞭で右から左方向へ進行している。器壁は3mm前後と薄く胎土に雲母微粒子を比較的多く含む。第27図2は口縁がゆるやかに外反する甕形土器で、口縁に刻みを付け、体部外面に櫛状工具による斜行沈線を右行・左行と交互に施文している。いわゆる横羽状条痕文である。3は頸部を欠失する小壺で現存高10.6cmを測る。体部上半から頸部へ三本一組の櫛歯により沈線文を廻らす。胴部上半は斜行し、頸部は上位へ重ねていく。施文順は下位より上位方向である。いわゆる櫛歯条痕文である。底面に樹種は不明だが木葉痕が残されている。器壁は4mm前後、胎土に雲母粒子を多く含む。4は壺口縁端部破片で復元口径は約54cmとなる。口端部外面に篋等の軸部で任意の刺突を加えている。5はLR縄文が地文になる甕形土器である。6～9は底部破片で、8は胎土に雲母粒子を含んでいる。10～30は覆土、床面等から出土した細片である。いずれも沈線あるいは縄文部の文様を残す破片である。これらの土器群は弥生時代中期後半の土器群の中で理解されるものと思われる。また、栗林2式系統の条痕文土器が見られることや、在地の土器である5の吉ヶ谷式土器が主体ではない点などが、注意される。

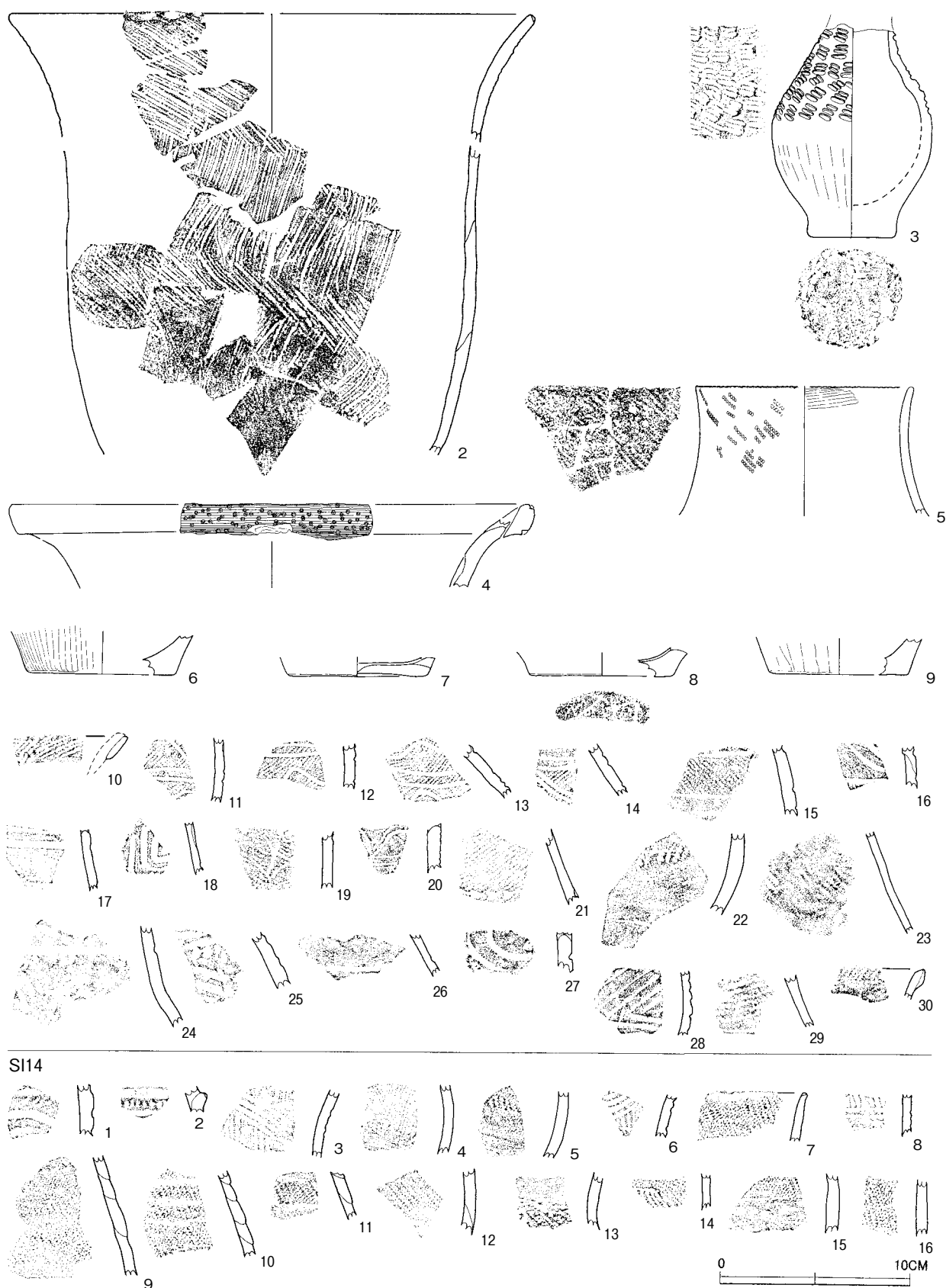
第14号住居跡 S I 14 (第28、29図・第27、30、31図・第8表 b、9表)

遺 構 A区のF4-5、G4-5グリッド付近に所在した。北東側は調査区外で不明とされるが、調査区内におさまっているものと推定される。遺存状況から住居平面形態はほぼ隅丸の方形を呈している。長辺方向を住居主軸とすると住居主軸はN-30°-Wを示す。規模は約6.5m×5.1mを測る。床は平坦で直床のようで、炉跡は北側柱穴間に検出されている。床面にはいくつか柱穴が認められるが主柱穴はP1～4で、住居形態に合わせるように配置される。柱穴間の距離は約3.2m×3.1mを測る。柱穴は最深で0.8m穿れている。出土遺物は比較的多く、炉周辺から北西隅部に集中していた。とくに炉の西側0.5mの位置に甑が出土していた。また、柱穴P2付近は甕が一個体出土した。これらの土器から本住居は、弥生時代中期末から後期前半時期におさまると思われる。

遺 物 第30図1は頸部体部の遺存した壺形土器で、口縁部は接合しないが同一個体と思われる。胴部中位に最大径を有し頸部は緩やかに外反する。口縁部は二個一對の小突起を設け、口縁周上に数単位を配したものである。頸部から胴上半分LRの斜縄文帯で飾るが中位を施文せず無紋帯として残している。器高約85cm、口縁部径約56cm、頸部径24cm、胴部最大径59cm、底径23cmを測る。2は甕形土器の口頸部で肥厚させた口縁部にLRの斜縄文を施す。3は粗製の甕形土器で胴部上半に最大径を有し直立気味に口頸部を立上

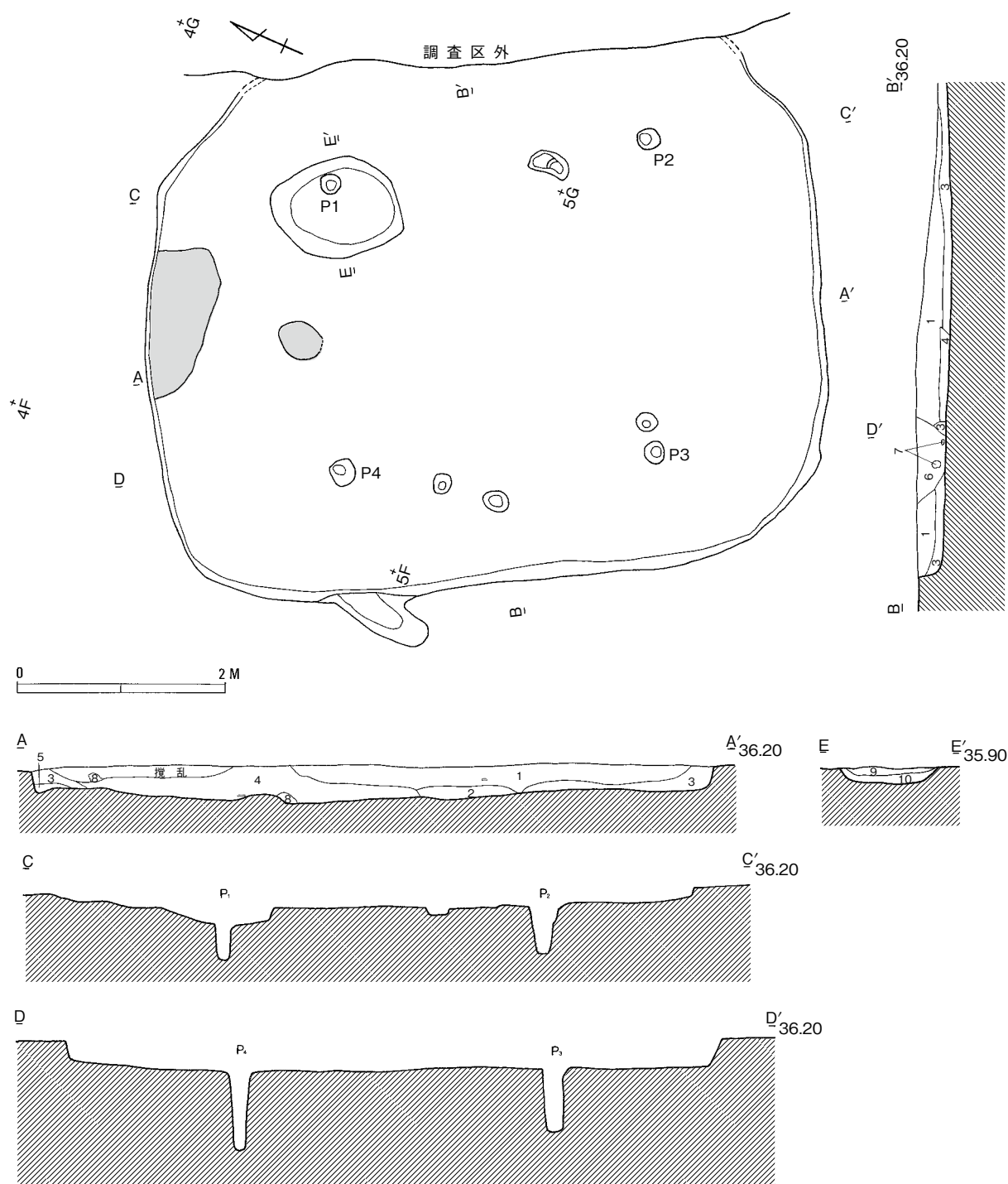
第26図 円山遺跡第13号住居跡出土遺物 1





第27図 円山遺跡第13号住居跡出土遺物2、第14号住居跡出土遺物（弥生）

円山遺跡



S114

土層説明 (A-A'・B-B')

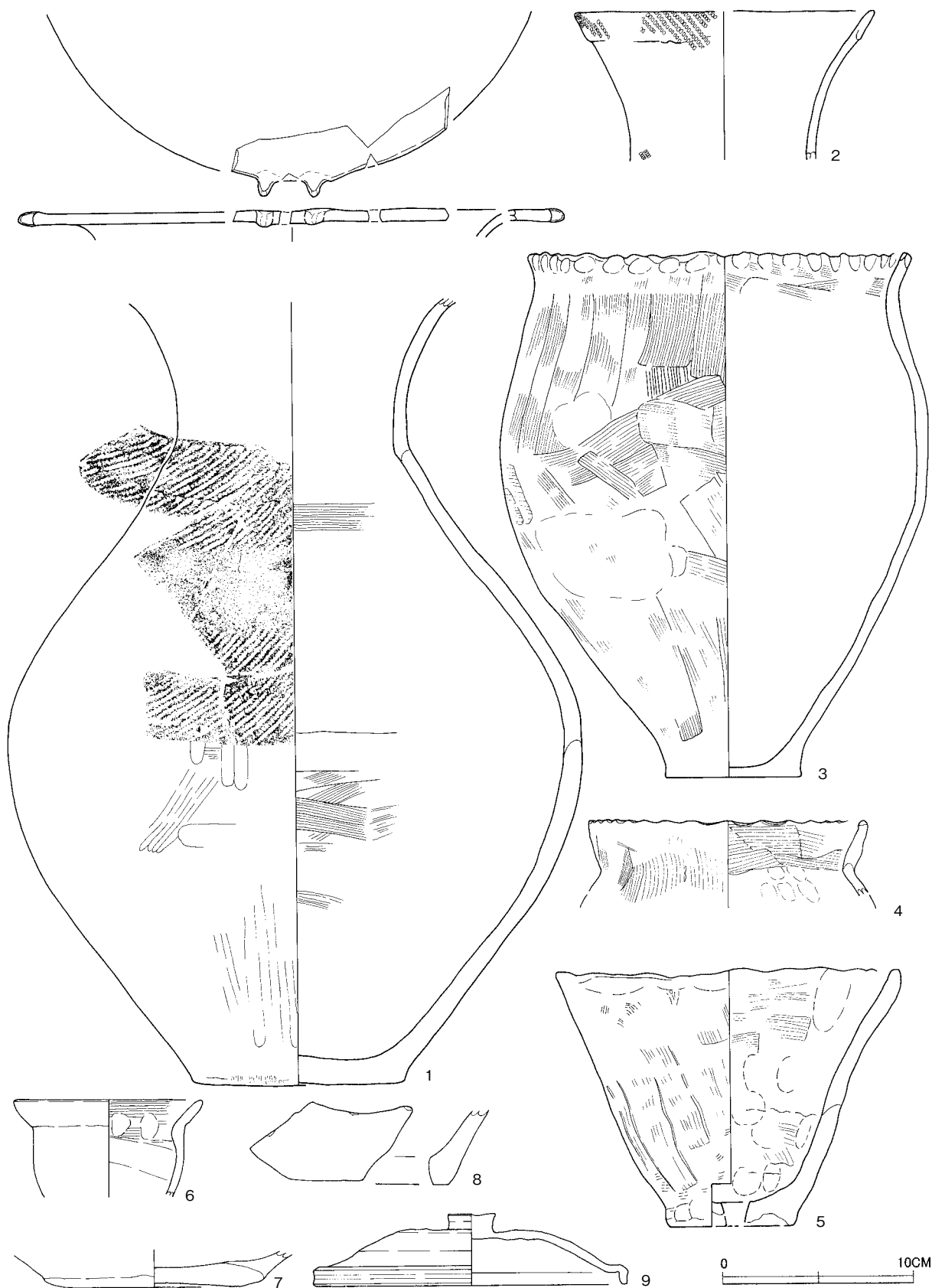
- 1 黒褐色土 粘性弱 しまり有 3～5mm大の焼土と炭化物を多く含む 0.1mm大の白色粒子を多量に含む
- 2 黒褐色土 粘性1より有 しまり有 5mm大の焼土を多く含む 黄白色粘土粒 (1cm大) をまばらに含む 1cm大のローム粒を少量含む
- 3 暗褐色土 粘性弱 しまり有 1～2cm大のローム粒を多く含む 2～3mm大の焼土粒を少量含む
- 4 黒色土 粘性弱 しまりやや有 1～5mm大の焼土粒を多く含む 0.1mm大の白色粒子を多量に含む 1cm大のローム粒をまばらに含む
- 5 暗黄褐色土 粘性やや有 しまり強 1mm大の焼土を少量含む 2cm大のローム粒を多く含む
- 6 黒色土 粘性ややあり しまりややあり 1cm大の焼土と炭化物をまばらに含む 0.1mm大の白色粒子を多く含む
- 7 黄暗褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒によって黄色くみえる土 6の中にブロック状あり
- 8 ローム粒子を多く含むブロック状土
- 9 暗褐色土 1cmくらいのロームブロックを少量含む 粘性弱 しまり強
- 10 黒褐色土 焼土・炭化物・バミスをやや多く含む 粘性・しまり共中

第28図 円山遺跡第14号住居跡 (1/60)

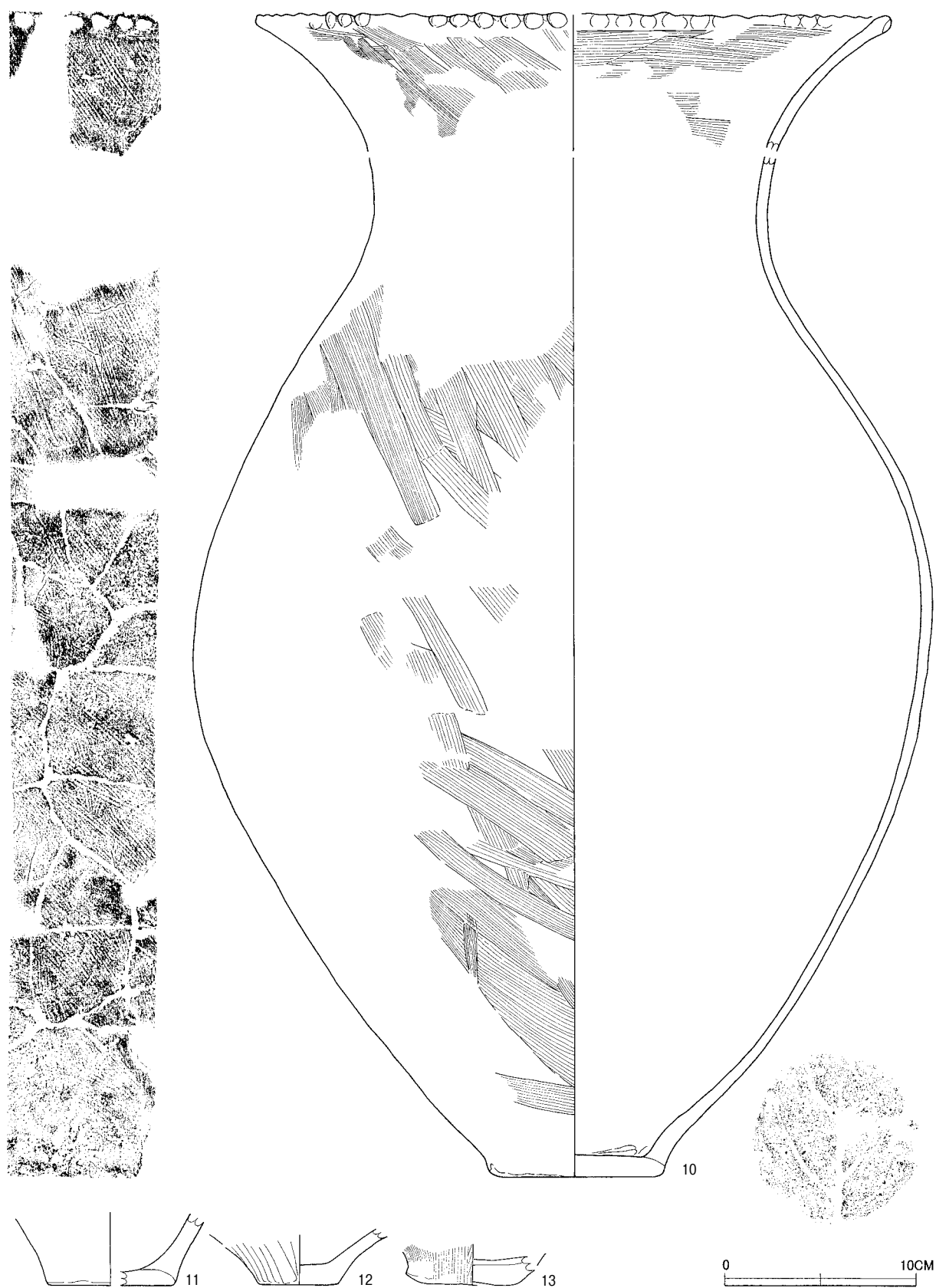


第29図 円山遺跡第14号住居跡遺物出土状態 (1/60)

げ口縁部を少し外反させる。口縁端部は指頭によるつまみ上げにより波状口縁になるよう装飾する。器高58cm、口径40cm、胴部最大径45cm、底径14cmを測る。4は甕形土器の口縁部で頸部がくの字状になる。口縁部はやや内湾気味になり、口端部には棒状工具による浅い刻みをつけている。口径約30cmを測る。5は甑形土器で漏斗状を呈し、底部に一孔を開けている。器壁は厚く、口縁部も不整形で粗雑な感がある。器高13.7cm、口径18cm、底径6.6cmを測る。孔径は約1cmである。6は碗形土器で口縁部が大きく開き、体部は丸底になるものと思われる。口径は約19cmを測る。7は底径が約10cmを測る壺の底部と思われる。8は在地産の古代～中世の甑底部片と思われる。9は須恵器蓋であり、内面天井部に研磨痕が見られ、重ね合わせ痕とあるいは転用硯の可能性もあろうか。第31図10は大型の壺形土器で、胴部中位に最大径を持つ。器高が高く、瘦身頸部の外反も高く緩やかである。口唇部は指頭圧による波状装飾を加えている。体部には刷毛による整形痕が、底部には木葉痕が残る。器高約61cm、口径約33cm、頸部径21cm、胴部最大径約33cm、底径9cmを測る。11～13は底部小破片でいずれも壺・甕のものであろう。8～9は混入品であるが、主体は弥生時代中期末から後期前半の土器群であり、これらは須和田式や宮ノ台式の特徴を持つ大型の壺・甕などである。



第30図 円山遺跡第14号住居跡出土遺物 1



第31図 円山遺跡第14号住居跡出土遺物2

第15号住居跡 S I 15 (第32図・第33図・第10表)

遺 構 A区のF 6グリッド付近に所在した。平面形態は方形で南北に長い。規模は約3.8m×3.1mを測る。住居内には壁溝が廻り、南辺部分では二倍の広さがある。また、東辺の南隅に偏ってカマドが位置する。火床面の掘方によると造替えが観察される。このカマドを通る軸線を住居主軸とするとN-110°-Eを示す。床は平坦で直床のようで、床面には中央部と北西隅付近に柱穴が認められる。出土遺物は南壁溝からカマド付近で認められた。これらの土器から本住居は、十世紀前半から中ごろの時期におさまると思われる。

遺 物 第33図1は土師器坏で口径約13cm、内面は赤彩される。2は須恵器碗、口径約18cmと大形である。3・4は酸化焰焼成の須恵器で、体部はふくらみを持たず直線的に外反する。口径は13~14cm前後である。底径は7cm、付高台である。5・6は須恵器甕破片。7は近世期の黄釉がかけられる片口鉢の細片である。住居の時期は3・4の示す十世紀後半代に比定される。

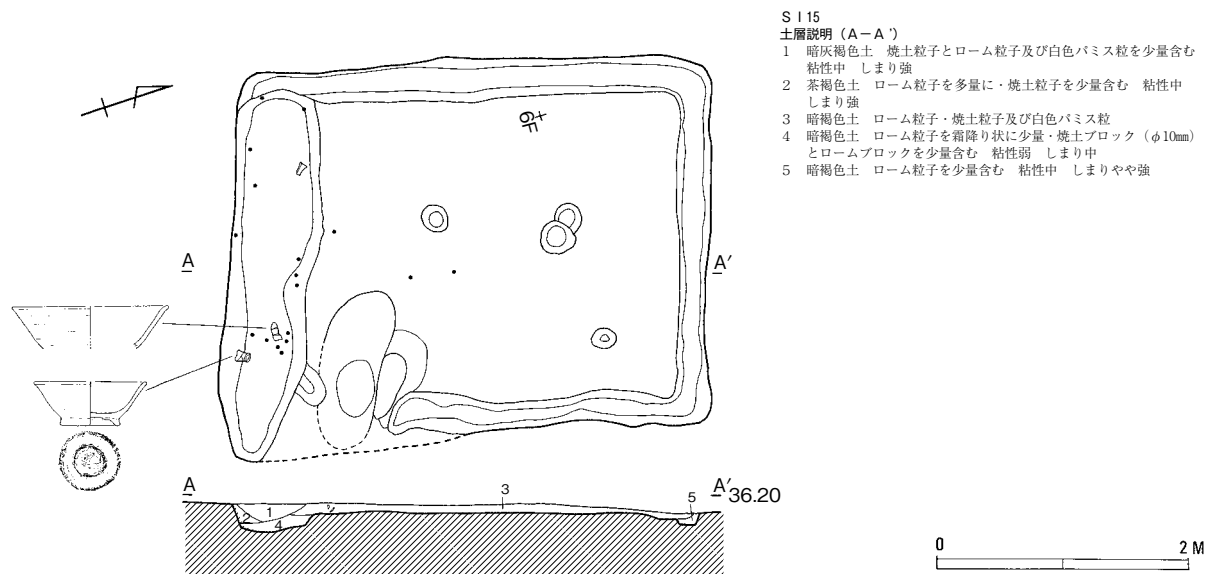
第16号住居跡 S I 16 (第34~37図・第11表)

遺 構 A区のG 7、H 7グリッド付近に所在した。土層図では16号住居の埋没後、17号住居が造られるようだが、平面図では16号住居の北辺~東辺は示されていない。東辺部は調査区際にカマド焚口部が現れていることから、この付近に東壁が廻るものと推定される。想定される住居規模は方形を呈し約4.5m×3.6mを測る。東辺にカマドが位置し、このカマドを通る軸線を住居主軸とするとN-58°-Eを示す。床は南辺部に窪みがあるようだが詳細は不明である。他住居に比しても掘り込みが深く、柱穴は確認されていないようである。遺物は覆土中より多数出土している。

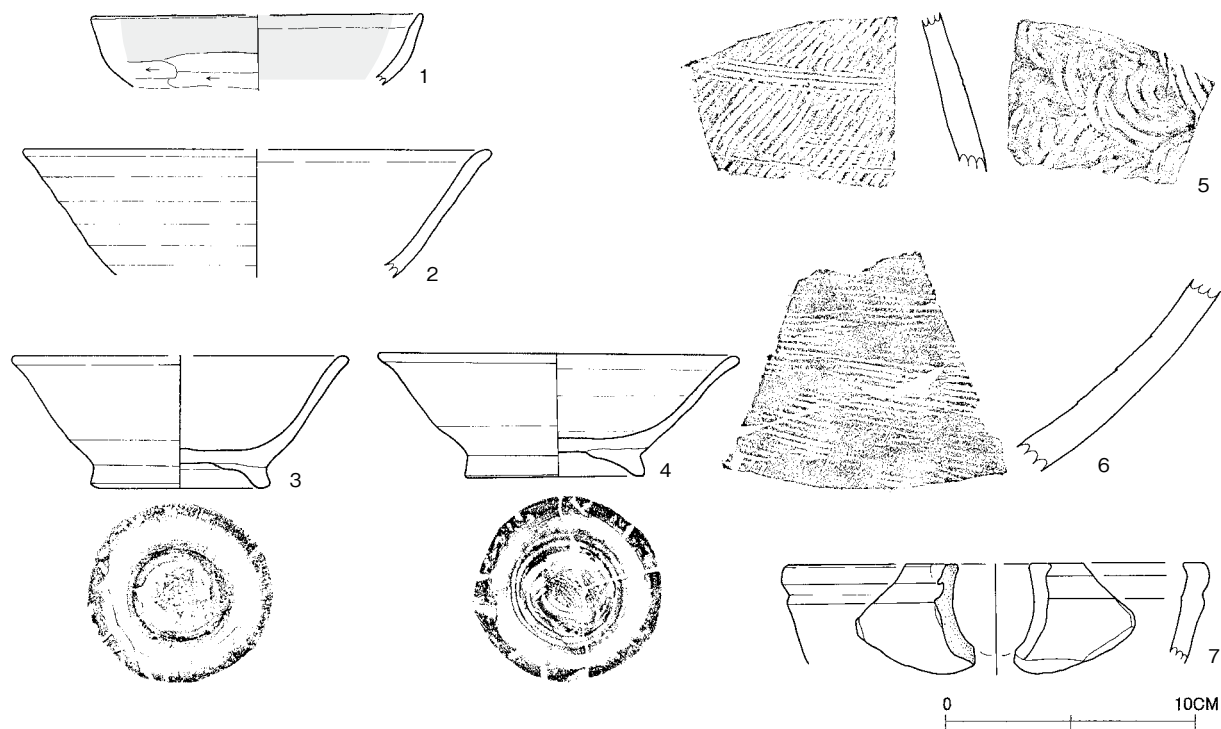
遺 物 第33図1・2・3は土師器坏で平底、薄い造りで、体部・底部ともヘラケズリ成形である。3は口径13cmに復元される。4~15は須恵器坏で底部は回転糸切り無調整である。口径底径比はほぼ2対1となっている。14・15は浅くなる。15は体部に「大」又は「丈」の墨書がある。底面にも墨痕が残る。16は口径約24cm近い大形の須恵器蓋。17は蓋破片。18は須恵器壺Gの体部破片。復元底径4.3cm、頸部径約8.1cm、頸部高約10.4cmを測る。焼成は灰色、肩部に自然釉がかかる。頸部を欠失する。断面紫灰色、内面白灰色を呈する。19は須恵器長頸壺の口縁。20、21は中世期の灰釉陶器破片である。22~25は土師器甕で、22、24は強いコの字状をしている。いずれの土器も薄く、成形時の指頭圧痕が残る。26は須恵器甕の口縁部破片。27~30は鉄製品で、27・28は棒状の鉄片、29はやり鉋の刃先であろう。30は端部を作り出す鉄片で容器の一部であろう。31は鉄滓。これらの遺物の年代は8世紀末から9世紀前半代の時期におさまるものである。

なお、壺Gの類別(文献25)では、太型と中太型と細型に区分される。円山遺跡例は肩部が丸みを持ち、胴部径7cm前後、口径と胴径の比が2:3~1:1、頸部長と胴部高の比が1:2の値を示す。この特徴は中太型b類第Ⅱ形式に比定できる。これは畿内では810年頃とされる。現在のところ生産地が伊豆・駿河両国のほか確かめられていないが、長岡京跡や同時代の全国の官衙・城柵などでの出土があり、その特異な性格が指摘されている。関東で集落からの発見例があり、衛士や防人など兵士として挑発された農民の水筒に当たる備品としてもたらされたとも考えられている。埼玉県では円山遺跡のほかに深谷市台耕地遺跡、深谷市白山遺跡、行田市築道下遺跡、熊谷市西別府館跡などでの出土が知られる。また、鳩山窯跡群内の小谷A遺跡からの発見もあり、同窯跡群での生産も推定されている。

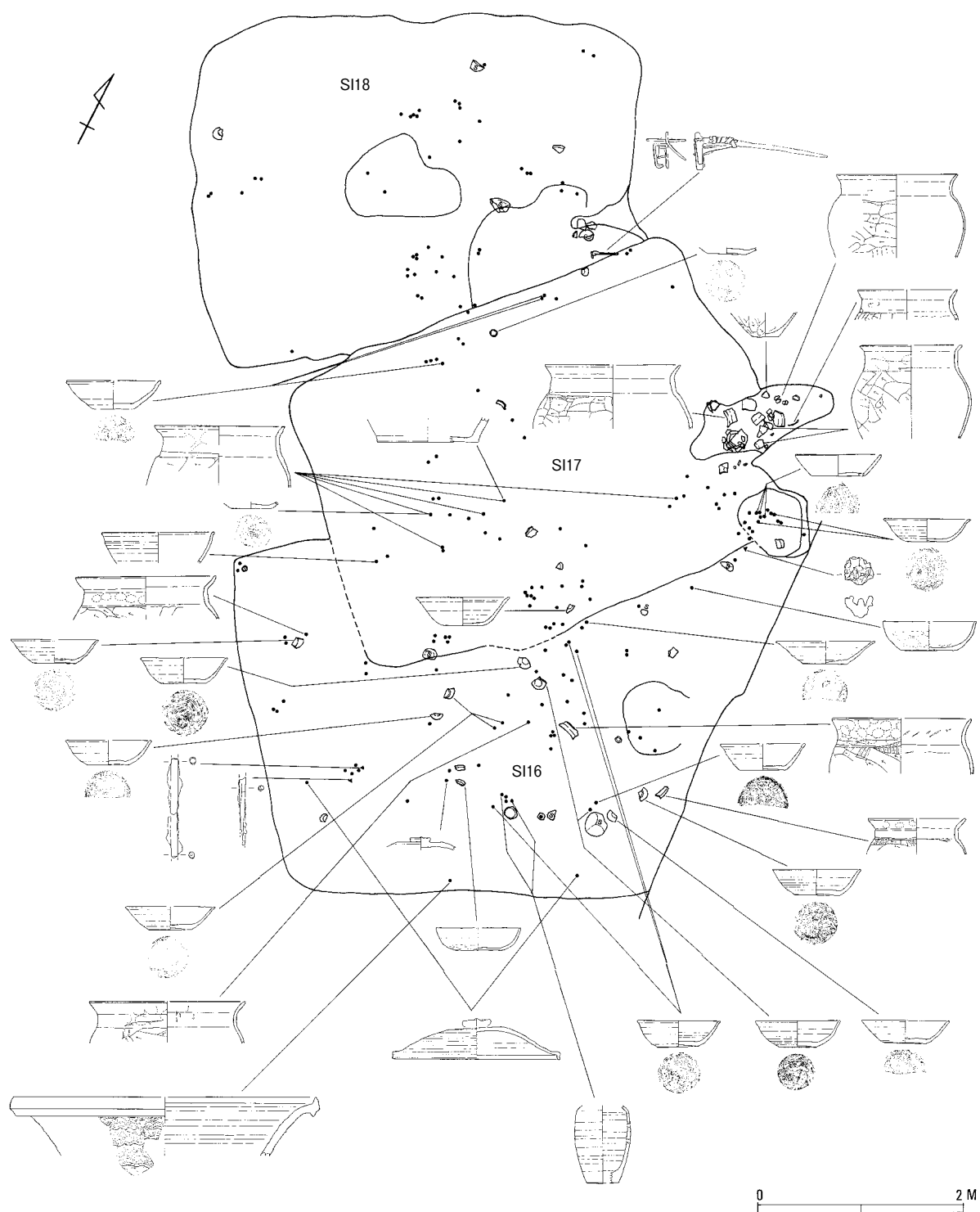
円山遺跡



第32図 円山遺跡第15号住居跡 (1/60)



第33図 円山遺跡第15号住居跡出土遺物



第35図 円山遺跡第16号・17号・18号住居跡遺物出土状態 (1/60)

第17号住居跡 S I 17 (第34、35、38、39図・第12表)

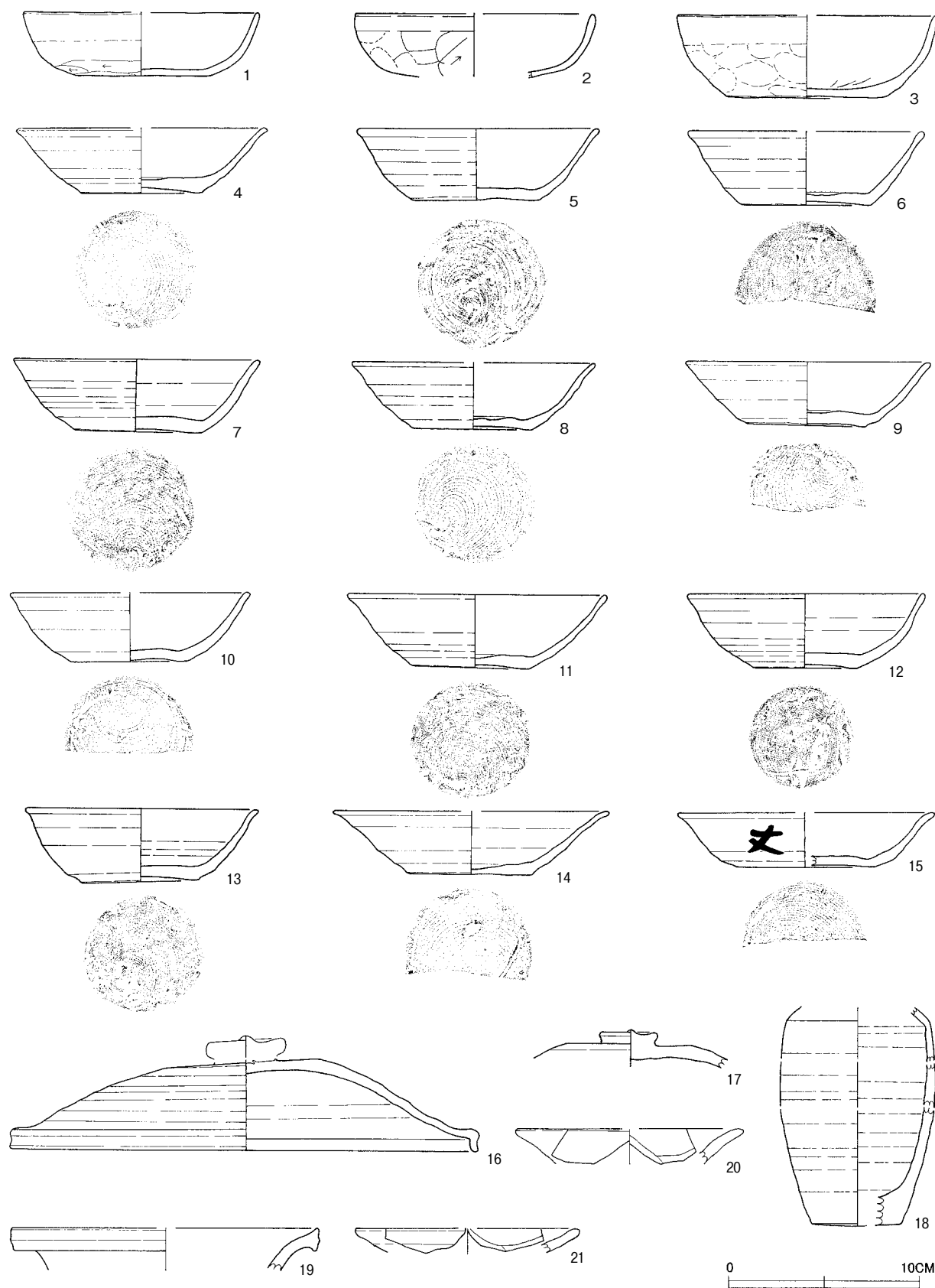
遺 構 A区のG 6、H 6グリッド付近に所在した。18号住居と16号住居の埋没後、17号住居が造られる。東辺にカマドを有する方形住居で東西に長く、4.1m×3.2mを測る。住居主軸はN-42°-Eを示す。壁溝が全周すると推定されるが、南辺の一部が不明瞭となる。また、北西隅部が外側に一段下がっており入り口状となる。東辺の南寄りにカマドが位置する。燃焼部は壁外に張り出し、袖は造りつけられている。南西隅部にもカマド痕跡が残り、燃焼部が壁外に張り出していた。壁溝が一部重なっており、カマドが作り替えられたものであろう。床の中央部北寄に火床が一箇所認められるが、柱穴痕は確認されていない。小鍛冶住居として使用されたものであろうか。遺物はカマドおよび覆土中より多数出土している。

遺 物 第38図1は土師器坏で平底、薄造である。2～10は須恵器碗と坏で口径12～13cmに復元される。底部は回転糸切り無調整である。口径底径比は2対1.5に近づく。6は二次比熱を受け、器壁が発泡している。9は灯心の焼付きが認められ、灯明皿としての使用が推定される。11～22は土師器甕であり、11・17・22以外はいずれも小破片からの復元である。コの字状口縁甕はややコの字がゆるく崩れかけている。22は台脚の剥離がある。これらの遺物の年代は九世紀初頭から中ごろの時期におさまるものである。

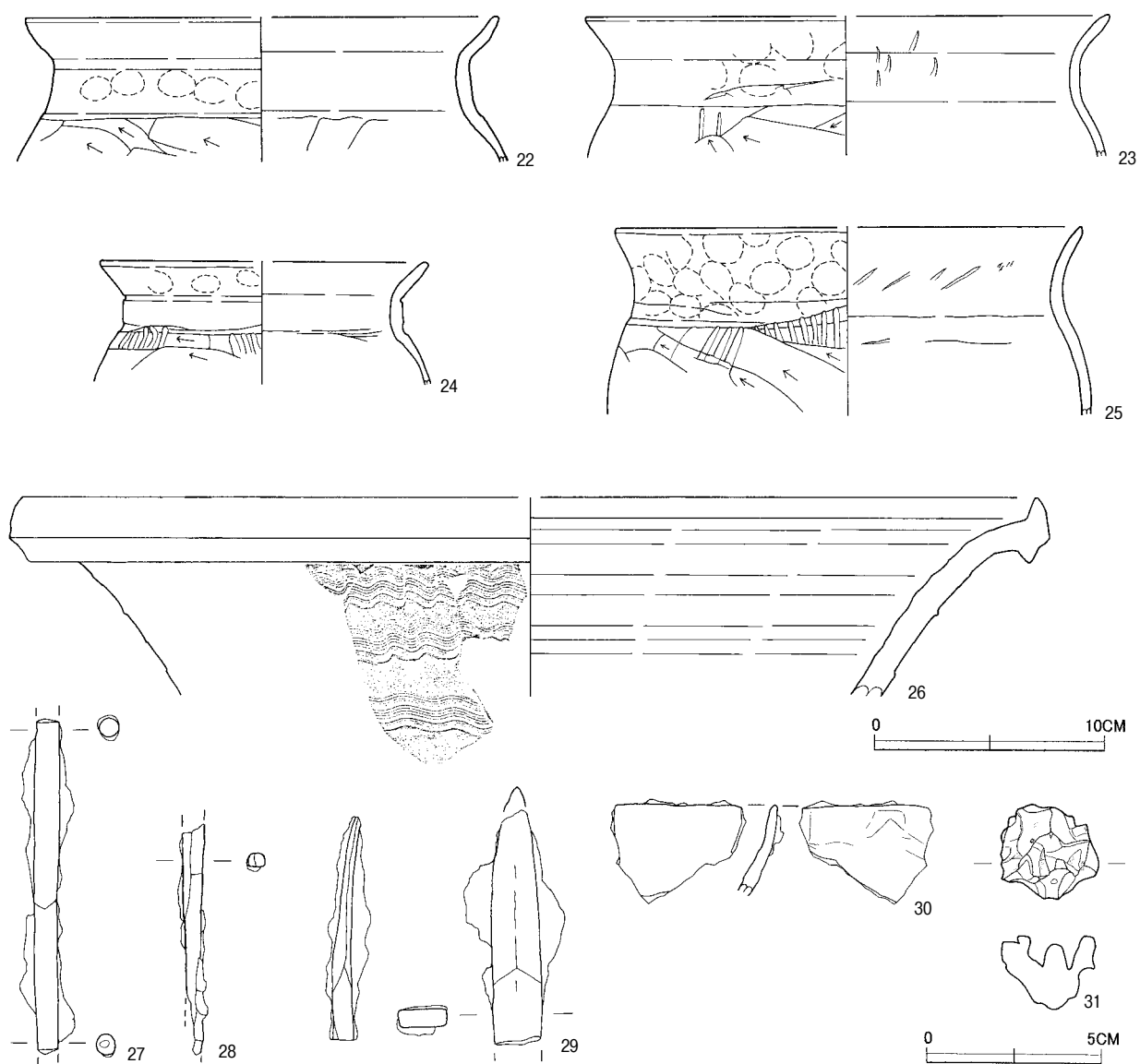
第18号住居跡 S I 18 (第34、35、40図・第13表)

遺 構 A区のF 6、G 6グリッド付近に所在した。南西隅部を17号住居に切られている。本住居は出土遺物が少ないが、16・17号住居の切り合いから八世紀末～九世紀初頭の時期に置かれる。平面形は不整形な方形で4.3m×3.3mを測る。東辺の南寄りにカマドを有することから、住居主軸はN-64°-Eを示す。カマドは燃焼部が住居内に位置し、カマド袖は作り付けである。カマド前面から隅部にかけて床が窪む。住居床中央部もややくぼんでいる。直床であるが柱穴は確認されていない。遺物はカマドおよび覆土中より碎片が出土している。カマド付近からは鉄製烙印が出土している。

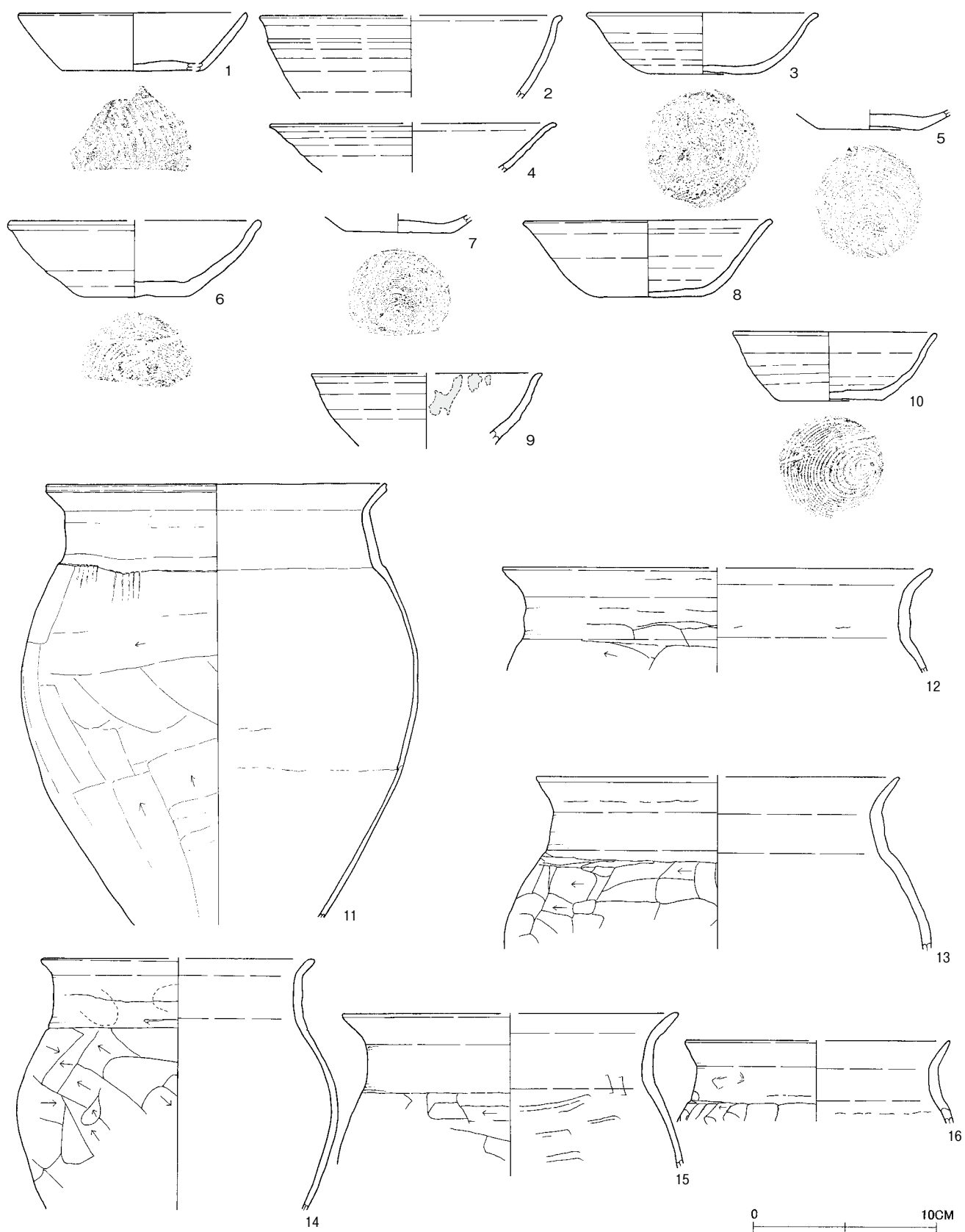
遺 物 第40図1・2は須恵器坏で口径12～12.6cmに復元される。底部は回転糸切り無調整である。3は須恵器高台付碗の高台部である。4は土師器甕の口縁部である。これらの遺物の年代は九世紀初頭から中ごろの時期におさまるものである。5は鉄製の烙印で比較的遺存状態が良かった。出土状況は印面が住居内を向くように横臥していた。第40図は出土時に作成された現況実測図で、幾片かの鉄板を延べ束ねて造られていることが観察される。右方の約12cm部分が柄の痕跡と推定される。印面は当然ながら「有」の逆文字である。銹落とし後の現況図は第49図を参照されたい。



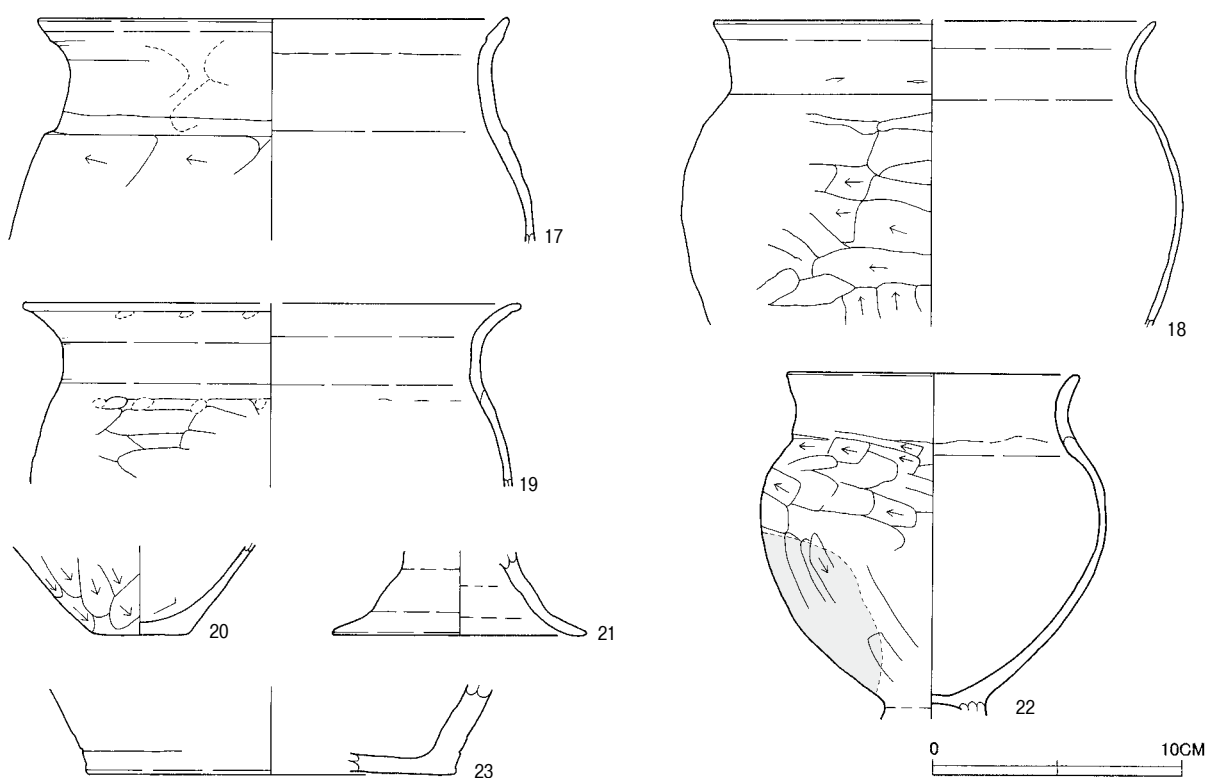
第36図 円山遺跡第16号住居跡出土遺物 1



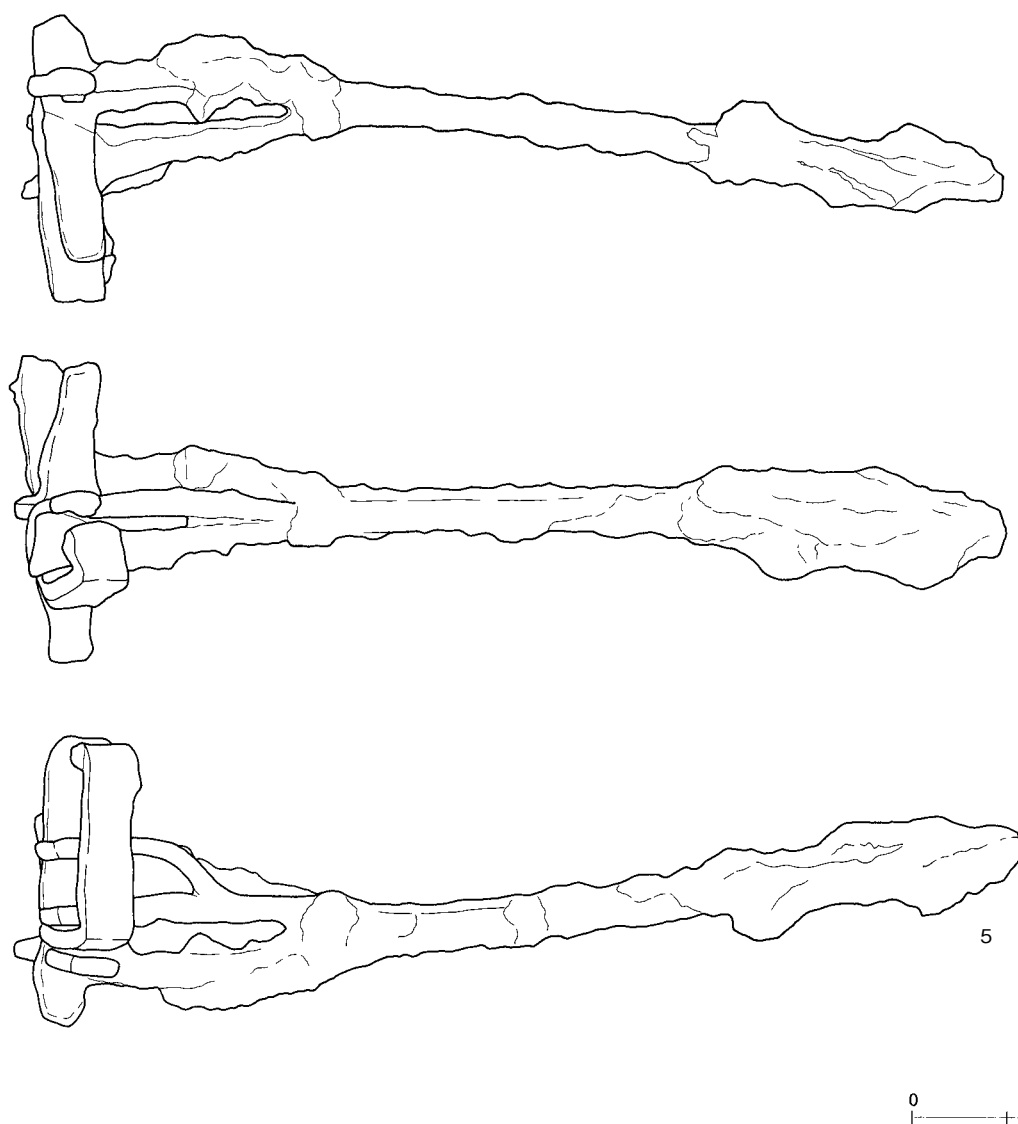
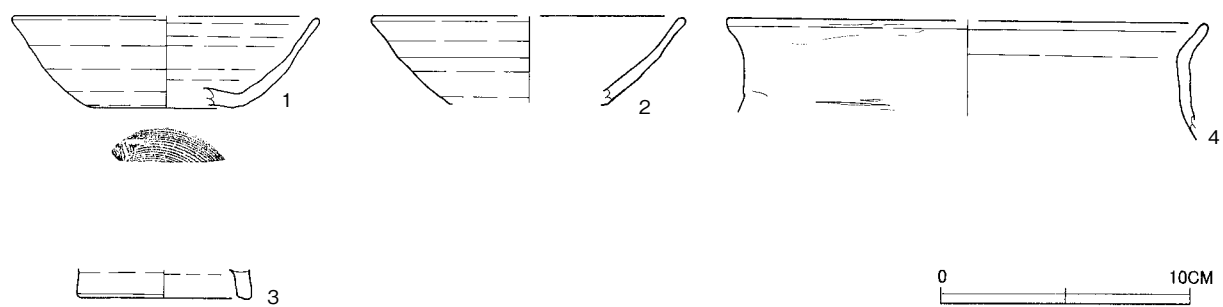
第37図 円山遺跡第16号住居跡出土遺物2 27～31 (1/2)



第38図 円山遺跡第17号住居跡出土遺物 1



第39図 円山遺跡第17号住居跡出土遺物2



第40図 円山遺跡第18号住居跡出土遺物 (1/2)

円山遺跡

第1号溝 S D 1 (第4図)

A区の11G付近に位置し、北東—南西方向に走行する。全体図の表記のみで、別図がないため詳細は不明。全体図では、古代のS I 1住居跡を切るが、弥生時代のS Z 1方形周溝墓溝に切られる。という表記にもみえるが、推測の域をでない。幅約1.3m、長さ7.0mを測る。整理時に遺物は確認されていない。

第2号溝 S D 2 (第6図)

A区の10G付近に位置する。北西—南東方向に走行し、調査区外へ伸びる。S Z 1方形周溝墓溝の南辺溝を切ることから、弥生時代以降の溝と思われる。幅約0.8m、長さ2.0mを測る。整理時に遺物は確認されていない。

第3号溝 S D 3 (第41図)

A区の3E付近に所在した。4号溝を切っている。幅1.2mの箱型を呈する溝で、約3.6m確認された。一部のみ検出であるがほぼ東西方向に伸びると推定される。出土遺物は古代までの土器片を含むことから古代以降の時期に掘削されたと思われる。

第4号溝 S D 4 (第41・42図・第14表)

A区のE 3、E 4付近に所在した。11号住居、12号住居、3号溝に切られる。幅3.1mの浅い船底状を呈する溝で、延長約9.2m確認された。北側は調査区外、南側は削平され不明である。北東南西方向に伸びると思われるが、溝底が曲がりを持つようで、北側を囲堯しているようにもみえる。溝底部の一部が一段下がっており土壇状を呈している。覆土中から各時代の土器片が出土していることから溝の時期は特定できないが、土壇状部分の底面から弥生時代土器が出土していることから、弥生時代以降の掘削であろう。

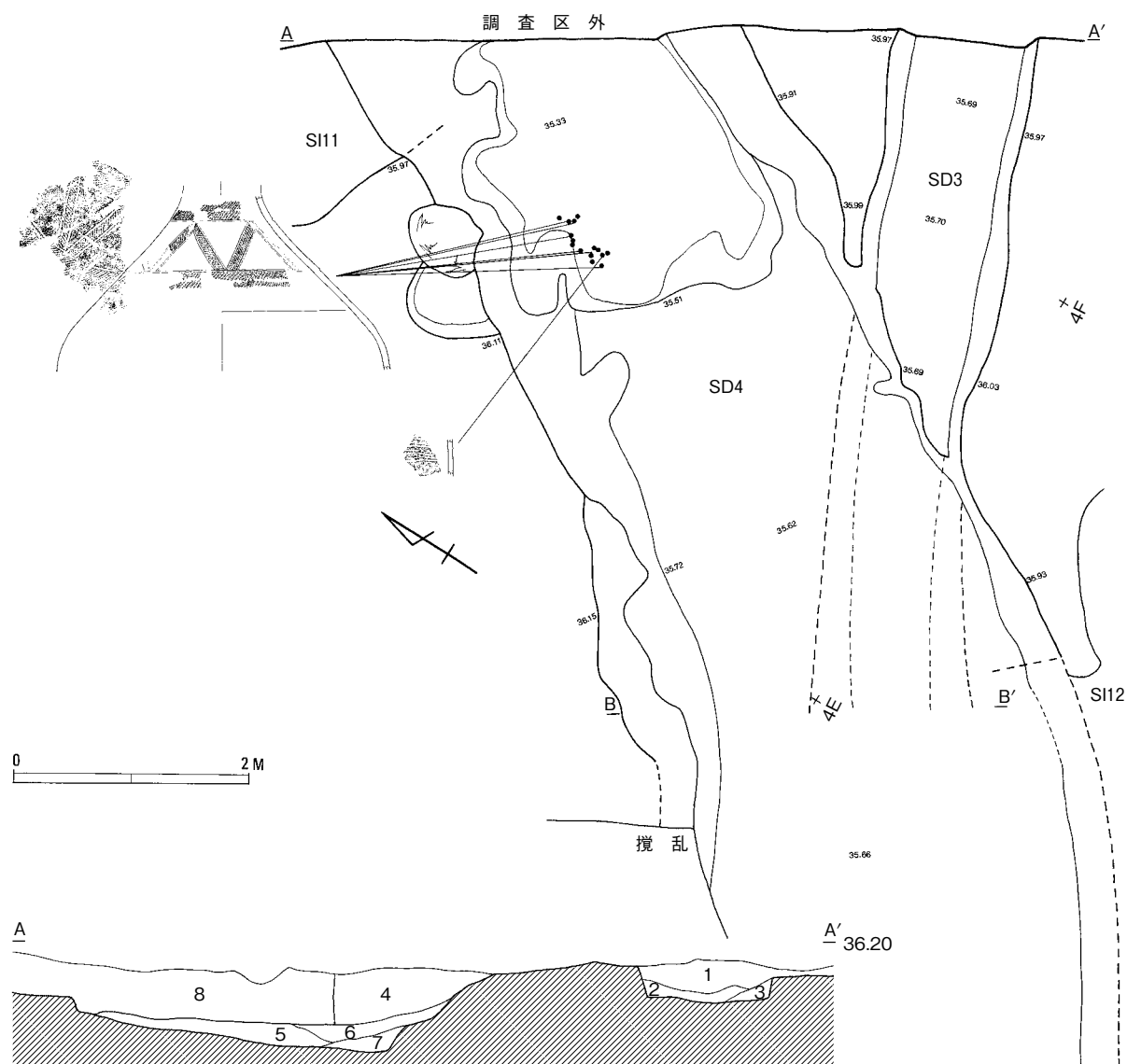
第42図1は久ヶ原式の壺形土器の頸部破片で胴部中位に最大径を有すると推定され、肩部から頸部へ急勾配で移行する。肩部上半から頸部に充填縄文による横帯文と鋸歯文帯を施文している。LRの斜縄文を施した後、沈線にて区画している。現存高約22cm、胴部最大径約43cm、頸部径約11cmを測る。遺存部の全面に赤彩を施している。2、3は壺又は甕の底部片で2は底面に布目圧痕がある。糸の組織点が斜目に連続して見えることから綾織の平布と思われる。4～9は櫛描、沈線等で飾られる弥生土器破片である。

第5号溝 S D 5 (第43図)

B区の2カ、1キ付近に所在した。13号住居を切っている。北半部は調査区外に南側は削平され遺構が残っていない。そのため平面形態が不明瞭であり、遺存部分でも拡張又は重複があるかのようである。北側の掘り込み線が円形を呈していること、土層図でも北側からの流れ込みがある点から、北側に墳丘を有する古墳周溝の可能性を指摘しておきたい。周溝が整った円形に廻らない周溝は、当地の終末期古墳でも多く見られる事例である。深さ0.6m、幅約2.9m、延長約10.2m確認された。古墳周溝と考えると直径約16m程度の円墳となろう。本跡に伴う遺物はなく、遺物からは時期は特定できない。

第1号～4号土壇 S K 1～4 (44図)

B区2ア、3イ付近に位置した。4基が不規則に並んで確認された。確認面は同一であるが、出土遺物は知られていないため同時に掘削されたものか不明。現況の配置では十字架形にみえ、1号4号間は約5m、

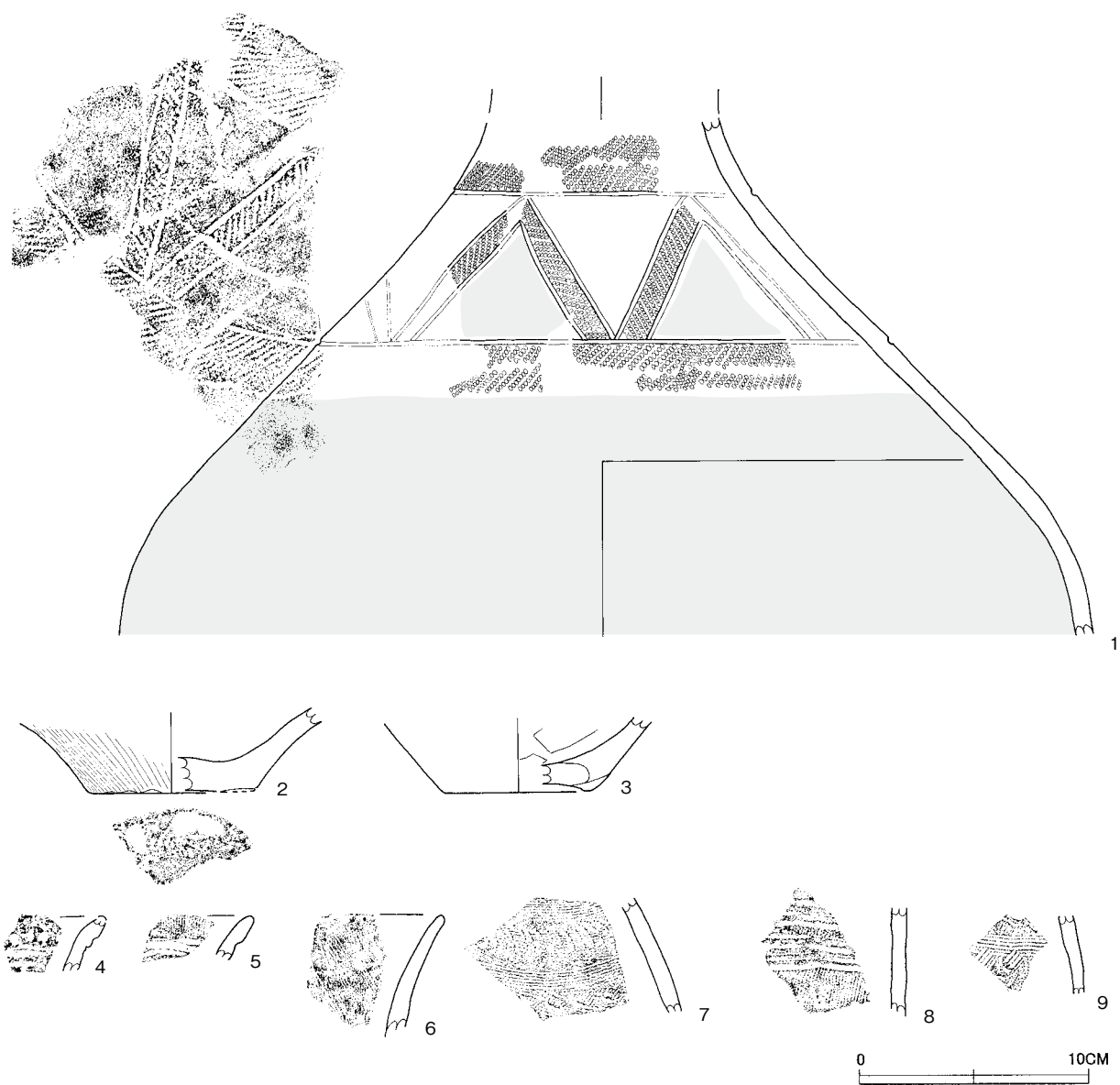


SD3・4

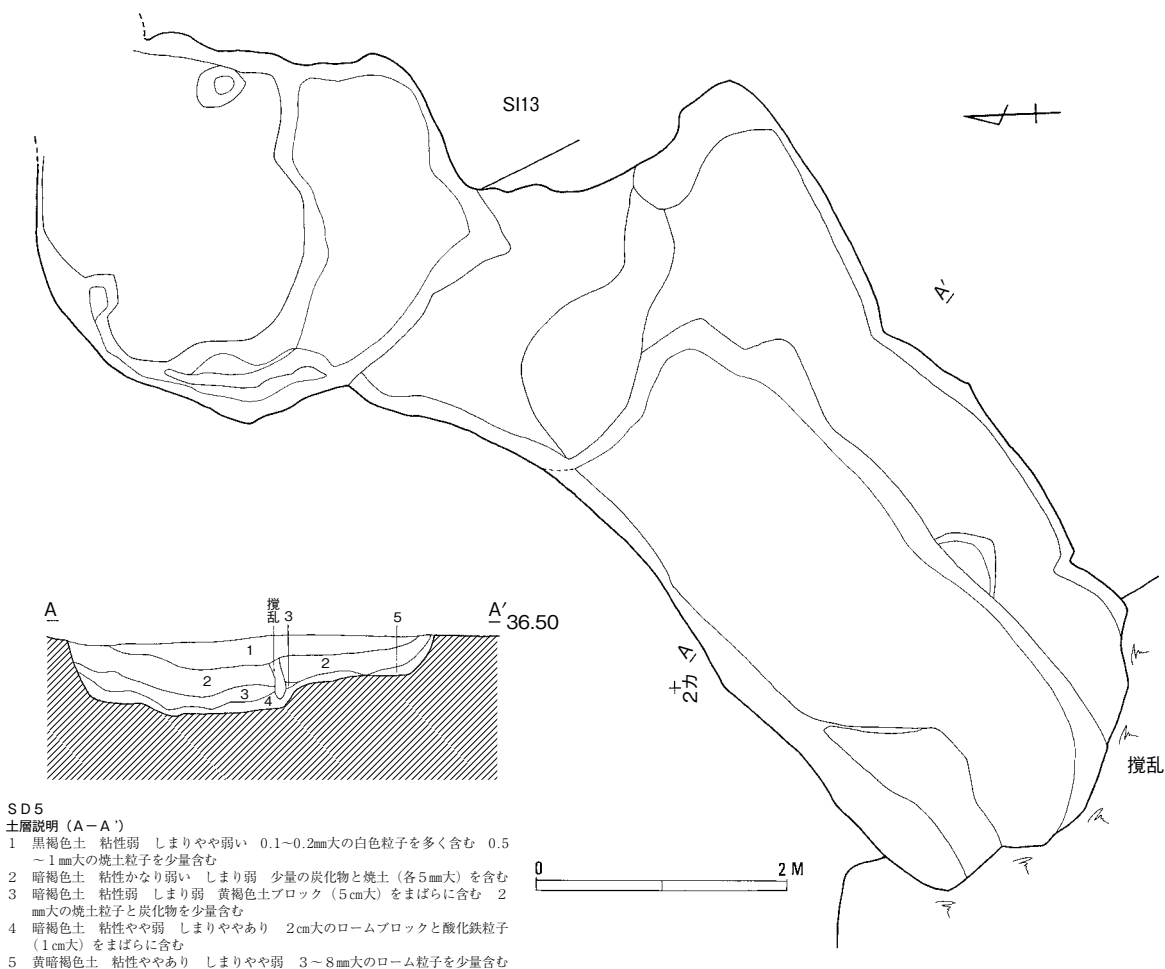
土層説明 (A-A'・B-B')

- 1 暗褐色土 $\phi 0.5\text{mm}$ ±の白色粒子を多く含む $\phi 2\text{mm}$ ±の焼土粒を少量含む 粘性弱 しまり有り
- 2 黒褐色土 $\phi 0.5\text{mm}$ ±の白色粒子を多量に含む $\phi 2\sim 3\text{mm}$ の焼土粒と炭化物を少量含む 他に $\phi 2\text{mm}$ ±の酸化鉄粒も少量含有 粘性弱 しまり弱
- 3 黄暗褐色土 焼土粒子を少量含む ローム土の含有多い 粘性やや強 しまり中
- 4 黒褐色土 $\phi 0.5\text{mm}$ ±の白色粒子を少量含む $\phi 2\text{mm}$ ±酸化鉄粒子をまばらに含む 粘性弱 しまり強
- 5 黄暗褐色土 $\phi 40\text{mm}$ ±のロームブロックを多く含む $\phi 5\sim 8\text{mm}$ の酸化鉄粒子をまばらに含む 他に $\phi 5\text{mm}$ ±の白色粒子も多く含む
- 6 暗褐色土 ローム粗粒子 ($\phi 2\text{mm}$ ±)を少量 白色バミスを少量含む 粘性強 しまりやや強
- 7 黄褐色土 ハードロームブロック ($\phi 20\sim 50\text{mm}$)を大量に含む その中に酸化鉄粒 ($\phi 2\sim 5\text{mm}$)を多量に含む 粘性強 しまり強 壁面下部の崩壊土
- 8 11号住居跡覆土
- 9 12号住居跡覆土

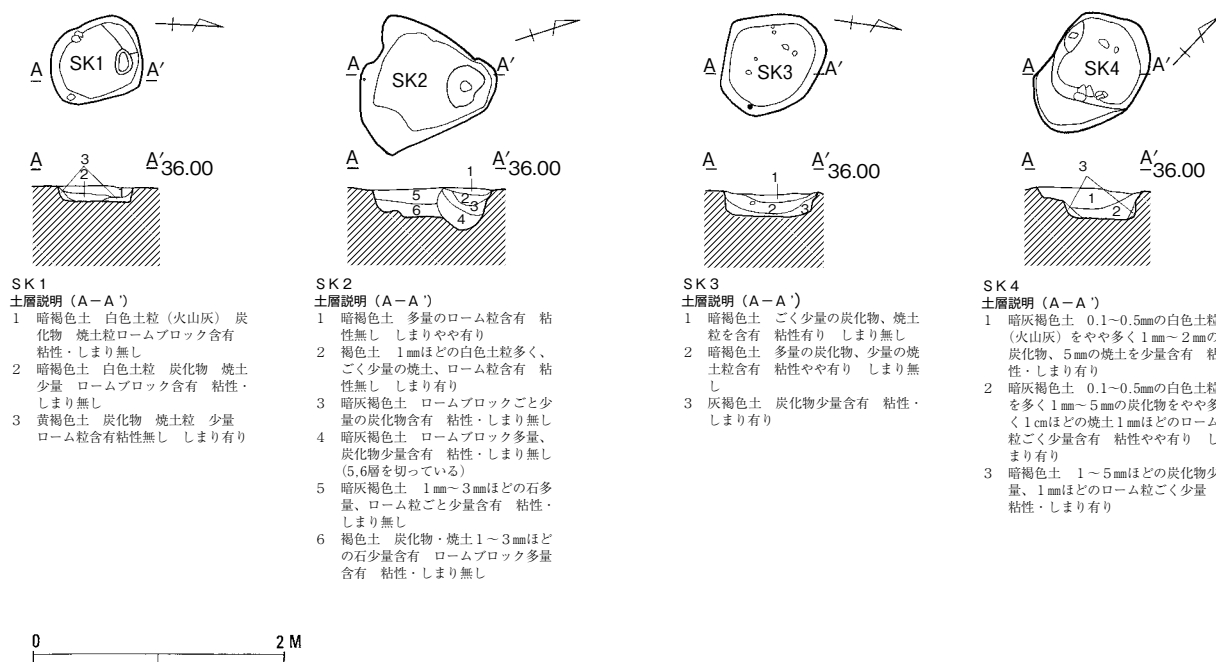
第41図 円山遺跡第3号・4号溝 (1/60)



第42図 円山遺跡第4号溝出土遺物



第43図 円山遺跡第5号溝 (1/60)



第44図 円山遺跡第1号・2号・3号・4号土坑 (1/60)

2号3号間では約7mを測る。1号2号土壌は柱穴状の堀込みが残る。出土遺物は確認されていない。

3 一括の出土遺物について（第45～48図・第15～17表）

遺構に伴わず覆土中より検出された遺物を一括して本節で取り上げた。

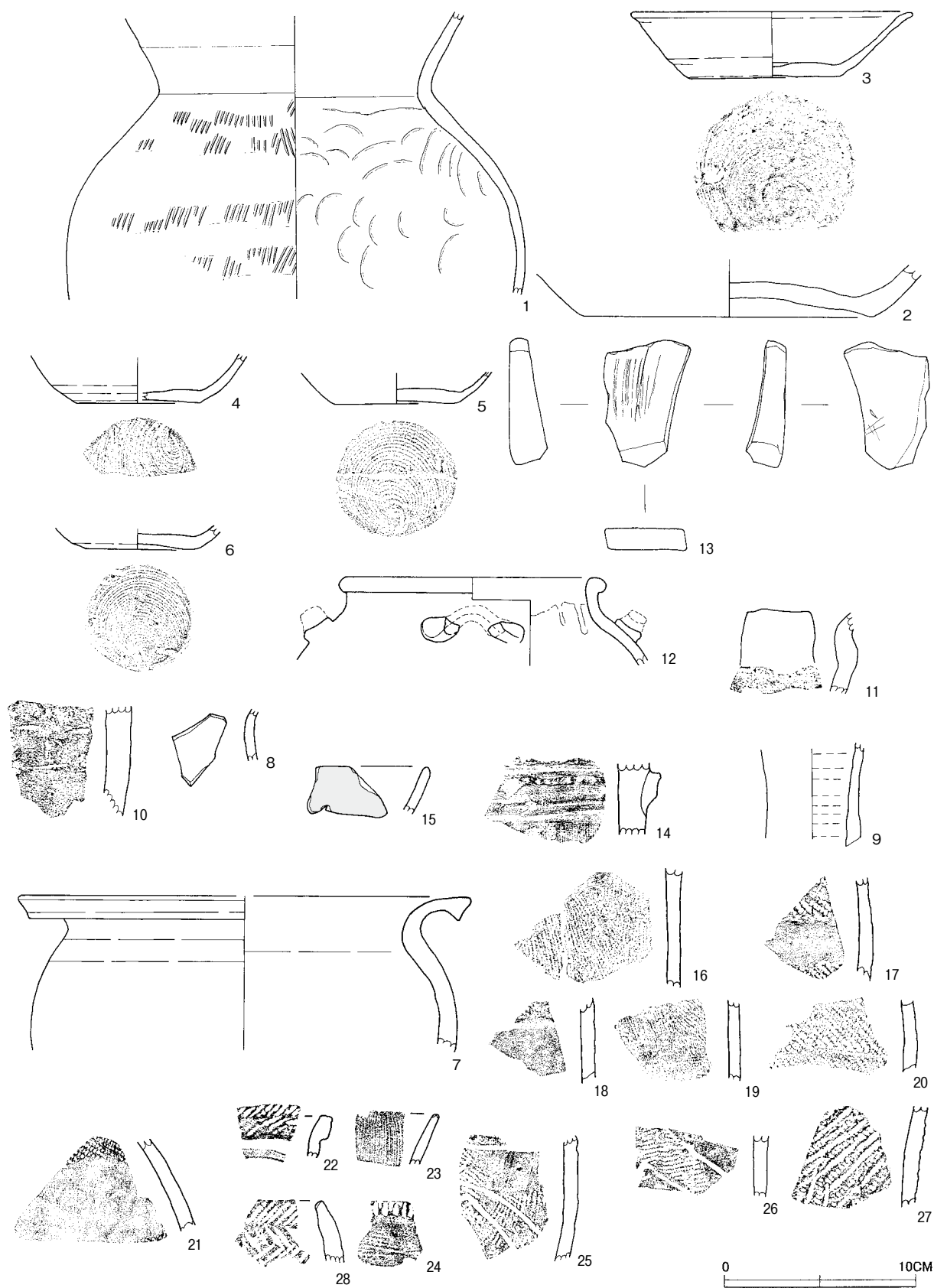
第45図1は須恵器甕体部破片、頸部は約14cm。2は須恵器甕底部片底径15cm。3～6は須恵器坏、底部は回転糸切無調整。7は須恵器甕、口径約24cmで、口縁部が大きく外反するが肩は張らない。8・9は灰釉陶器破片で長頸瓶の頸部片であり両面に釉がかかる。10・11は常滑破片。12は褐釉の掛かる瀬戸四耳壺破片、口縁部玉縁で口径約14cm。13は凝灰岩製の砥石、平面と側面の一端を砥面としている。14は円筒埴輪破片、橙褐色をするタガはやや低い、縦ハケで不明瞭だが2cm当たり18本程度の刷毛目が観察される。以上は古代～中世期のものである。15～28は弥生土器で赤彩の施された口縁部15、刷毛目調整の土器16・19・28、磨消縄文と沈線で飾られる土器、縄文施文の土器などで、壺・甕の破片である。

第46図は縄文時代土器を一括している。縄文時代の遺構は確認されていないが、調査区より検出されたものである。1～8は細隆線に刻みを施す土器で、諸磯式土器に比定される。9～34は繊維を含み、沈線・縄文で飾られる土器で、黒浜式に比定される。35～57は縄文時代中期・後期の土器で、35は五領ヶ台式土器、36～54は加曾利E式土器、55は堀ノ内式土器、56、57も後期の土器と思われる。

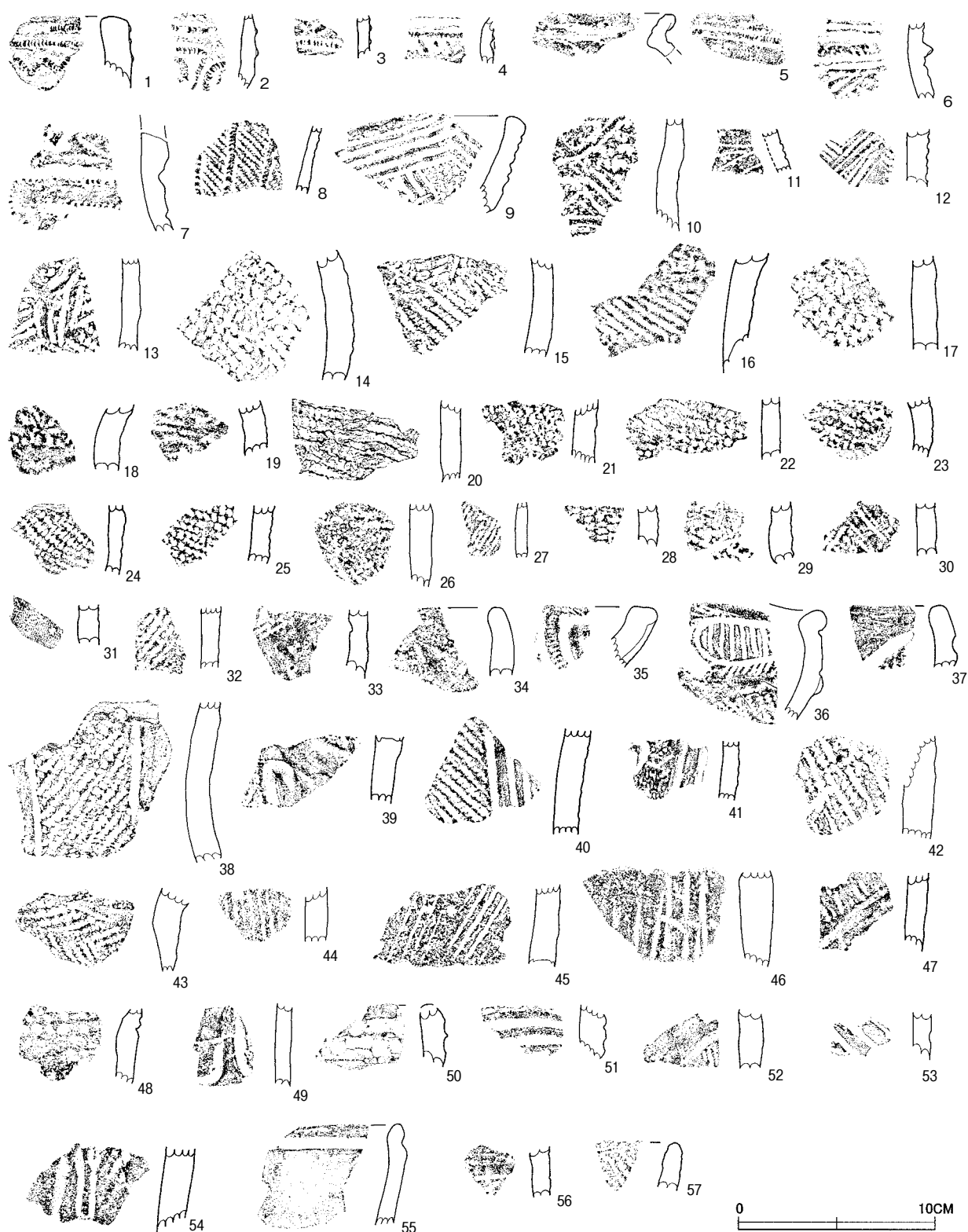
第47・48図は縄文時代が主であるが石器、石製品である。1・2は黒曜石の剥片である。3～6は礫器で、3、4は略楕円礫の一辺と連続する側縁を刃部として整形したもの。表面を大きく剥離調整しているが自然面を1/2以上残している。5は扁平礫を使用。6は一辺のみの加工。7～9は打製石斧、6は短冊形を8・9は撥形を呈したものと思われる。10は断面三角状に研磨成型された彫刻器、先端部を刃部としている。11・12は鶉の卵大をする玉石である。とくに運ばれた自然礫とも考えられる。13・14は磨石、いわゆる軽石で多孔質の溶岩であるが、ほぼ扁平に研磨されている。15～18は砥面を残す自然礫で、15・16は扁平楕円礫の平面を、17は棒状の自然礫の平面を、18は扁平四角状の礫の平面と端面を砥面として使用している。

渡来銭（第48図19）

第16号住居跡の覆土より検出されている。「宣徳通寶」の製造国と時代は、中国明王朝時代で初鑄年は1433年とされる。字体、鑄上がりから初鑄以降の渡来銭と思われる。



第45図 円山遺跡一括・表採出土遺物

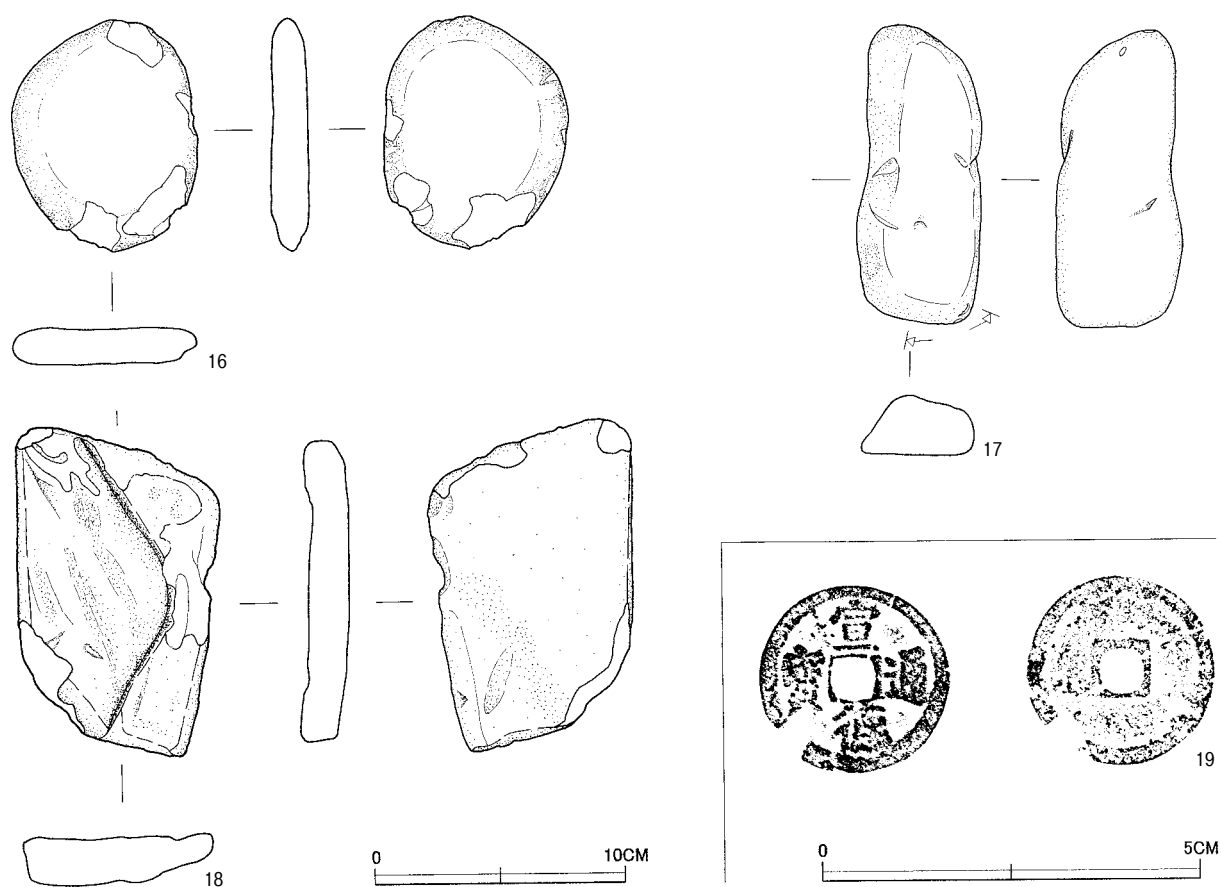


第46図 円山遺跡縄文土器



第47図 円山遺跡出土遺物一括 1

円山遺跡



第48図 円山遺跡出土遺物一括2

第1表 方形周溝墓出土遺物観察表（第8・9図）

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	鉢	7.8	4.9	4.1	A・H・I・M	暗橙褐色		円周
2	甕	—	—	—	A・D・H・I・K・M・N	赤橙色		櫛描波状文 円周
3	壺	—	—	8.3	A・D・G・H・I・M	橙色		円周
4	長頸壺	11.2	23.9	7.7	A・C・H・M・N	淡褐色		SZ
5	甕	—	—	5.6	A・B・D・M・N	明赤褐色		RL 縄文・底にモミ痕多数
6	壺	—	—	11.3	A・C・H・I・M・N	浅黄褐色	体部	SZ
7	土器破片	—	—	—	E・I・N	にぶい黄褐色	口縁	SZ
8	土器破片	—	—	—	A・B・D・N	明赤褐色	口縁	SZ
9	土器破片	—	—	—	A・H	明黄褐色	口縁	SZ
10	土器破片	—	—	—	A・I・G・N	にぶい黄褐色		SZ
11	土器破片	—	—	—	A・B・E・O・N・M	にぶい橙色	胴部	SZ
12	土器破片	—	—	—	A・H・I・N	にぶい褐色		SZ
13	土器破片	—	—	—	A・E・H・N	にぶい赤褐色	胴部	SZ
14	土器破片	—	—	—	A・E・N	明赤褐色	胴部	SZ
15	土器破片	(10.4)	—	—	A・B・E・I・N	外：橙色 内：橙色	口縁部15%	SZ
16	土器破片	—	—	—	A・E・H・I・M	褐灰色～灰褐色		SZ
17	土器破片	—	—	—	E・I・M	外：暗赤灰色 内：明赤褐色		SZ
18	土器破片	—	—	—	E・H・I・M	外：橙色 内：褐色		SZ
19	土器破片	—	—	—	E・H・I・N	外：にぶい褐色 内：褐色～明赤褐色		SZ
20	土器破片	—	—	—	H・I・J・M	明赤褐色		SZ
21	土器破片	—	—	—	H・I・N	明赤褐色		SZ
22	土器破片	—	—	—	E・H・I・N	明赤褐色		SZ
23	土器破片	—	—	—	I・K・H・N	外：褐色 内：明赤褐色		SZ
24	土器破片	—	—	—	E・H・I・M	外：褐色 内：褐色		SZ
25	土器破片	—	—	—	E・H・I・M	明赤褐色		SZ
26	土器破片	—	—	—	I・N	外：にぶい褐色 内：褐色		SZ
27	土器破片	—	—	—	B・E・H・I・N	褐色		SZ
28	土器破片	—	—	—	E・H・I・N	外：褐色 内：褐色		SZ
29	土器破片	—	—	—	H・I・N	褐色		SZ
30	土器破片	—	—	—	E・I・N	外：にぶい褐色 内：褐色		SZ
31	土器破片	—	—	—	A・H・I・M	外：にぶい褐色～明赤褐色 内：にぶい黄褐色		SZ
32	土器破片	—	—	—	E・H・I・M	外：にぶい褐色 内：灰褐色		SZ
33	土器破片	—	—	—	H・I・M	外：にぶい赤褐色～明赤褐色 内：明赤褐色		SZ
34	土器破片	—	—	—	A・G・I・N	外：暗赤褐色 内：暗赤褐色		SZ
35	土器破片	—	—	—	A・I・N	外：褐色 内：褐色		SZ

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表（第11図）

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	土師器・坏	12.6	3.2	(8.2)		褐色		
2	須恵器・坏	12.4	6.2	6.2	A・F・L・N	青味のある灰色	100	
3	須恵器・坏	—	—	6.1	A・F・L・N	明青灰色		
4	土師器・甕	21.4	—	—	A・F・L・N	灰色味のある褐色		
5	須恵器・大甕	—	—	—	A・F・L・M・N	青灰色		
6	土師器・甕	19.4	—	—	A・B・E・H・J・K・M・N	灰色味のある褐色		

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表（第13図）

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	須恵器・坏	13.3	4.4	6.3	A・F・G・H・M	淡黄褐色		
2	土師器・甕	20.6	—	—	A・B・E・I・J・K	明赤褐色		
3	須恵器・坏	13.1	4.2	6.2	A・D・F・M・N	灰白色	ほぼ完形	
4	土器破片	—	—	—	A・B・E・I・J	にぶい黄褐色	破片	LR 縄文 沈線
5	土器破片	—	—	—	A・C・E・N・O	褐色	破片	LR 縄文 沈線
6	土器破片	—	—	—	A・B・D・I・O	明赤褐色	破片	LR 縄文 沈線
7	土器破片	—	—	—	A・D・I・B・K・N	褐色	破片	結節状文

第4表 第4号住居跡出土遺物観察表（第15図）

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	須恵器・坏	13.1	(3.7)	(8.9)	A・F・G・M	褐色		
2	須恵器・坏	12.0	4.0	6.0	A・B・F	暗灰色	70	
3	須恵器・坏	12.5	4.0	6.3		灰白色	40	
4	須恵器・蓋	—	—	—	A・B・G・I・M・N	明オリーブ灰色		
5	須恵器・皿	14.0	2.4	4.8	A・F・G・M・N	灰白色	60	
6	土師器・甕	11.5	—	—	A・I・K・M	明赤褐色		
7	土師器・台付甕	18.8	—	—	A・B・E・H・K・M・O	褐色		
8	土師器・台付甕	14.4	—	—	A・I・K・M	赤褐色		
9	土師器・台付甕	16.9	—	—	A・B・H・I・M	褐色		
10	土師器・台付甕	—	—	10.3	A・I・K・M・N	褐色		
11	土師器・甕	12.7	—	—	A・I・K・M	褐色		
12	土師器・甕	—	—	3.3	A・D・I・K・M	明赤褐色		
13	カマド左軸石	最大長12.2、最大幅9.8、最大厚5.0、重さ324.7g						多孔質の凝灰岩 煉瓦状に整形
14	カマド右軸石	最大長19.7、最大幅9.3、最大厚5.8、重さ692.0g						比企 凝灰岩 煉瓦状に整形

円山遺跡

第5表 第5号・6号・7号住居跡出土遺物観察表（第18図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	土師器・坏	13.9	3.5	(6.6)	A・B・F・I・M・N	橙色	20	内面に暗文風の放射状沈線あり
2	土師器・坏	12.2	3.1	(3.6)	A・B・I・M・N・O	橙色	15	
3	土師器・甕	(12.0)	—	—	A・D・I・N	橙色		
4	土師器・坏	—	—	5.6	D・O	黄褐色		
5	須恵器・坏	—	—	6.5	A・B・D・I	橙色		
6	砥石	最大長11.9、最大幅11.5、最大厚3.0、重さ637.7g						粘板岩
7	土師質須恵器・高台椀	—	—	8.7	A・B・E・N	にぶい橙色		底部・高台一部欠 末野産
8	土師質須恵器・高台椀	15.2	5.2	7.8	B・D・K・N・O	灰黄色	50	
9	鉄	最大長2.9、最大幅0.6、最大厚0.4、重さ1.9g						断面四角釘、鋸の柄か
10	スラッグ	重さ62.6g						塊形滓
11	土師器・甕	—	—	—	A・D・E・G・H・M・N	浅黄橙色	25	

第6表 第8号住居跡出土遺物観察表（第20図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	須恵器・椀	12.5	3.8	5.5	A・N	青灰色	30	内外面発泡痕多数あり
2	須恵器・坏	—	—	6.0	A・E・F・N	にぶい黄褐色		南比企産
3	須恵器・坏	—	—	(6.2)	F	にぶい黄褐色	底部の33%	南比企産
4	須恵器・坏	—	—	5.4	A・F・N	灰色	底部100%	南比企産、將軍沢
5	須恵器・高台椀	—	—	7.3	A・B・D・G・H・I・M・N・O	赤み帯びたオリーブ灰色	20	
6	須恵器・皿	15.9	2.4	7.0	B・H・I・L・M・N	緑灰色	40	
7	須恵器・蓋	12.8	3.4	—	A・B・F・H・I・M・N	明青灰色	90	南比企産
8	土師器・甕	(20.6)	—	—	A・E・K・H	明赤褐色	40	炭化物付着
9	土師器・甕	(20.0)	—	—	A・B・K	明赤褐色	口縁の16%	
10	土師器・甕	(20.8)	—	—	A・B・K	明赤褐色	口縁の30%	
11	土師器・甕	(10.6)	—	—	D・E・H・K・N	橙色	口縁の25%	
12	土師器・甕	—	—	3.9	A・D・E・K	赤褐色	底部100%	
13	須恵器・甕	—	—	—	A・B・I・M・N	灰色		

第7表 第10号・11号・12号住居跡出土遺物観察表（第24図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	弥生・壺	—	—	(7.2)	D・E・G・H・I・N	明黄褐色	底部の30%	
2	台付甕	—	—	—	A・E・M・N・O	赤褐色	30	
3	須恵器・椀	—	—	6.85	A・B・F・H・I・K・M・N	灰色		
4	須恵器・椀（コップ型）	6.15	5.85	4.6	A・F・G・H・I・L・M	外：暗灰色 内：暗青灰色	40	塩壺風 南比企産
5	土師器・甕	(18.8)	—	—	A・B・E・I・J	橙色	口縁部25%	指押圧痕有
6	土師器・甕	20.2	—	—	A・B・D・G・I・K・M・D	黄橙色		
7	土師器・甕	(20.2)	—	—	A・B・E・I・K・M		口縁部50%	指押圧痕有
8	土師器・甕	18.6	—	—	A・B・I・K・M	橙色		口縁部完存
9	砥石	最大長5.7、最大幅4.9、最大厚1.6、重さ58.4g						凝灰岩 砥面3面
10	須恵器・甕	—	—	—	A・B・E・F・I・N	にぶい赤褐色	頸部破片	

第8表 a 第13号住居跡・第14号住居跡（土器破片）出土遺物観察表（第26・27図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	壺	—	—	7.6	A・B・D・G・H・I・K・M・N・O	明褐色		SI13
2	甕	27.5	—	—	D・E・H・I	暗赤褐色		SI13
3	小壺	—	—	4.7	A・H・I・M・N	暗茶褐色～橙褐色		SI13
4	壺（口縁部）	27.1	—	—	A・G・H・N	にぶい黄橙色		SI13
5	甕	11.3	—	—	A・B・G・H・I・M	橙色		SI13
6	甕（底部）	—	—	7.4	D・H・I・N	にぶい橙色		SI13
7	甕（底部）	—	—	7.0	A・B・G・J・N	橙色		SI13
8	甕（底部）	—	—	7.2	A・H・J・N	橙色～にぶい橙色		SI13
9	甕（底部）	—	—	6.9	A・E・I・N	明赤褐色		SI13
10	土器破片	—	—	—	A・D・I・M	明赤褐色		SI13
11	土器破片	—	—	—	A・D・I・M	明赤褐色		SI13
12	土器破片	—	—	—	D・H・I・M	橙色		SI13
13	土器破片	—	—	—	D・H・I・M	明赤褐色		SI13
14	土器破片	—	—	—	D・E・H・I・M	橙色		SI13
15	土器破片	—	—	—	C・D・H・I・N	外：橙色 内：橙色	頸部	SI13
16	土器破片	—	—	—	A・D・I・N	外：灰赤色 内：明赤褐色		SI13
17	土器破片	—	—	—	A・D・I・M	外：にぶい橙色 内：橙色	頸部	SI13
18	土器破片	—	—	—	A・I・M・N	橙色		SI13
19	土器破片	—	—	—	E・H・I・M・N	外：橙色 内：橙色		SI13
20	土器破片	—	—	—	A・D・H・J・M	明赤褐色		SI13
21	土器破片	—	—	—	A・D・H・I・M	外：にぶい橙色 内：橙色	頸部～肩部付近	SI13
22	土器破片	—	—	—	A・C・D・H・J・M	外：にぶい赤褐色 内：赤色		SI13
23	土器破片	—	—	—	B・G・H・M・N	外：橙色 内：褐色		SI13
24	土器破片	—	—	—	A・E・G・H・J・N	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色	壺頸部	SI13
25	土器破片	—	—	—	A・E・J・M・N	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色		SI13
26	土器破片	—	—	—	C・H・I・M	明赤褐色		SI13
27	土器破片	—	—	—	A・E・H・J・M	灰褐色		SI13
28	土器破片	—	—	—	E・H・I・M	外：茶色 内：明赤褐色		SI13
29	土器破片	—	—	—	A・C・H・J・M	外：赤褐色 内：明赤褐色		SI13
30	土器破片	(9.6)	—	—	A・H・I・M	褐色	口縁部	SI13

第8表 b 第14号住居跡（SⅠ-14）出土遺物観察表

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	土器破片	—	—	—	D・H・I・J	外：橙色 内：にぶい橙色		SI14
2	土器破片	—	—	—	A・D・N	外：橙色 内：橙色		SI14
3	土器破片	—	—	—	E・G・H・I・M	外：橙色 内：橙色		SI14
4	土器破片	—	—	—	A・C・I・J・M	明赤褐色		SI14
5	土器破片	—	—	—	A・D・G・M・N	外：赤色 内：黒褐色		SI14
6	土器破片	—	—	—	E・G・H・I・M	外：橙色 内：橙色		SI14
7	土器破片	—	—	—	A・G・H・I・N	外：暗赤褐色 内：にぶい褐色		SI14
8	土器破片	—	—	—	E・G・H・I・M	外：橙色 内：褐色		SI14
9	土器破片	—	—	—	A・C・D・G・M・N	外：黒褐色 内：暗赤色		SI14
10	土器破片	—	—	—	A・D・G・I・M	外：暗赤褐色 内：黒褐色		SI14
11	土器破片	—	—	—	A・C・G・M・N	外：暗赤褐色 内：褐色		SI14
12	土器破片	—	—	—	A・C・G・M・N	黒褐色		SI14
13	土器破片	—	—	—	A・C・E・G・I・J・N	赤褐色		SI14
14	土器破片	—	—	—	A・G・M・N	外：暗赤褐色 内：赤褐色		SI14
15	土器破片	—	—	—	A・B・D・G・J・M・N	にぶい赤褐色		SI14
16	土器破片	—	—	—	A・C・G・M	灰褐色		SI14

第9表 第14号住居跡出土遺物観察表（第30・31図）

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	壺	—	—	11.0	A・B・G・J・M・N	淡黄赤褐色		RL 縄文
2	壺	15.5	—	—	A・B・I・G・N	橙色～明赤褐色		RL 縄文
3	甕	19.8	27.0	7.1	A・B・I・K・N	淡褐色	ほぼ完形	
4	甕	14.4	—	—	A・B・M・N	明赤褐色		
5	埴	9.7	—	—	A・D・G・H・I・M	褐色		
6	甕（底部）	—	—	—	A・B・D・F・M・N	淡黄色		平安
7	甕（底部）	—	—	9.0	A・H・I・M・N	褐色		
8	有孔鉢	17.9	13.1	6.3	A・B・H・I・K・M	乳褐色	ほぼ完形	
9	須恵器・蓋	16.3	3.2	—	A・F・H・I・M	青灰色	80	
10	壺	32.6	59.8	8.9	A・B・M・N	褐色～黄褐色		底部に木葉痕あり
11	壺（底部）	—	—	6.3	A・B・G・M	褐色		
12	壺（底部）	—	—	4.1	A・B・J・M	赤褐色～赤色		
13	壺（底部）	—	—	4.5	A・B・M・N	褐色		

第10表 第15号住居跡出土遺物観察表（第33図）

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	土師器・坏	13.1	—	—	A・C・M	にぶい褐色	15	暗赤色の塗彩
2	土師質須恵器・椀	18.4	—	—	A・D・I・M・N	褐色	25	南比企産
3	須恵器・椀	13.3	5.2	7.1	A・E・I・M・N	オリーブ黒色		
4	須恵器・椀	14.3	5.3	7.1	B・D・H	浅黄褐色	80	
5	須恵器・大甕（破片）	—	—	—	A・G・I・M	外：青黒色 内：暗青灰色		
6	須恵器・大甕（破片）	—	—	—	A・F・G・M	外：オリーブ灰色 内：灰色		
7	片口腕	17.0	—	—				内・外面に明黄褐色の施釉

第11表 第16号住居跡出土遺物観察表（第36・37図）

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	土師器・坏	12.2	3.3	7.0	A・K・I・M	褐色	60	
2	土師器・坏	(12.2)	—	—	A・E・I・K・M	褐色	20	
3	土師器・坏	13.5	4.3	7.5	A・I・M	暗赤褐色	25	
4	須恵器・坏	12.9	3.4	6.2	A・B・G・H・I・M・N	明緑灰色	25	
5	須恵器・坏	12.5	3.7	6.5	A・H・I・N	暗青灰色	70	底部完在
6	須恵器・坏	12.2	—	6.8	A・B・G・H・M	青灰色	50	
7	須恵器・坏	12.7	3.7	6.5	C・F・G・H・K	褐色		土師質
8	須恵器・坏	12.6	4.2	6.2	A・F・G・H・I・N	青灰色	50	南比企産
9	須恵器・坏	12.7	—	6.2	F・H・M	明オリーブ灰色	60	南比企産
10	須恵器・坏	12.4	4.4	3.6	H・I・N・M	灰白色	50	南比企産
11	須恵器・坏	13.4	3.7	5.1	A・H・I・G	暗青灰色	70	
12	須恵器・坏	12.3	3.8	5.4	F・H・I・K・M・N	明オリーブ灰色	90	南比企産
13	須恵器・坏	12.0	3.8	6.1	A・F・H・K・M・N	明緑灰色		底部完在 南比企産
14	須恵器・坏	14.2	—	6.5	B・F・G・M・N	灰白色	40	南比企産
15	須恵器・坏	13.5	—	(7.4)	F・H・M	灰白色	30	墨書土器 南比企産
16	大型坏須恵器・蓋	24.2	6.0	—	A・F・G・H・M	灰白色	60	南比企産
17	須恵器・蓋	—	—	—	A・G・H・M・N	暗青灰色	20	未野産
18	小壺	—	—	(4.7)	A	青灰色		壺G
19	須恵器長頸瓶	16.0	—	—	F・I・M	暗青灰色		
20	灰釉陶器	—	—	—	—	淡黄色		
21	灰釉陶器	11.5	—	—	—	オリーブ灰色		
22	土師器・甕	(20.2)	—	—	A・B・C・D・H・I・K・M	明赤褐色	口縁部10%	
23	土師器・甕	(22.4)	—	—	A・B・E・H・I・J・K・M	褐色	口縁部15%	
24	土師器・甕	(14.1)	—	—	A・B・D・E・I・K・M・N・O	明赤褐色	口縁部25%	
25	土師器・甕	(20.0)	—	—	A・B・E・I・J・K・M・N・O	褐色	口縁部25%	上下で粘土の色調が異なる
26	須恵器・甕	44.6	—	—	G・H・I・M	灰色		口縁部に3段の波状文
27	鉄製品	最大長9.7、最大幅0.7、最大厚0.6、重さ17.8g						断面丸、棒状
28	鉄製品	最大長6.6、最大幅0.6、最大厚0.4、重さ4.1g						四角
29	鉄製品	最大長7.7、最大幅1.4、最大厚0.5、重さ20.8g						槍砲か、断面長方形
30	鉄製品	重さ9.2g						鍛造鉄か、碗状の容器か
31	鉄製品	最大長2.8、最大幅2.8、最大厚2.1、重さ15.0g						鉄洋小塊

円山遺跡

第12表 第17号住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	土師器・坏	(12.4)	3.1	(7.6)	A・B・D・I	橙色	50	
2	須恵器・坏	(16.2)	—	—	A・B・F	橙色	口縁部20%	
3	須恵器・坏	(12.4)	3.3	6.0	A・B・I・N	黄灰色	50	
4	須恵器・坏	(15.4)	—	—	A・B・L	灰黄	口縁	
5	須恵器・坏	—	—	5.6	A・B・F・N	黄褐色	底部	南比企産
6	須恵器・坏	(13.6)	4.1	6.0	A・B・D・F	灰色	30	南比企産
7	須恵器・坏	—	—	5.8	A・B・I・N	灰色	底部80%	末野産
8	須恵器・坏	(13.4)	4.1	(6.4)	A・B・M	灰白	20	
9	須恵器・坏	(12.4)	—	—	A・F・L	黄灰	口縁	南比企産 灯明容器
10	須恵器・坏	11.1	3.6	5.5	A・E・I・N	オリーブ灰		南比企産
11	土師器・甕	(18.2)	—	—	A・B・D・E・I・K・M・O	橙色	口縁部完存	胴部
12	土師器・甕	(23.0)	—	—	A・D・E	明赤褐色	口縁	
13	土師器・甕	(19.4)	—	—	A・B・E・I・N	明赤褐色	35	
14	甕	(14.6)	—	—	A・B・D・I・M	赤褐色	10	
15	土師器・甕	(18.0)	—	—	A・B・H・N	橙色	口縁	
16	土師器・甕	(14.2)	—	—	A・E・I	にぶい赤褐色	口縁25%	
17	甕	(18.6)	—	—	A・B・D・E・I・N・J	明赤褐色	口縁及び頸部80%	
18	土師器・甕	(17.4)	—	—	A・B・I・H・O	明赤褐色	15	
19	土師器・甕	(19.6)	—	—	A・B・E・G・I・N	明赤褐色	口縁25%	
20	甕	—	—	3.8	A・B・E・K・M	褐色	底部	
21	土師器・台付甕	—	—	(10.0)	A・B・D・K・O・I	赤褐色	台部20%	脚部
22	土師器・台付甕	11.5	—	—	A・B・I・K	明赤褐色	体部60%脚部欠	被熱、黒斑状
23	須恵器・甕	—	—	(14.6)	A・B・F・N	灰色	底部25%	

第13表 第18号住居跡出土遺物観察表（第40図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	須恵器・坏	(12.2)	3.7	(5.5)	A・D・F・N	灰色	20	南比企産
2	須恵器・坏	(12.4)	—	—	A・B・F・N	黄灰色	口縁部25%	南比企産
3	須恵器・高台椀	—	—	(7.0)	A・B・F	灰色	高台部25%	
4	土師器・甕	(19.0)	—	—	A・B・E・I	橙色	口縁部10%	
5	烙印	最大長26.2、最大幅7.6、最大厚7.1、重さ197 g						

第14表 第4号溝出土遺物観察表（第42図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	壺	—	—	—	A・B・D・G・I・M・N	橙色		赤彩
2	壺（底部）	—	—	7.4	A・D・G・H・I・M・N	褐色		
3	壺（底部）	—	—	6.4	A・E・G・H・I・M・N	にぶい橙色		
4	土器破片	—	—	—	C・E・I・K・M	明赤褐色	口縁破片	
5	土器破片	—	—	—	A・E・I・M	黄褐色	壺口縁破片	
6	土器破片	—	—	—	D・H・M・N	浅黄褐色	甕口縁破片	
7	土器破片	—	—	—	A・E・I・K・M・N・O	褐色	破片	
8	土器破片	—	—	—	A・B・D・G・I・M・N	褐色	破片	細 LR 縄文 + 沈線
9	土器破片	—	—	—	A・E・M	灰黄褐色		

第15表 一括・表採出土遺物観察表（第45図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	残存・率	備 考
1	須恵器・甕	—	—	—	A・B・D・G・I・M	青灰色		
2	須恵器・甕	—	—	14.8	A・B・H・N	灰黄色	底部	
3	土師質・坏	14.6	3.4	7.7	A・G・H・I・M・N	明黄褐色	70	
4	須恵器・坏	—	—	(6.4)	A・D・E・F・H・I・L	にぶい橙色	底部	南比企産
5	須恵器・坏	—	—	6.4	A・B・E・L・O	灰白色	底部	末野産
6	須恵器・坏	—	—	(6.0)	A・D・F・L	明灰黄色	底部	南比企産
7	須恵器・甕	(23.4)	—	(7.9)	A・B・N	褐灰色	口縁の一部	
8	灰釉	—	—	—		浅黄色	破片（頸部）	内外面釉有
9	須恵器・長頸瓶	—	—	—	A・B・E	灰オリーブ色	頸部40%	内外面釉有
10	常滑	—	—	—	A・B・E・N	赤褐色	破片（胴部）	
11	常滑	—	—	—	A・B・N	灰赤色	破片（頸部）	剥離
12	褐釉耳壺	13.2	—	—	—	淡黄色		外面口径内面に褐釉 黄褐色の火炎状斑有り
13	砥石	最大長6.5、最大幅4.4、最大厚2.0、重さ54.2 g						凝灰岩 刃先痕
14	埴輪	—	—	—	A・B・I・D	暗赤褐色	破片	
15	土師器・坏	—	—	—	A・B・E	にぶい橙色	破片（口縁部）	内外面赤彩 ミガキ有り
16	土器破片・甕	—	—	—	B・D・G・I	灰褐色	破片	
17	土器破片・壺	—	—	—	D・H・I	にぶい黄褐色	破片	No.20と同一個体 LR 縄文
18	土器破片・壺	—	—	—	D・H・I	にぶい橙色	破片	No.20と同一個体
19	土器破片・甕	—	—	—	A・G・I	にぶい黄褐色	破片	
20	土器破片・壺	—	—	—	A・H	にぶい黄褐色	破片	LR 縄文
21	土器破片・壺	—	—	—	A・B・C・N	褐色	破片（肩部）	RL 縄文 赤彩
22	土器破片・壺	—	—	—	A・E・H・I	にぶい褐色	破片（口縁部）	LR 縄文
23	土器破片・壺	—	—	—	A・B・E・I	褐色	破片（口縁部）	
24	土器破片	—	—	—	A・H・I・K	明赤褐色	破片（口縁部）	
25	土器破片・壺	—	—	—	A・D・E・G	暗灰黄	破片（頸部）	
26	土器破片・壺	—	—	—	A・B・E・I・K・N	灰黄褐色	破片（胴部）	
27	縄文	—	—	—	A・B・I・H	にぶい赤褐色	破片（胴部）	LR 縄文 付加縄文

第16表 縄文土器観察表（第46図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	残存率	備考
1	縄文	-	-	-	A・D・I	灰黄褐色	口縁一部	十三菩堤式 結節浮線文 SI16
2	縄文	-	-	-	A・B・E・H・N	黄褐色	破片（胴部）	諸磯C式 表採
3	縄文	-	-	-	A・B・O	明赤褐色	破片	浮文キザミ沈線 諸磯C式 SI1
4	縄文	-	-	-	A・B・H・I・O	にぶい赤褐色	破片（口縁部）	諸磯a式 表採
5	縄文	-	-	-	A・B・H・I・M・O	にぶい赤褐色	破片（口縁部）	十三菩堤式 SD4
6	縄文	-	-	-	A・D・H・N	にぶい黄橙色	破片	諸磯C式 SI13
7	縄文	-	-	-	D・E・N	橙色	破片	諸磯b式 SI13
8	縄文	-	-	-	A・K・O	褐色	破片（胴部）	R L縄文 十三菩堤式 結節浮線文 SI16
9	縄文	-	-	-	A・B・I	にぶい黄橙色	破片（口縁部）	黒浜式 表採
10	縄文	-	-	-	A・B・E	橙色	破片（胴部）	SZ
11	縄文	-	-	-	A・B	褐色	破片	P5
12	縄文	-	-	-	A・B・E・J・K・O	にぶい赤褐色	破片	諸磯C式 SI4
13	縄文	-	-	-	A・B・N	褐色	破片（胴部）	R L縄文 黒浜式 SZ
14	縄文	-	-	-	E・I	にぶい褐色	破片	センイ多 2段L R縄文 黒浜式 SI5
15	縄文	-	-	-	A・B・N	褐色	破片（胴部）	R L縄文 円周
16	縄文	-	-	-	D・H	にぶい黄橙色	破片	L縄文 センイ多 黒浜式 SI5
17	縄文	-	-	-	A・N	褐色	破片	2段L R縄文 黒浜式 SI5
18	縄文	-	-	-	D	にぶい黄橙色	破片	2段L R縄文か 関山式 SI5
19	縄文	-	-	-	A・B・I	明褐色	破片（胴部）	黒浜式 SI16
20	縄文	-	-	-	A・B・E・N	褐色	破片（胴部）	L R縄文 黒浜式 SZ
21	縄文	-	-	-	A・D・I・O	褐色	破片（胴部）	黒浜式 表採
22	縄文	-	-	-	D・I	明赤褐色	破片	2段L R縄文 黒浜式 SI5
23	縄文	-	-	-	A	褐色	破片（胴部）	黒浜式 SI16
24	縄文	-	-	-	A・B・N	灰黄褐色	破片（胴部）	黒浜式 SI16
25	縄文	-	-	-	A・B・I	褐色	破片（胴部）	黒浜式 SI16
26	縄文	-	-	-	A・M・N	褐色	破片	SD4
27	縄文	-	-	-	A・D・M	褐色	破片	後期 SD4
28	縄文	-	-	-	D・I	にぶい黄橙色	破片	2段L R縄文 黒浜式 SI10
29	縄文	-	-	-	D	にぶい黄橙色	破片	L R縄文 黒浜式 SI5
30	縄文	-	-	-	D	にぶい黄橙色	破片	羽状L R構成 黒浜式 SI5
31	縄文	-	-	-	A・G・N	にぶい黄褐色	破片	前期 SI5
32	縄文	-	-	-	A・B・E・N	にぶい褐色	破片（胴部）	中～後期か 表採
33	縄文	-	-	-	A・H・I・K・N・O	にぶい褐色	破片	早期センイ土器 鶴ヶ島式 SI3
34	縄文	-	-	-	A・B・D・K・N	褐色	破片（口縁部）	中期 加曽利E式 SI2
35	縄文	-	-	-	A・E・M	赤褐色	破片（口縁部）	勝坂 SD4
36	縄文	-	-	-	A・D・E・N	褐色	口縁一部	加曽利E 1式 SZ
37	縄文	-	-	-	A・B・I・D	明赤褐色	破片	加曽利E 2～3式 SI6
38	縄文	-	-	-	A・B・D・H・K・M・N	明赤褐色	破片	L R縄文 加曽利E 2式 SD4
39	縄文	-	-	-	A・B・D・I	にぶい赤褐色	破片（胴部）	加曽利E 2式 SI16
40	縄文	-	-	-	A・D・I	灰黄褐色	破片（胴部）	R L縄文 加曽利E 2式 SI16
41	縄文	-	-	-	A・B	明黄褐色	破片	加曽利E 2式 SI6
42	縄文	-	-	-	A・B・E・I・K・N	明赤褐色	破片（胴部）	中期 勝坂 表採
43	縄文	-	-	-	A・B・I・J・N	明赤褐色	破片（頸部）	加曽利E 1式 SZ
44	縄文	-	-	-	A・B・N	黄褐色	破片	加曽利E 2式 SD4
45	縄文	-	-	-	A・B・E・I・N	褐色	破片（胴部）	勝坂・加曽利E 1式 SZ
46	縄文	-	-	-	A・E・M・N	黄褐色	破片	加曽利E 2～3式 SD4
47	縄文	-	-	-	A・B・D	明褐色	破片（胴部）	SI16
48	縄文	-	-	-	A・B・E・H・K・N	明赤褐色	破片（頸部）	表採
49	縄文	-	-	-	A・B・E・N	にぶい黄橙色	破片（胴部）	加曽利E 2～3式 SZ
50	縄文	-	-	-	A・D・G・I	灰褐色	破片	中期 加曽利E 1式 SI8
51	縄文	-	-	-	A・E・M・N	褐色	破片	加曽利E 2式 SD4
52	縄文	-	-	-	D・N	にぶい黄褐色	破片	中～後期 SI13
53	縄文	-	-	-	D・H・I・N	にぶい黄褐色	破片	後期の土器 SI13
54	縄文	-	-	-	A・B・D・J	明黄褐色	破片（胴部）	加曽利E 2式 SI16
55	縄文	-	-	-	A・B・E・H・I・K・N	にぶい黄褐色	口縁	後期 堀ノ内式 円周
56	縄文	-	-	-	A・E・K	明赤褐色	破片	諸磯C式 SI4
57	縄文	-	-	-	A・B・C・E	明赤褐色	口縁の一部	L R縄文 前期 諸磯C式 SI4

第17表 石器等観察表（第47・48図）

No	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備考
1	搔器	黒曜石	2.7	3.2	0.8	5.3						B区
2	剥離片	黒曜石	2.9	2.2	0.7	3.9						表採
3	礫器	泥岩	7.1	7.7	3.5	246.5						表採
4	礫器	泥岩	6.5	6.8	4.2	258.1						SI15
5	礫器	粘板岩	10.9	7.0	1.7	173.5						表採
6	礫器	緑色岩	8.3	3.8	2.1	71.7						表採
7	礫器	泥岩	5.9	7.0	2.7	139.3						SD5
8	打製石斧	粘板岩	4.5	6.8	1.9	61.5						B区
9	打製石斧	砂岩	8.5	5.2	1.8	79.5						B区
10	彫刻刀（磨製石斧）	泥岩	4.8	2.8	1.5	22.8					分同形	SD5
11	玉石	石英閃緑岩	2.9	2.4	1.8	18.5						SD4
12	磨石	火山岩	3.7	2.9	2.4	25.3						全面被熱 全面研磨 整石 SI7
13	磨石	溶岩	4.6	5.1	2.4	38.6						SI15
14	砥石	溶岩	4.5	5.5	1.9	29.8						円周
15	磨石	砂岩	7.5	7.6	1.5	120.1						橢円形 SI15
16	磨石	石英閃緑岩	9.2	5.3	1.4	153.5						SI8
17	磨石	砂岩（細粒）	11.7	4.9	2.6	210.0						SI15
18	砥石	砂岩	11.8	8.0	1.9	254.1						SD4

第Ⅳ章 結 語

1 弥生時代の遺構と遺物

円山の丘では遺跡の構築密度がかなり高かったのではないかと推定される。遺跡北縁では古墳の所在を考えると、本調査地点で明らかになった弥生時代の方形周溝墓の築造から始まる農業社会の遺跡が高密度で営まれていたと推定される。西隣の船木遺跡のあり方は台地面全面を隈なく、重なり合って各時代の遺構が見られる状況（6頁参考図）と変わらないものであったろう。

円山遺跡からは、弥生時代中期後半から後期前半の住居跡及び方形周溝墓が確認された。方形周溝墓は周溝の四隅が途切れる形をしており、ほぼ同時期の船木遺跡でも集落と四隅の途切れる方形周溝墓が発見されている。船木遺跡では、群馬県域に類例の多い礫床を主体部とするなど、北関東からの影響が強く現れている。円山遺跡の人々とも多くの接点があったはずであり、系譜を異にする別の家族集団が向かい合う尾根に生活の場を展開していたのであろう。台地上に立地する点では滑川町の新井遺跡の方形周溝墓群と同じく谷津田経営を主体にしていたことも考えられよう。

第10・13・14号住居は隅丸方形を基本とし大型・小型の住居である。船木遺跡での弥生時代資料に次ぐものとなった。北武蔵の台地部では岩鼻式・吉ヶ谷式の土器群が普遍的に出土するが、本遺跡では13、14号住居から中部高地系の土器が伴って出土した。栗林2式系統の土器で、最近の調査では下田町遺跡からも報告されている。また、南関東に分布の主体をもつ宮ノ台式や久ヶ原式土器の壺や甕・装飾壺なども出土している。当地への波及は北限になると思われるが、入間川・荒川の流路を辿って来たものであろう。4号溝の性格は明らかにされていないが、その掘方から形周溝墓の溝である可能性もあろう。

2 古代の遺構と遺物

検出された奈良・平安時代の集落は台地部の一画が発掘調査部分であることからすると、互いの重複も頻繁で比較的密集状態であった。集落の変遷を見ると8世紀初頭から10世紀後半代まで断続的にⅤ期の変遷を窺わせる。Ⅰ期は5号住居が相当する。調査区では単独であるが、台地先端部に位置していた円山古墳群に見合う住居跡も見つからないことから、前代の住居とともに本期の中心居住域は台地先端部に位置していたものであろう。Ⅱ期は1・9・18号住居が相当する。ほぼ北東主軸をもち北壁にカマドを有していたと思われる。Ⅲ期は3・4・16号住居が相当する。住居主軸方位・カマド位置ともⅡ期と同様である。Ⅳ期は2・8・12・17号住居が相当する。2・12・17は住居主軸方位・カマド位置とも前代と同様であるが、2号住居が一致しない。Ⅴ期は6・7・11・15号住居が比定される。11号の詳細は不明だが他の住居は前代より小型化し主軸方位やカマド位置にもバラつきがある。およその時期変遷はⅠ期が8世紀前半代、Ⅱ期が8世紀末から9世紀初頭、Ⅲ期が9世紀中葉、Ⅳ期が9世紀中葉から後半、Ⅴ期が10世紀前半代にあてられる。一時期の住居数は2～3軒と推定されるが、8世紀末から9世紀代が円山遺跡の盛期を迎えており、円山遺跡独自の発展があったものと思われる。

出土遺物では、須恵器坏・土師器台付甕など一般集落のもので、高級陶磁器などはほとんど見当たらない。一方、須恵器では出土の稀なコップ型須恵器や壺Gは遺跡へもたらされた経緯が注意される。また、鉄製品の烙印についても円山遺跡の性格を際立たせるものであり次章でさらに考察する。

3 円山遺跡出土の烙印について

1) 丸山遺跡の「有」字烙印の構造 (第49・50図、第18表)

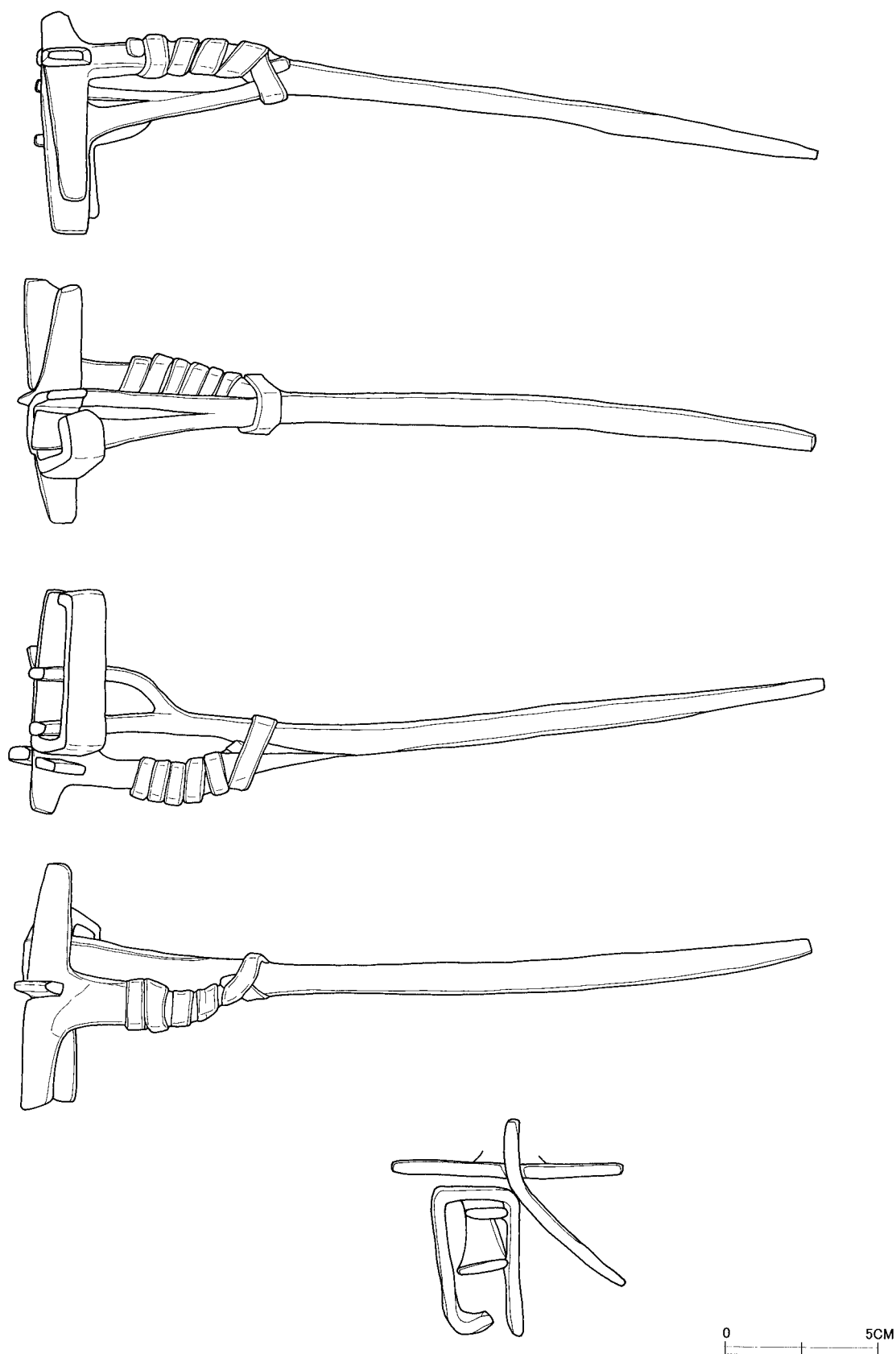
烙印は出土状態から一旦清掃され保管されていたが、平成元年までに当時の埼玉県立歴史資料館記録保存室の協力を得て大里村で保存処理がなされた。その後、銹の進行が進んだこともあり、平成21年度に熊谷市で再度保存処理をしている。二度のクリーニングにより観察し易くなったこともあり、あらためて烙印本体の構造・製作過程を考えることとした。

「烙印」については、「焼印」として報告される例もあるが、古代の牛馬私印と想定する立場から、文献にも見える「烙印」とする(註1)。また、烙印の部分名について、ここでは形状の特徴と使用法から、「印面」－「茎」－「柄」により構成されたと考え、その部分名で説明している。「印面」は文字の場合、裏文字で作られほぼ平面となる。「茎」は印面を構成する字画部品を支持する梁状の部分で、複数の小茎を束ね一本とするものや、小茎を派生させず文字を構成するものは単独の茎で支持している。また、茎の末端には柄となるべき木製の把部分が本来存在していたもので、木質等の遺存から木柄の存在が想定される場合、この取り付け部分を「柄」とする。

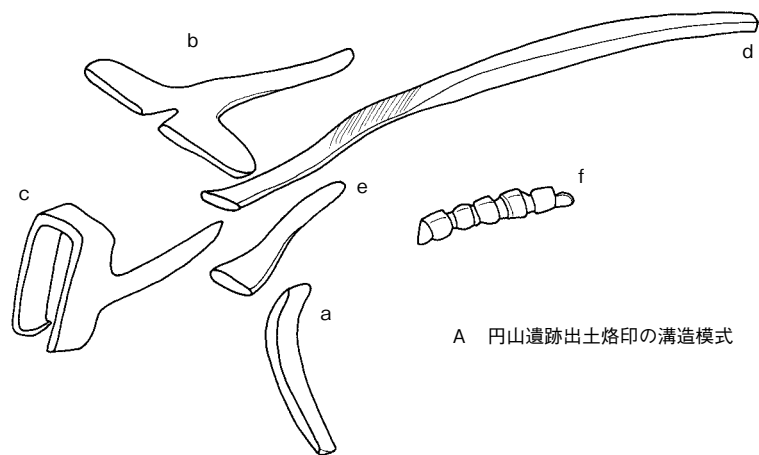


円山遺跡の烙印の構造を見てみよう。烙印は鉄製で6個の鉄片から構成されている(第50図A)。いずれも棒状鉄片を延伸した板状の部品を組成し、その側縁と末端を「有」文字の字画に相当させて全体の字画・字形を形作っている。この字画部分の部品から延伸させた小茎を主茎となる一茎イに集約させる。印面は大きく「ナ」字画と「月」字画の二つの部分からなり、それぞれの字画に相当する小茎を鍛造接着させた後、「月」字画の小茎に「ナ」字画の小茎を載せて鍛造接着させている。板部の厚みは約4～3mm、端部は2mm程度となる。幅は1.2～1.6cmで端部は丸みを持つ。「有」文字の画数は6画で、文字の筆順は第①画「ノ」、第②画「一」、第③画「ノ」、第④画「フ」、第⑤画「一」、第⑥画「一」とされる。第50図の模式図では第①画－a、第②画－b、第③④画－c、第⑤画－d、第⑥画－eに相当する。「月」部分は構造上一本の鉄板材を用いるが、他は、一画一部品を当てて製作され、字画部から延伸させた小茎をdの茎に束ねた後、部品fを鍛接して巻きつけることで補強している。細部の観察では、dは中央部を切り欠きaを挟み込んで「ナ」画をつくる。「月」画とは近接しているが接合されていない。「＝」画もややバラついてはいるが、「月」画とは接合されていない。現状では、「ナ」画と「月」画の間が、かなり狭まっていることから、土圧等の力によって変形したと考えられる。当初、各部品は印面として、ほぼ平坦に調整され、バランスよく配置されたものと考えられる。その大きさは7.6cm方形に収まるものと思われる。

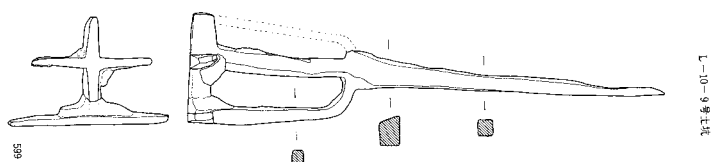
このような製作手法は鍛造－組合－結節型(I－B－イ型)というべきで、表中の出土例や図示した落川遺跡の「土」文字烙印、荒砥洗橋遺跡の「太」文字烙印でも観察される。同時代に多くの出土例がある「銅印」では鑄造による製作が一般的だが、烙印は鍛造による製造が多くの遺跡で採られていることが出土事例から知られる。その理由は、①銅と鉄の素材入手の簡便さにもよること、②鉄材は加熱しても変形の少ない使用方法に耐えること、③集落内での鍛冶が相当行われ製作は比較的容易であったことが、鍛冶遺構や他の鉄製農具のあり方などから推測できる。これらの三点だけでも鍛冶による鉄加工の在地性を想定できるだろう。当該烙印も本遺跡あるいは、帰属する主要集落での製作になると考えられる。



第49図 円山遺跡出土烙印実測図 (1/2)



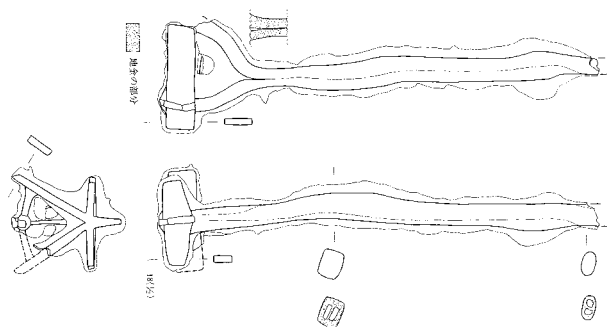
A 円山遺跡出土烙印の構造模式



E 「土」落川遺跡出土烙印

有

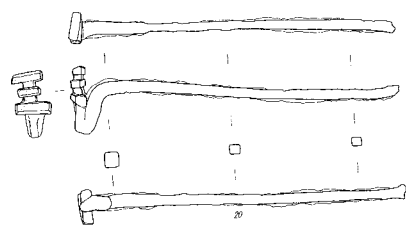
B 円山遺跡烙印の「有」印面



F 「太」荒砥洗橋遺跡出土烙印

有

C 「有」文字 六朝諸碑



G 「王」構之内遺跡出土烙印

有

D 「有」文字 中嶽靈廟碑
出典C、D『五體字類』より

第50図 「有」文字、烙印実測図・模式図

第18表 古代出土烙印の一覧

番号	遺跡の属性					形式分類					備考 法量等印面・茎mm	文献
	名称	出土地	性格	遺構	時代	文字	製造	印面	茎	材質		
1	円山遺跡	埼玉県熊谷市	集落	17号住居	9世紀前半	有	鍛造	組合	結束	鉄	78×67-264	
2	北坂遺跡	埼玉県深谷市	集落	13号住居	9世紀後半	中	鍛造	一体	一体	鉄	51×34-97	4
3	落川遺跡	東京都日野市	集落	9号土塙	9～11世紀	土	鍛造	組合	結束	鉄	57×81-250	24
4	中耕地遺跡	東京都調布市	集落	3号住居	平安中期	七	鍛造	組合	一体	鉄	26×34-249	11
5	武蔵国府跡	東京都府中市	国府	住居跡	10世紀中頃	吉	鍛造	組合	結束	鉄	39×45-250	
6	川島谷遺跡	東京都町田市	集落	遺構外	11世紀中頃	山	鍛造	組合	結束	鉄	29×34-161	7
7	高浜広神遺跡	群馬県榛名町	集落	32号住居	9世紀	第	鋳造	一体	一体	鉄	50×40-40	27
8	荒砥洗橋遺跡	群馬県前橋市	集落	9号住居	10世紀前半	太	鍛造	組合	結束	鉄	58×52-216	15
9	八木連荒畑遺跡	群馬県妙義町	集落寺院	20号住居	9世紀前半	泳	鍛造	組合	結束	鉄	35×41-132	16
10	矢田遺跡	群馬県吉井町	集落	647号住居	9世紀後半	上	鍛造	組合	接合	鉄	40×35-108	19
11	堀越中道遺跡	群馬県大胡町	集落	3号住居	9世紀後半	立	鍛造	組合	結束	鉄	60×71-230	23
12	白井北中道遺跡	群馬県渋川市	集落	53号住居	9世紀前半	口	鍛造	組合	結束	鉄	55×30-150	
13	並木遺跡	群馬県安中市	集落	住居跡	平安時代	東	鍛造	組合	結束	鉄	75×75-	
14	池子遺跡	神奈川県逗子市	集落	埋没谷	平安時代	土	鍛造	一体	一体	鉄	×-120	26
15	向原遺跡	神奈川県平塚市	集落	SX01	9世紀後半	π	鍛造	組合	一体	鉄	37×32-187	6
16	中原上宿遺跡	神奈川県平塚市	集落	16号住居	9～10世紀	井	鍛造	組合	接合	鉄	33×22-230	5
17	構之内遺跡	神奈川県平塚市	集落	3号井戸址	9～10世紀	王	鍛造	組合	一体	鉄	29×32-173	28
18	上村田小中遺跡	茨城県大宮町	集落	8号住居	10世紀	丈	鍛造	組合	一体	鉄	80×82-330	14
19	金木場遺跡	茨城県日立市	集落	47号住居	8世紀末	子	鍛造	組合	接合	鉄	111×82-	18
20	狐原遺跡	山梨県上野原市	集落		平安時代	山				鉄		
	藪田遺跡	群馬県月夜野町	集落	遺構外	不明		鋳造	一体	一体	銅	30×35-35	9
	屋敷内C遺跡	群馬県太田市			近世か							

なお、全体の字形は、「ナ」画を大きくする字形からすると、当時知られていた六朝から唐代の書体に近い印象を受ける。当時の識字の度合によるであろうが、落川遺跡では多数出土している「土」の墨書土器と烙印の字画が近似しており、遺跡内で認識されていた字形が反映しているとみられる。なお、落川遺跡での「土」は集落を表象する文字と想定する向きもあるが、本遺跡を含め類例に乏しく集落の表象としての文字の存在には円山遺跡では踏み込む準備がない。

前記の製作上の特徴を挙げてきたがその特徴を整理すると以下のようになる。

- イ. 鉄製 鍛造 棒状素材から板状材とし文字の字画部品を作出する。
- ロ. 字画部品は打ち延ばした板状材の側縁を字画部をとし、一方に支持のための小茎をつくる。
- ハ. 字画部品の小茎から茎に強固に束ねて強度を保ち文字を構成する。
- ニ. 茎の末端の銹化が顕著であり、この部分が柄の木質部と想定された。

第18表は烙印の出土遺跡を集成したもので、形式分類については、1－製造（製造方法）、2－印面（印面の構造）、3－茎（茎の構造）、4－材質（使用素材）の視点により類別し表中に略記した。

- 1、製造方法 Ⅰ類－ 鍛造法 Ⅱ類－ 鋳造法
- 2、印面の構造 A類－ 一体型 素材一体で印面を構成する
 B類－ 組合理 素材を複数使い組み合わせて印面を構成する
- 3、茎の構造 A類－ 一体型 印面から茎まで一の素材から造る
 イ類－ 結束型 印面を構成する文字部品を茎に束ねる
 ウ類－ 接合理 別造の印面部に茎を接合する

円山遺跡烙印に比較的近似している群馬県荒砥洗橋遺跡9号住居出土の烙印を例にとって比較してみる。荒砥洗橋遺跡例（第50図F）は印面「太」をI－鍛造、B－組合、I－結束の型式で造られる。「太」は4字画であり、筆順は①「一」、②「ノ」、③「へ」、④「、」である。これに対応する部材は、①「一」が、②・③には一片の鉄板材を折り返して鍛接することで「人」状に整形された部材を作り、①に組み込む。これは実測図からは見極めがたいが同報告書掲載のX線写真から、①を切り欠いて②③を組み込んでいると推定される。最終画の「、」は「、」のみを梁状に作り出して茎に鍛接して造り出す、その際「人」字画と「、」の強度を高めるためそれぞれの字画から小茎を延伸して互いに接合している。この「太」烙印にみる結束組合による製作法は円山遺跡「有」烙印と共通し、複雑な文字（画数の多い文字）にも適している。

他の出土烙印でも円山遺跡と素材から製造工程を同じくするものが比較的多いとみられるが、細部の意匠、特に字形をデフォルメする点では安中市並木遺跡の「東」例など好例である。鍛冶工人独自の創意による印面字画は組合型又は結束型によって製作している場合が多く、矢田遺跡の「上」例など字画の少ない場合には一体型が多いようである。なお、銅印に多く用いられる鑄造製印面の場合は、字画にはあまりとらわれず様々の文字が鑄出することが可能だが、烙印に使用される例は少数と考えられる。

2) 円山遺跡と牛馬牧の存在

円山遺跡でとくに注目された「有」文字烙印は、本遺跡の性格および烙印の歴史的意義などを考えさせる。

第51図は「慕帰絵詞」中の乗馬の様子で、浄土真宗を開いた親鸞の曾孫、覚如の伝記絵巻の部分である。観応2年（1351）までに完成していたとされる絵巻物で、当時の民衆生活・調度などを如実に描いた貴重な資料とされる。本図は、第五巻－大谷前室門外の場面で、馬に乗る僧（覚如）の姿を後方より描いている。

絵中の馬、髀の部分（左腰上）には「△」マークがあり、これが烙印（馬印）と認められている（文献8）。△印の烙印は、馬の左腰の上部付近あり、人の眼につきやすい部分といえる。この絵は烙印まで細かく描かれた数少ない例で、烙印の歴史を知る格好の資料といえ、実際に絵師はモデルの馬を見て描いたものと考えられる。

京の都、四条大路と東京極大路の交差する場所にあった釈迦堂に、一遍が逗留し踊念仏を興行した。貴賤を交えた都人が堂の内外に参集し、周辺は大変な雑踏になった。第52図はこの群衆の一場面で主人を待つ馬同士がいさかいを始めたところである。本図は「一遍上人絵伝」第七巻（東京国立博物館蔵）の京極四條釈迦堂の部分で、暴れる白馬の左髀「有」文字が大書されている。本絵巻では唯一烙印と推定される例である。

あご髭を生やしたしゃくれ顔の男は暴れる白馬の御者



第51図 烙印のある馬の姿[◎]
「慕帰絵詞」より筆者作画



第52図 「有」文字烙印のある馬[◎]
「一遍上人絵伝」第七巻より筆者作画

であろうか。この男は「三鱗」文の着物を着ており、あるいは六波羅探題方の北条家中の者か。彼は左方のむちを持った男に声を掛けてるようにみえる。「白馬」は身分の高い武士の乗馬で、その髀にある「有」文字はその位置から馬印と考えられ、焼印であった可能性がある。ただ、この絵巻では「有」は筆書のようにも見える。大振りの文字はそぐわない感もあるが、白馬に記すことでより威信を示すシンボルとなったものであろう。但し、律令制の厩牧令では馬は左髀に印する規定であることに本例は外れている。右髀は牛の場合に印するとされていた。絵巻の描かれた鎌倉時代末ころには牛馬の分別が廃れたものであろうか（註1）。本絵巻の製作意図には馬印の示す乗馬の主が誰であるのかを示すためあえて記したとも思われる。しかし、それは本文の問題ではないので衣文服の男と有の馬印の内容には触れることはしない。

なお、「有」文字は円山遺跡の烙印の文字と奇しくも一致するが、遺物と絵巻の時代差が400年余あることから関連性は無く、また文字の示す意味も同一と考えることは合理的な理由がみつからない。この文字の意味についての研究は遺物と絵巻双方の今後の課題である。

実際の牛馬に印された烙印の実例は前述の描写以外にほとんど伝えられていないが、古代の烙印の実物は、埼玉県では円山遺跡の「有」例とともに深谷市（旧岡部町）の北坂遺跡から「中」文字の烙印例が発見された。他に群馬県・東京都・神奈川県などから十数例出土しているが、いずれも文字種は異なり（註2）、9世紀から10世紀の住居跡などから置き去りされたように発見されている（第18表）。

本来烙印の使用目的は消すことのできない永久の印を器物に附すことにより、その器物の帰属・所有を明示したものである。「厩牧令」の規定や当時の記録では、政府が管理する牧場で育てられた牛馬に施すことになっていた。また、校印に際して牧子の人手が足りなければ近隣の農民を使役させていた。

○牧駒積校印條 「在牧駒積 至二歳者 毎年九月 國司共牧長對 以官字印 印左髀上 積印・右髀上並印訖 具録毛色齒歳 為簿兩通 一通留國為案 一通附朝集使 申太政官」

○校印牧馬條 「須校印牧馬者 先盡牧子 不足 國司量須多少 取隨近者充」

この規定では、政府の管理牧場である「官牧」又は「御牧」では、育成した牛馬に「官」の文字を烙印し、一定の疋数を貢納させ伝馬や軍馬として乗馬・輸送など様々の用役に用いることを目的としていた。

実際に置かれた武蔵国の牧は「石川牧」（東京都八王子市）、「小川牧」（東京都あきる野市）、「由比牧」（東京都八王子市）、「立野牧」（東京都府中市）などの官牧に加え、埼玉県内に所在が想定される「秩父牧」「小野牧」「石田牧」「阿久原牧」「檜前牧」の名が見える。しかし、未だ遺址の確定には至らず、なお文献に現れない小規模な牧や私的な牧の存在も想定され、東國での牛馬飼育は国・郡・郷・豪族・寺院など多方面での対応が予想されている（註3）。

円山遺跡の『有』文字の烙印は、令外の私印であり、官の牧場で使用されたものではない。急崖で区分された台地上に立地する本遺跡の位置を考えると周囲の尾根の一部や谷津を囲み土地を区画して牧とすることが容易な地形である。また、低地部であっても当時の台地下の沖積低地は和田吉野川・元荒川の自然堤防や中州状の場所である「島」を活用して牧とすることが容易であったと考えられる。九条家文書背紙に見える「牧津里」・「牧川里」の地名はこのような牧の実態を反映した名称と理解される（註4）。円山遺跡周辺での牛馬飼育でも、特に馬の飼育は誤りないところであろう。

円山遺跡の近辺に牧が置かれた背景には、牧の立地に適当地勢的な要因のほかに交通条件の必然性があった。武蔵国では8世紀後半まで官道「東山道武蔵路」の行路が武蔵国府から北上しており、埼玉北部では現国道407号に添うと想定すると、一定の距離で設置された「駅家」の一駅を古くから馬信仰の篤い妙安寺の所在する東松山市上岡付近に想定することができる。先の条里坪地名と烙印は、牧・駅家・古代道など

の遺跡環境と馬との関わり合いを強く窺わせるものである。東山道武蔵路は宝亀2年（771）には廃止され公の維持から離れるが、烙印と一緒に出土した須恵器などの遺物は、8世紀末～9世紀前半の時期を示している（註5）。このころは駅家に伴う官牧も廃止されたと推定されるが、牧場自体は地元の有力者に払い下げられるなどして、私牧となり存続したと想定される。その有力者は、私有地の開墾を進め大土地所有者となっていた富豪の輩であり、郡司やその一族などの有力者と考えられる（註6）。

次に円山遺跡の「有」烙印の造られた背景を私牧の様子と当時の牧場経営の面から考えてみる。第18表のように武蔵国周辺での烙印はすべて文字種が異なる官印ではなく私印である。集落の住居跡から同時に出土する墨書土器に書かれた文字と一致する場合も知られるが、烙印の性格からすると烙印文字の意味は墨書土器の場合に想定されるまじないの意味と考えるより所有や帰属を明示したとする方が妥当である。印文がすべて異なるということは、異なった多くの集団に帰属した牛馬の弁別を容易にする必要があったからに他ならない。当時の国史の記録や「類聚三代格」という法令集には、牛馬の放牧についての出来事や具体的な法令が示されている。古代の牛馬の飼育は自由放牧が普通で、基本的に官も民も、春夏期は繋飼（牧場内）で、秋冬期は放飼（牧場外）とした。春夏期は農作物の食害を防止するためと子牛子馬の産育のために、秋冬期は牛馬の群れを分散し森林・原野に越冬させることで交配も容易とした。牧は政府の用役に充てるため牛馬を飼育管理する牧場として設置され、必要な疋数の牛馬を貢納させていたのであり。そのため、牛馬の習性と生活の周期をよく理解した上で自然な循環の中において実際の飼育を行っていたのである。実際、公への必要な疋数の貢納さえ満たせば実態は現地へ任せることで官牧も私牧へ移行していったとされる。

上記の裏付となる資料には「類聚三代格」の延暦15年（812）2月25日の禁令がある。

「太政官符 定百姓私馬牛印事 長二寸 広一寸五分以下 右 得上野国解稱 部内百姓等私馬牛印 過官印大 奸盜之徒盜取官馬 焼乱其印淪亡明驗 若不加嚴制 奸偽難断者 右大臣宣 奉勅 所申慥理 宣下符七道諸国 令依法作 延暦十五年二月廿五日」

この禁令により、百姓の「私馬牛印」は、長（高さ）2寸（5.9cm）、広（幅）1寸5分（4.4cm）に決められたことがわかる。（ ）内は平安時代に使われていた大宝律令の尺度で1尺29.6cm、1寸2.96cmを基準としている。また、2月付での発布は、春先に牛馬を牧へ追い込み選別する作業をおこなう時期に当てており、横領を抑制する意図がみえる。また、この文意の背景には、①牛馬を放飼としていること、②帰属を明示するため、民間（百姓）でも自己の烙印（「私馬牛印」に当たる）を持ち使用していたこと。③放飼の制限はしていないこと。④そして私の烙印を悪用して官の馬牛を横領する者が多かったこと。前記の結果として、⑤全国に百姓の牛馬の烙印について大きさを制限したことである。

円山遺跡の烙印は、私印に間違いはない。しかも、法量は法令の基準を逸脱し一回り大きく、この禁令に違反する。禁令の時期と遺跡の時期も一致することから、円山遺跡の烙印は、もはや公に使用することはできないこととなった。直ちに、隠匿あるいは遺棄されるべきものであり、実際に、円山遺跡での出土状況からは遺棄されたとみられる。

円山遺跡の人々が「有」の烙印を実際にどう利用したかは前記の想定域を出ないが、官の牛馬を横領した百姓たちとは、豪族や富豪の輩を含む人々であり、後に武士勢力として力を蓄えてくることが知られ、早番、彼らは荘官・地頭となり官の力を排除し、一方で自らの牧の領有・経営者となると、牧は軍馬育成の場、騎馬訓練の場とされていくと考えられる。東國での馬使い・就馬の党が興り、やがて「兵（つわもの）」として武士団化していく素地がここに整ったといえ、耕地とともに領有されるべき土地に加えられていく。公が官牧の経営を放棄した後も、牧は重要な武力養成の基地であり、関東での烙印が10世紀代まで存在する理

由の一端として、私牧同士での牛馬飼育とその所有を明示する飼育方法が変わらず採られたことを示している。

熊谷市内村岡は平将門の叔父でもあり、畠山氏の祖と仰がれる平良文の根拠地となっている。平良文は鴻巣市域に盤拠したとされる源経基の流れを汲む源宛と武力を競った逸話が「今昔物語」に載せられており、つわものの勇姿が描かれる一方、自らの郎党・所従を率い武士団化していたことも明らかであった。

(文責 新井 端)

- 註1 厩牧令には烙印の規定があり、官牧では二歳になった犢と駒はその年の9月に、国司・牧長の立会のもと、「官」の文字の烙印が印された。犢は髀（股の外）右腰上に駒は左腰上に付けることになっていた。中世までは△などの記号がみられるが、中・近世では家紋などの意匠が加わってくる。
- 註2 すべて牧用かの論議は残るが、烙印の文字種には「太・泳・上・丈・中・有・土・七・吉・井」などがあった。これらの文字が何に基づくものか不明であるが、所有者の表象として当時は周知であったはずである。
- 註3 古代の官牧の所在については、諸説あり決定していない。名称の変更も見られ、9世紀初頭に再編されたとも考えられている。遺跡についても確実な牧遺跡は未発見である。
- 註4 9世紀代の記録と考えられている九条家文書背紙に記された文書に「大里郡条里坪付」がある。現在の埼玉県熊谷市大里地域に該当する。条里に区分された地名が書き上げられており、牧に関連する地名が「牧津里」、「牧川里」がみえる。この二つの里は水辺に隣接したか川沿いの場所が牧とされたものである。厩牧令の「牧地焼草條」では、2月前までに草生のために牧地の野焼を行うこととしているが、山林や竹林を除くとしている。これは山林などへの延焼を避けるためであり、牧地に適した場所として台地上の隔絶された地域や河畔などが利用されたものと思われる。また、馬を水辺の牧に野飼いしたことが広く行われていた例証として、民俗学の側から馬と水神についての関係が注意されている（「河童駒引考」）。
- 註5 円山遺跡の出土須恵器で「壺G」という徳利状をした長頸壺がある。限られた時期と場所からしか出土していないため、時期の決め手となるほかその興味深い性格が推定されている。生産地は駿河国西部（静岡県三島市周辺など）、武蔵国北部（埼玉県南北企鵝跡群）で、時期が8世紀後半から9世紀初頭という長岡京（京都府長岡京市・向日市）の造営前後に限られている。短期間に大量に作られた背景として、光仁天皇から桓武天皇の時代は、長岡京・平安京という新都の建設と東北経略という蝦夷征討の軍事を興しており、労役と兵事が重要な政策であった。壺Gはこの時期の都から東北への道々と多賀城などの城柵から出土している。当時の社会と壺Gの携帯性や耐用性から、「軍防令第6条備備条」の規定による「水桶」（携帯用の水筒）が壺Gと考えられている。おそらく、東国で挑発された兵士が整えた装備として、この壺Gを水筒として携帯したのだろう。東へは蝦夷征討の兵士が、西へは京を守る衛士がもたらしたものと考えられている。なお、水筒説以外には特産品の容器、仏花器との説がある。
- 註6 かつての熊谷市域でも、承和12年（845）武蔵国分寺七重塔を独力で再建した男衾郡司壬生吉志福正が富豪として記録されている。また、この時代、度々の征夷軍興により東國諸国では兵員・物資の徴発・運送に加え、富民をはじめ一般の民までが柵戸として数千人単位で蝦夷地へ強制的に移住させられている。

円山遺跡

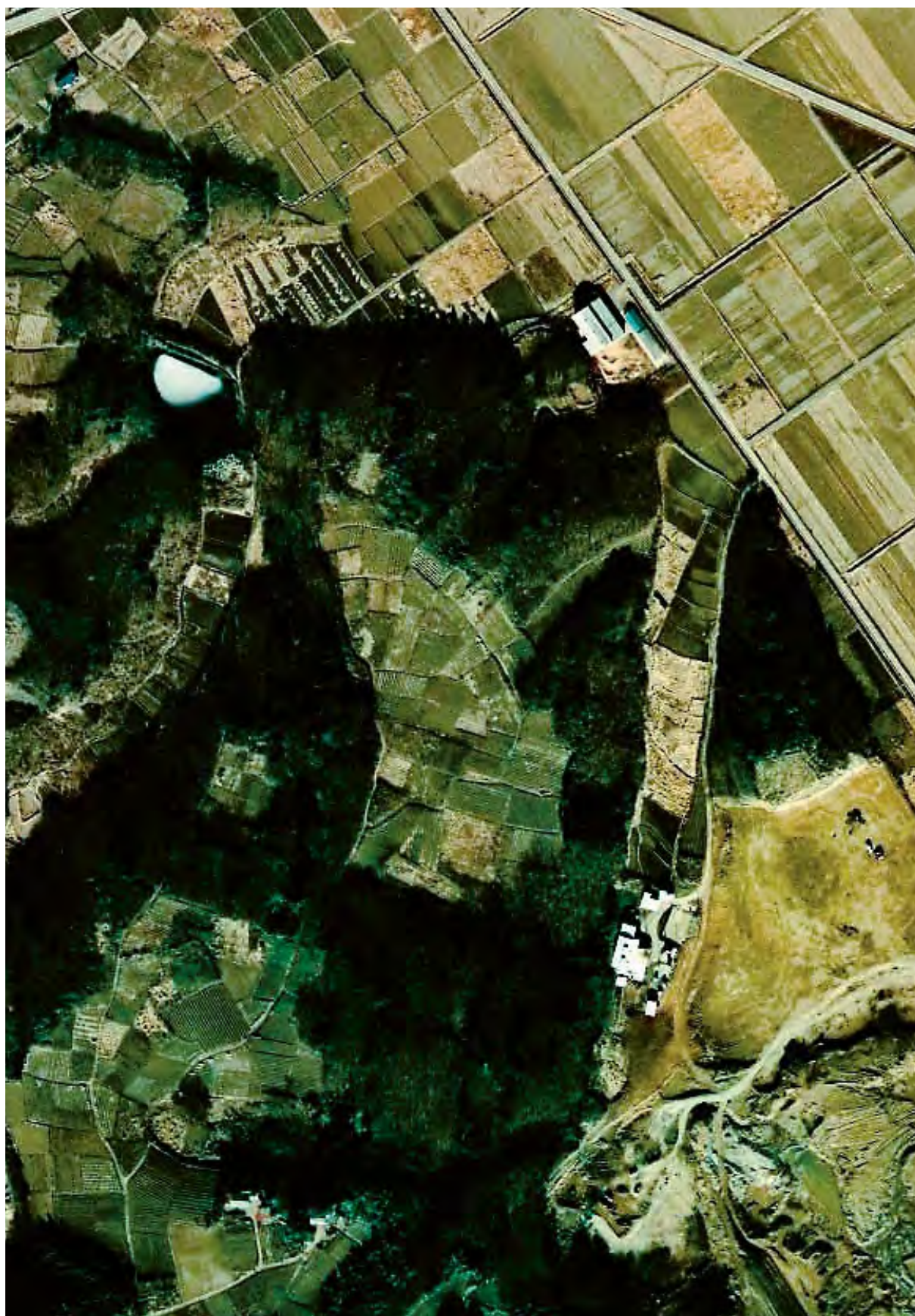
引用・参考文献

著者・機関名	刊行年	論文名・図書名・巻号数
1 安田 初雄	1959	「古代における日本の放牧に関する歴史地理的考察」『福島大学学芸学部論集』第10号
2 石田 英一郎	1966	新版『河童駒引考』 東京大学出版会
3 小松 茂美 編 中央公論社	1978	『一遍上人絵伝』 日本絵巻大成 別巻
4 財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	1981	『清水谷・安光寺・北坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集
5 中原上宿遺跡発掘調査団	1981	『中原上宿遺跡』
6 神奈川県立埋蔵文化財センター	1982	『向原遺跡』
7 町田市小田急津野・金井団地遺跡調査会	1984	『町田市小田急津野・金井団地遺跡調査会』
8 宮本 常一 編	1984	『墓埴絵詞』『日本常民生活絵引』
9 財 群馬県埋蔵文化財調査事業団	1985	『藪田遺跡』 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集
10 群馬県	1985	『群馬県史 資料編4 原始古代 文献』
11 調布市教育委員会 遺跡調査会	1987	『調布市中耕地遺跡』
12 埼玉県	1987	『新編 埼玉県史 通史編』
13 大里村教育委員会	1988	『北郭遺跡』 大里村埋蔵文化財調査報告書 第1集
14 大宮町教育委員会	1988	『上村田小中遺跡』
15 財 群馬県埋蔵文化財調査事業団	1989	『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』 群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書 第85集
16 妙義町遺跡調査会	1990	『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡』
17 大里村 原島礼二 他	1990	『大里村史 通史編』
18 財 茨城教育財団	1991	『金木場遺跡・向畑遺跡』
19 財 群馬県埋蔵文化財調査事業団	1992	『矢田遺跡』Ⅲ 群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書 第131集
20 井上 尚明	1994	「コップ型須恵器－奈良時代の計量器について」『考古学雑誌』第79巻4号
21 新日本古典文学大系36 岩波書店	1994	『今昔物語集』巻25第3 「源充と平良文と合戦せること」
22 大里村南部遺跡群発掘調査会	1997	『大里村南部遺跡群Ⅰ』
23 大胡町教育委員会	1997	『大胡北部遺跡群・堀越中道遺跡』
24 日野市落川遺跡調査会	1997	『落川遺跡Ⅰ・Ⅱ』
25 山中 章	1997	「桓武朝の新流通構造－壺Gの生産と流通－」『古代文化』VOL.49
26 財 かながわ考古学財団	1999	『池子遺跡群IX No1-A 東地点・No1-A 南地点』 かながわ考古財団調査報告45
27 財 群馬県埋蔵文化財調査事業団	1999	『高浜広神遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告書 第252集
28 平塚市遺跡調査会	2000	『構之内遺跡発掘調査報告書』
29 新訂増補国史大系 22 吉川弘文館	2000	『律・令義解』
30 財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	2004	『下田町遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第296集
31 江南町・森田 悌 他	2004	『江南町史 通史編上巻』
32 独立行政法人 奈良文化財研究所	2004	『駅家と地域社会』
33 財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	2005	『下田町遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第301集
34 財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	2006	『下田町遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第319集
35 財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	2007	『下田町遺跡Ⅳ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第320集
36 埼玉土器観会編	2007	『埼玉の弥生時代』
37 出縄 康行・熊谷市立図書館編	2009	「大里地区の考古資料」『1市3町合併記念誌－新市誕生・指定文化財』
38 財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	2010	『宮町遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第367集

円山遺跡写真図版



出土遺物整理報告作業



CKT74-18、C91-25

1974年

図版2



1980年、CKT80-3、C7-22



1986年、CKT86-2、C7-21



1998年、CKT98-2X、C2-8



発掘調査区航空写真（北から） 円山丘、左方は船木の丘



発掘調査区航空写真（西から） 左方B区、右方A区

図版4



発掘調査区A区遠景（西から北面）



発掘調査区B区遠景（A区より望む）



発掘調査区A区遠景（西から南面）



同A区遺構確認状況

図版6



方形周溝墓完掘状況



北辺周溝



東辺周溝



南辺周溝



西辺周溝



方形周溝墓主体部



方（円）形周溝墓完掘状況

图版8



第1号住居跡完掘状況



第2号住居跡完掘状況



第3号住居跡完掘状況



第4号住居跡完掘状況



第5号住居跡完掘状況

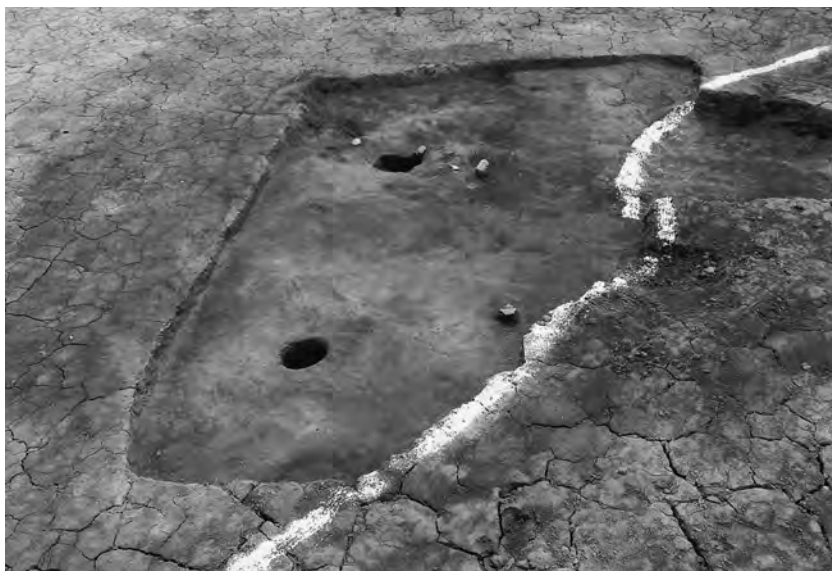


第7号住居跡完掘状況

図版10



第6号・8号・9号住居跡
完掘状況



第10号住居跡完掘状況



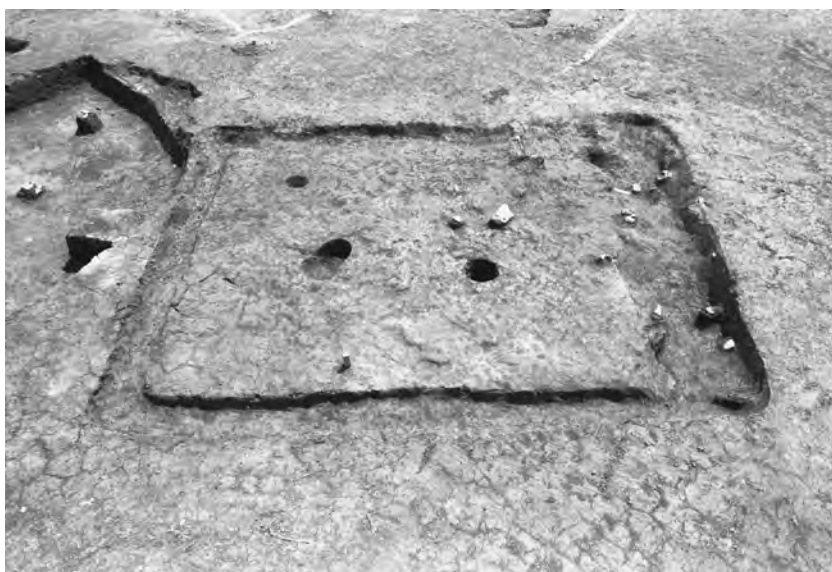
第11号住居跡完掘状況



第13号住居跡完掘状況



第14号住居跡完掘状況



第15号住居跡完掘状況

图版12



第16号住居跡完掘状況



第17号住居跡完掘状況



第18号住居跡完掘状況



第16号・17号・18号住居跡遺物出土状態



第18号住居跡烙印出土状態



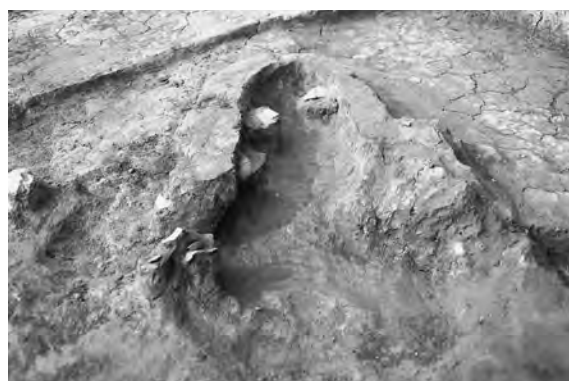
第16号・17号・18号住居跡遺物出土状態



第16号・17号・18号住居跡完掘状況



第4号住居カマド跡



第8号住居カマド跡



第1号溝



第5号溝

図版14



第8図6



第8図6 底部、文様部



第7図1



第7図2



第7図5



第7図5 底部



第7図5粗の拡大 粉痕



第11図2



第11図4



第7图4



第7图4



第11图6



第13图1



第13图2



第15图2

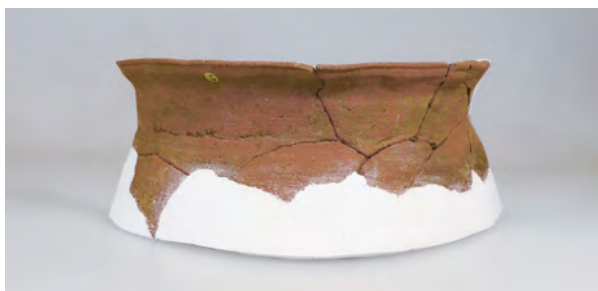


第15图3



第15图6

图版16



第15图 7



第15图 5



第15图 8



第15图 9



第15图 10



第15图 14



第18图 8



第15图 11



第15图 13





第18图 7



第20图 1



第20图 7



第20图 8



第26图 1



第20图 10



第24图 4



第24图 6



第24图 8



第24图 9



図版18



第27図 3



第30図 5



第30図 2



第30図 9



第30図 1



第30図 3



第33図 3



第33図 4



第31图10



第36图 4



第36图10



第36图 1



第36图 5



第36图11



第36图 6



第36图12



第36图 7



第36图13



第36图 8

图版20



第36图15



第36图9



第36图16



第38图1



第38图3



第38图10



第36图18



第38图11



第39图17



第39図22



第42図 1



第45図 3



第45図16~27



第46図 1 ~ 30



第46図31~57

図版22



第40図 5 (保存処理前)



第40図 5 (保存処理前・鏡写し)



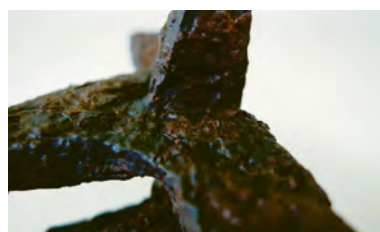
印面



印面（鏡写し）



結束部拡大



結束部



印面拡大



烙印側面（第49図）

報 告 書 抄 録

ふりがな	まるやま							
書 名	円山遺跡							
副 書 名	熊谷市内遺跡（旧大里町）の発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編 集 者 名	新井 端							
編 集 機 関	熊谷市教育委員会							
所 在 地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		世界測地系		調 査 期 間 調査担当者	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東緯			
まるやま い せき 円山遺跡	くまがや し みの わ あざまるやま 熊谷市箕輪字円山 637番地 他	11202	64-012	36° 4' 48"	139° 25' 9"	1985.6.17 ～ 1985.9.17	3,000	土・山砂 利採取
管理番号 （2401）						小久保徹 杉崎茂樹 田中正夫 若松良一		
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
円山遺跡	集落跡	弥生時代 中期・後期 及び 奈良・平安時代		弥生時代中期住居3軒 弥生時代後期方形周溝墓1基 平安時代住居15軒 溝1条		弥生式土器・平安時代須恵器、土師器、鉄製烙印		南関東系の土器を伴う、集落と墳墓の北限になる、発見例となった。平安時代の集落の性格が古代牛馬牧に関わることが推測される。

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

円山遺跡

熊谷市内遺跡(旧大里町)の
発掘調査報告書

平成23年3月21日 印刷
平成23年3月25日 発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会
〒360-8601埼玉県熊谷市宮町二丁目47番1
電話 048-524-1111

印刷／(株)きょうせい